御伽のロカイオ

雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御伽のロカイオ

【Ｎコード】
Ｎ６７２７Ｒ

【作者名】
雨宿

【あらすじ】
物語というものは始まりが御座います。その話を思いつくにあたってのひらめきとも言えるものが存在するのです。
さて、その閃きそのものが実在するとしたらどうでありましょう。ここから始まるのは、童話の中の人であって中の人でない者達のお話。彼らは皆適当に己を引き継いで、しかし、意思を持って行き先を目指す最中である、そんな人々が織りなす童話で御座りまする。

序章　普段の日常（前書き）

この物語はフィクションにて幻想で御座います。もし、このお話の行動をなさって重大たる結果を招いたとしても、当方一切責任を取りかねますので、どうぞご了承を。

序章　普段の日常

序章　普段の日常

日が天高く上った午前十一時。
焼けつくようなコンクリートの匂いからは程遠い、自然に囲まれた街がある。
東京都洞和市。八王子脇の小さな市だ。
そこには、ある学校が存在する。
小高い丘の上に存在し、最寄駅から徒歩二十分。
建立者が広大な土地を買い占め、その土地を生かして造られた、私立清耀学園。
小中高一貫教育で偏差値は都において中の上。
その校内、三年γ組の教室内には喧騒が広がっていた。

椅子が空中を乱舞する教室内、複数の生徒が激しく言い争っていた。
「死ねやヘンゼル！」
「元だって言ってんだろ、ジャック！　俺があんなシスコンな訳ねえだろうが！　つーかいい加減諦めろボケが――！」
「てめえら邪魔なんだよ！　どけー！」
「ちょ、ちょっと落ち着いてください皆さん！」
眼鏡をかけた男子がその争乱の中、一人止めに入るが誰の目にも入っておらず、騒ぎは収まる気配を見せない。
必死に眼鏡少年が説得を繰り広げる中、ジャックと呼ばれた一人の少年が傍にあった椅子を掴み、教室のセンター最後席にいる男目掛けて投げつけた。

「おらあああ！　ぶっ飛べ！」
しかし、座っている男は身をかがめて避け、椅子はそのまますっ飛んで行き、
「ふっ、甘いな。その程度で私が譲るとでも――」
「あ……」
「皆さん、落ちつ？？ぶっ！」
椅子を投げた者の声と打撃音と共に、椅子が眼鏡少年の側頭部に激突した。
石を石を擦り合わせたような、鈍い音がした。
眼鏡少年の眼鏡が吹き飛ぶ。
周囲の人間の動きが止まる。
ゆっくりと椅子が落ちて行き、木の床に当たり軽い音を立てる。
眼鏡を失った眼鏡少年はこめかみから血を垂らしつつ、争いの張本人たちへ機械仕掛けの人形のように向き直る。
「……い、い、加、減、に――」
怒りに満ちた声で一語一語を区切りながら言葉を放つ少年。だが震えているのは声だけで無かった。
身体。
ワイシャツとブレザーに包まれた彼の体が震えている。寒さや恐れによるものとはまた違う。
その震えは体に変化を及ぼした。
学生服の隙間から狼のような獣の毛がはみ出してきたのだ。
色は白。その白毛は瞬く間に上半身に広がった。
両腕は毛で覆われ、指爪は異様なほど長く伸び刃のような鋭さを持っている。
変化はそれだけではない。
顔の骨格は変わり、まるで狼の頭のように、そして全身の筋肉が盛り上がり新たな姿となる。
人狼。
顔は狼で残りが狼と人間が混じったような存在。

今の眼鏡少年を表わすには、相応しい一言だ。
「??しとけや馬鹿どもが??!!」
体格も変わり、声も重くなった元眼鏡少年の人狼が叫ぶ。
伸縮性のある制服に無理やり体を押し込めたその姿を見た騒ぎの張本人たちは、
「やべえっ、委員長?獣皇化?しやがったぞ!?」
「ど、どうする?!逃げるか?」
「い、委員長の、僕の言うことが聞こえてねえのか、てめえら――!」
騒いでいた少年たちが走り、教室から出ようとするが、背後から彼らを追う人狼の方が明らかに速い。
「??っらあ!」
少年の一人が手近にあった鉄製の巨大三角定規を回転付きで投擲するが、人狼の爪に呆気なく切り裂かれた。少年たちはたじろぎ、
「あ、あいつ本気だ。マジ逃げろ??!」
「待てやゴラァああ??!!」
教室の外に走り去っていく少年数人とそれを追っていく元眼鏡少年。
他の皆は慌てることなく冷静にその状況を見ていた。
「傍から見てると何言ってんのか、何やってんのか全く分からんな。というか何故、席替えくらいでこうも激しくなるんだろうか……」
声を出したのは、騒ぎの中心から離れた所??前から三番目の窓際の席にいる少年だ。
「何言ってんのよ、翔人(かけひと)。さっきまであんたも一緒にドンチャンやってたでしょうが」
言葉を返したのは少年の背後にいた少女。
長めの黒髪を後ろに流し、黒いスカーフを首に纏っている
彼女の言葉に、翔人と呼ばれた少年、天條(てんじょう)翔人は吐息しつつ、
「俺は他の奴らみてえに頑丈じゃねえんだよ、凪柄(なぎつかみな)美菜。あれ以上続けていたら俺も被害を受けただろうし。それに一番後方の席は逆

に教師に見つかり易いし、昼寝するにはこの席がベスト。この席を手に入れたのなら騒ぎに加担する理由がないだろうが」
それにしても、と天條が思うのは自分たちの事。
先程の人狼眼鏡少年もそうだが、ここにいる皆は一般から見て少々独特だ。
「しかし、？獣皇化？なんて久しぶりに見たな」
天條の呟きに、凪柄と呼ばれた少女が返答する。
「まあね。あれはあんたや私みたいな特性とは違って、外見上の影響が大きすぎてそこら辺じゃおいそれと使えないから。普段から力を自制してたんじゃないの？」
「……特性――童話の根本の力、か」
童話。
それはお伽話。有り得ない世界の物語とされている。
だが、その世界の元となったものは何か。
全ては無から生み出されたものであるのか。
答えは否。真実は単純。
……俺たちのような存在がいたからだ。
特殊な能力を持つ血族。超常的存在。
童話の作者はその能力を見聞し、それを題材にして物語を創造したのだ。
……まあ、俺たちが元では無い、完全に零から作られたものもあるがな。
それでも、自分たちの先祖が題材の作品が多いのは確かだ。
考えていると教室の外側からぎゃあ、と悲鳴が聞こえ、教室後方のスライド式のドアをぶち破りながら少年二人が吹き飛んできた。
ドアの破片を撒き散らしながら勢いを持って床を転がる少年たち。
その向こうには深呼吸して落ち着きを取り戻そうとしている人狼がいた。
少年二人はこのままでは自らへの直撃コースだ、と天條は判断する。

恐らく止まることも無い。故に、
「――と」
天條は跳んだ。
否。宙を踏んだ。
まるでそこに見えない足場があるとでも言うように、天條は床から高さ一メートルほどの空中まで駆け上がり、立つ。
眼下では少年二人自分の席に激突していた。
……知覚した空中を地と認識する事によって固定化し、そこを足場に空中移動を可能とする？自由の空（ピーターパン）？か。
使うのは久々だ。
……委員長の事言えねえな、俺も。
個人差で強弱はあれども自分の血族ならば全員が保有する能力だ。
初等部の頃から見慣れている為なのか級友はこれを見て驚く事は無い。
しかし、彼らにとってはこの力は不思議なものらしい。
何故、認識する事だけで空を飛べるのか分からない、ということだ。
説明を求められた時もあるが、己にとってこの能力は自然と身に付けていたものであり、あって当然の物だ。
あるから、ある。
そうとしか言えない。
自分の能力を他人に理解して貰うことは不可能なのだろう、と天條は思う。
……それは俺だけに言える事じゃねえけどな。
そういった事が分かってきたからこそ、初等部高学年の頃には誰も他人の能力の事を尋ねたりはしなくなったのだろう。
思いつつ、天條は人狼の方を向き、
「委員長――、俺にあんまこの能力使わせんなよ。使いたくない理由知ってんだろ？」
「御免御免、天條君。ちょっと血が昇っちゃって。そこの馬鹿共に土下座させるから許してくれ」

人間の姿に戻りかけている人狼が両手を合わせて謝罪してくる。それとほぼ同時に土下座を敢行する眼下の少年二人。
床に降りた天條は、自分の席横の床にへばり付いている少年二人を委員長に引き渡し、
「……皆濃いよな。題材的にも能力的にも人格的にも」
言いつつ自らの座席を立て直し始めたが、そこで天條は半目になった凪柄に気付く。
何だ一体？　と問うと、
「いや、……先祖ピーターパンで単体飛行可能な人類のあんたがそれを言うか？　それともこう言ってやろうか。第十八代ピーターパン、天條翔人」
凪柄の言葉に天條は慌て、
「そ、その名で俺を呼ぶな。あんな大人嫌いのロリコン&ショタコン野郎と一緒にすんじゃねえ！　大体お前こそ茨姫、？？に出て来る十三番目の魔女だろうが」
「悪かったわね、そんな端役で！　どうせ悪役ですよ、私は。あんたは良いよねほんとに。正義の味方で主人公だしね！」
自棄になって捲くし立てる凪柄だが、段々哀れに見えてきたので、
「……いい加減、悲しくなって来るから自分家の童話の名前で呼び合うの止めね？　多分そっちの方が俺たちにとっては良い気がするんだが」
「そ、それもそうね。自分で言っても案外ダメージ来るわ、これ」
二人は俯きながら納得した。

話を終えた天條は自分の机を新たにセットして座り直す。
周囲を見ると、破砕したドアの片づけと席替え騒動は既に終わっており、大騒動の発端となった少年らが正座で人の姿に戻った委員長から説教を受け、他の物は教室のセッティングを直し、正座から逃げ出そうとした少年が首を掴まれて壁をぶち破って飛んで行った。

いつもの光景であるが、何かが足りない気がする。
今はホームルーム中なのに、担任教諭がいないというのもおかしい気がするがこれもいつもの事。
恐らく担任は屋上か辺りで煙草をふかしていることだろう。だから、それでは無い。
騒がしさが一段階低い気がする。普段であればこの程度では終わらない。
席替え騒ぎに加担しなかったのは、始まって早々適当な席を確保して爆睡を開始して現在も起きる気配を見せない先祖が茨姫の題材だった少女と、右横で柔らかい笑みを浮かべている先祖が白雪姫の元だった少女だけだ。
しかし、この二人は普段からも基本的に無害な筈で、むしろいつも通りだ。
つまりここにいない人物がいる。
それに思い当たるのに時間はかからない。
あまりにも印象が強い者だからだ。
それは席替えの開始と同時に慌てて教室を出て行ったので、余った最前列センターが座席となったのはいい気味だが、自分の身に良くないことが起きそうな気がする。確実にする。
一抹の不安を抱き、会話することでそれを紛らわそうと背後の少女に話しかけようとした時。
その瞬間、教室前方のドアが打撃音と共に吹き飛んだ。
わあ、と教室中の皆がその出来事に驚く中、それを行った者は教室内に踏みこむなり一声を放つ。
「さあ、皆。お仕事の時間ですわ。物語らしく行きましょう」
入ってきたのはブレザー姿の少女。
しかし通常のものではない。
襟や裾にはドレスのようなレースのフリルがあしらってある。更に言えばスカートの丈が短く、かなり際どい。
何処かしらを間違えてしまったドレスとでも言えば良いのか。

こんな改造制服、いや改造スカートを好んで着る奴は一人しかいない、と天條は判断する。
……うわ、噂をすればってやつか……？
クラス全員の嫌そうな視線が一点に集まる。
焦点を当てられた少女は長髪を揺らしつつ、吹き飛ばしたドアの傍に行くなりそれを持ち上げて、
「――よっと」
元通りにし始めた。
「直すんなら一々壊すなよ！」
クラス内からのツッコミに少女は動じることなく、ドアをレールに嵌める。
その後振り向き、ポージングを取りながら、
「それは違いますわ皆。直せるから壊していいのです！」
「うわあ、常識と話が通じないっ！」
全員の叫びを少女はまあまあ、と落ち着かせ、
「……では仕事ですわ、皆。用意はいいですわね？」
「色々端折り過ぎだよ！」
皆の抗議を耳を塞いで全く聞こうとしない少女。
なので天條は皆の前に出て意見を総括して、
「おい、シンデレラ、もとい識原花蓮（しきはらかれん）。もう少し俺たちを落ち着かせた上で説明してくれ。
そして、いい加減全てをいきなり行うその悪癖を直せ」
「あら天條さん、ごきげんよう。――それで、そういう貴方も直っていませんわね。日毎に初対面の人間をフルネームで呼ぶ癖」
まあ、いいですわ、と識原は教壇に上がる。そして教室中に響く声で告げた。
「出動ですわよ、妖精守護騎士団（フェイクアフター）」
天條の日常は、この言葉が発せられた瞬間、日常では無くなった。

一章　危険の楽しみ方

識原の発言でクラス中が鎮まる中、天條は吐息する。
妖精守護騎士団。
識原財閥の権力と財力を駆使し、平和維持を目的として創設された集団だ。
所属員は清耀学園関係者全員とも噂されているが、天條にはそれを把握する術は無いし、元々する気も無い。
噂がどうであれ、このクラスの皆が団員であることは確定された事実だ。
……つまり、特殊能力を持った変態集団。
ただし自分は変態では無いので大多数が変態な集団と訂正しておく。
そんな集団に入っている理由は一つ。
……財閥の支援による学費十分の九免除は大きいからな。
やはり私立は金がかかる。金をかけないならばその方が良いに決まっている。
故に初等部の頃から入り続けているのだが、
……金を払ったほうが楽だった……。
平和維持は建前で、かなりの頻度で団員個人の私欲の為に使われると知ったのは入団後すぐだった。入団後の契約キャンセルは不可。逃げ場は無かった。
しかし、それはまだ良い。何しろ自分の為に動いて貰ったこともあるのだから。
感謝もしている。それだけなら良かった。
ただ問題なのは、リーダーである識原花蓮の突発的な奇行だ。事前連絡なしの適当な計画に基づいた適当な作戦実行。

……何度酷い目にあった事か……。
中等部二年の頃には国会議事堂直下に秘密結社のアジトがあるから突っ込め、という訳のわからないことを言い始めた。
仕方ないので穏便に忍び込んだが、何故か配置されていたＳＡＴの皆さんに気付かれ、こちらを殺る気で止めに来た上、秘密結社員の方々は白骨化状態で襲いかかってきたりと大変だったが一体この世界の常識覆り過ぎだが大丈夫なのだろうかと世界規模で思案したりしていたが今自分は何を考えているのだろうかと思ったりするが、とりあえず識原の奇行には付き合いたくは無い。
今回もそれに当たるだろう。
それを理解しているから誰も識原の言葉の中身を知ろうしない。問いかけようとしない。
面倒だ、と思うが、このままでは何も知らぬまま何処だか分からない所に放り出されるという最悪の状況に陥りかねない。ならば、自分がやるしかない。
「で、今回は何処で何が起こるんだよ？
あと、そのネーミングセンス何とかしろ。呼ばれる方の身にもなれ。すげえ恥ずかしいぞ」
恐らくクラスの皆が抱いている疑問と、個人の苦情と不満を一気にぶつける。
「二つ目の質問の方が簡単なのでそれからお答えしますけど、その名に恥じないくらい貴方達が立派になればいいのですよ」
「そういう意味で言ったんじゃねえよ。ベクトル逆だよ逆……」
天條の嘆きを気にすることなく識原は話し続ける。
「それで今回のお仕事ですが、何と今回、皆さんには某組織の、日本は横須賀にある本部を襲撃して貰います！」
堂々と識原は仁王立ち状態で宣言するが、
「ツッコむの面倒だから簡潔に言うけど、何で？」
「いえ、あのクズ組織は私が楽しみにしていたサファイア等至高の原石諸々を輸送中に横から盗み取ったばかりか、あまつさえそれを

たった数百万で売り払ったという、許し難い所業を為さりやがりましたので。あとついでに、その組織が本日ちょっと危ない品物を取引するので平和の為にそれを潰すという目的もありますわね」
「思いっ切り私怨中心かよ！」
　またも皆が叫ぶが識原はやはり聞く耳をもたない。
そればかりか、
「私怨で何が悪いのです？　私の恨みは皆の恨み。皆の恨みは私以外の皆の恨みです」
「ひ、開き直りやがったぞ、こいつ！？」
戦慄する天條らをよそに、もう答弁は終えたとばかりに、
「話を元に戻しますが、今回の組織は世界規模のマフィアまがいで少し面倒な大きさです。しかし万全を期して人数を多くすると輸送に時間がかかり過ぎ、感づかれる恐れがあります」
　なので、と識原はクラス中を見回し、
「私が選抜した少数メンバーで行こうと思います。異論は認めませんが、意見なら迅速にどうぞ」
　誰も何も口に出さない。
納得する答えを得られない上、ロクな事にならないと分かっているからだ。
出来ることは自分が巻き込まれない事をただ静かに願うのみ。
　三十秒ほど識原は問い掛けを待ち、一度頷くと、
「……では、質問も無いようなので連れて行く人を発表しますが――」
　識原は座席の一つに向かう。そこにいるのは、
「？？花崎さんは……？深淵たる眠りの防護？（スリーピング・ビューティー）状態で寝てますわね……」
それはこの騒がしいクラス内で起きる素振りを全く見せない、眠っている時限定で自分に害する全てのモノを弾く能力を得ている少女。
『茨姫――花崎美由紀（はなさきみゆき）、熟睡中。起こすな危険』と書かれたプラカードを腕に絡ませ机上に突っ伏して完全に寝入っている花崎だ。

「うーむ。茨姫の結界は欲しかったのですが、……どうにか出来ません？」
「……何故こっちを見る？」
視線を向けて来る識原に天條はやや低い声、それこそ嫌そうに言う。
「いえ、幼馴染ならば起こし方も知っているかと」
「それ言ったらお前、ここにいる奴らほとんど幼馴染だっつーの。初等部からの付き合いなんだからよ」
それもそうですわね、と識原は吐息し、
「？？それでは仕方ないので、天條さん、同行お願いしますわ」
天條は椅子から転げ落ち、しかしすぐさまバネ仕掛けのおもちゃのように立ち上がり、
「な、何で俺なんだよ！　他に強力な能力持ちの奴らいんだろ！？」
「まあ、花崎さんの幼馴染ですので。あと私の」
「話が繋がってねえし、理屈も通ってねえ――！」
天條の叫びが教室に響き渡るが誰もが無視した。巻き込まれたくないからだろう。
……は、薄情な！
涙が出てきそうだが何とか堪えた。
後で自分を見捨てた奴らに報復するための方法を考えて、この悲しみを抑え込む。
「い、嫌だぞ俺は！」
「この期に及んでまだ逆らいますの？　なら仕方ありませんわ」
そう言って識原が取り出したのは、一枚の写真。
「あなたがこの私に及んだ暴挙の写真をばら撒――」
「だああ、分かった！　きょ、協力すっからそれは止めろ！」
識原は笑みを持って頷きつつ、懐に写真を戻していく。
天條は一気にやつれた顔になり、
「何で中等部の頃の写真（やつ）、まだ持ってんだよ……」
椅子に力無く座り込む。

天條を取り込んだ識原は、
「あとは、誰でもいいので私と共に行きたい人は一歩前に出てくださいな」
「選抜するんじゃないのかよ！？」
クラス総員からの全力ツッコミに対し、
「いえ、もう何か面倒になりましたし。さあ、来たい人はさっさと前に出て下さいませ」
しかし、いつもの事ではあるが、皆率先して前に出ようとは思わない。
……最後には行く羽目になるけどな。
理由はある。これまでの経験で理解していることだ。
お前らも地獄（こっち）に来い。
天條が座った目で薄情な級友どもを見ていると、
「？？では、弁舌に長ける私が直々に貴方達を説得して見せましょう」
やけに目を輝かせ嬉しそうに言う識原。
その目を瞑り、こめかみに右手の人差指を当て、三拍子で指で頭を叩き始める。
小さいながらもよく響く音。
一音なる度にクラスの皆の間に緊張が走り、やがて眼を開けた識原は開口一番、
「ふむ、そうですわね。これなんかどうでしょうか。
……十年前月形君は近所の二十歳の女性に――」
「どわあああ――！！行きます。ついて行きます。何処までもついて行きますからそこから先は何卒――！」
よろしい、と識原が頷く。項垂れながら前に出てきたのは右胸に銀のプレートを付けた人狼の委員長。プレートには彼の姓名が刻印されており、
「……いらっしゃい、我が友、月形清義（つきがたせいぎ）君」
「ほんと、色々、御免」

「まあ、いい。もうお前も被害者だ。見てると憎しみが同情に変わってきたから」
二人揃ってため息を吐く。それを見ていた周囲の皆は、
「……あれって、結局脅しだよな？　穏便な説得とかじゃないよな」
「しっ。言ってやるな。本人は説得だって思ってんだから」
「自覚ないけど意外と花ちゃんって腹黒いよねー。てか委員長何やったんだろ？」
「しっかり聞こえてますわよ。貴方達も行きますか？」
笑顔で、しかし額には青筋を浮かべて問うてくる識原に、勢い良く首を横に振る級友たち。
天條は識原のその恐怖政治っぷりを最早諦めたように傍観しつつ、
「相変わらず、優雅なのか野蛮なのか分からねえ奴だな、おい」
「いや、確実に優雅では無いと思うよ。うん」

識原は約五分かけて十人を選出した。
その中には己の身を嘆いている者や、逆に楽しそうにしている者、そして項垂れている凪柄の姿があった。
「ま、まさかくじに当たるなんて……。四分の一の確率だったのに……」
「いや、くじは絶対に誰かに当たるのだから、元気出して下さい」
月形に慰められている凪柄を無視し識原は声を張り上げ、
「では、参りましょうか皆」
「そうは言うけどよ識原、四限終わるまで三十分しかねえぞ。どうやって横須賀まで行くか知らねえけど、帰ってきたら学校終わっちまうんじゃねえか？」
天條は学生の本分としての問いをぶつけた。
「ああ、それなら心配いりませんわ。片道十分もかかりませんし、昼休みの終わりには帰ってこれると思いますわよ」
どういうことだ、と天條が疑問を放つ前に、彼の耳に異音が入っ

た。
それは何かが風を切って回転する音。
「ちゃんと乗り物を用意してきましたのよ？　特別製の、ね」
音のある方向は教室のドアに対する位置にある窓の向こう。
普段見えるのは陸上競技用のトラックが設置してあるグラウンドだ。
しかし、天條が外を覗くとトラック以外に別の物体が存在した。
航空機の機体ではあるが、主翼にはヘリコプターの回転翼が垂直に取り付けられている。
「んだありゃ？　ヘリか？」
「いえ、垂直離着陸（ＶＴＯＬ）機、風切三号ですわ。軍用の最新試験機を頂戴してきましたの」
「……学校に軍用ヘリ止めんじゃねえよ」
「学校はいざという時のヘリポートになりますから別段問題ありませんのよ？
あと、あれはヘリじゃありません」
そういう意味じゃねえよ、と天條はぼやく。
その間に　窓に携帯式の縄梯子をかけた識原は、
「ほら、さっさと搭乗しましょう。時間はあまり無いのですから」
背後から、さようならー、生きて帰ってこいよ、土産は期待しねえぞ、などの軽薄な友人達の声を聞きつつ梯子に足をかけて、
「お前ら、帰ってきたら覚えておけよ！」
捨て台詞を残して地面まで一気に下りる。
地に降り立った天條たちは、垂直離着陸機のパイロットに案内されて機体の中に入る。
約八畳ほどの長方形状の空間が広がっており、運転席の方向から見て左右には長椅子が一つづつ置いてあった。
その上には十一個のリュックが置いてあり、それぞれが刺繍で名前入り。
天條たちはリュックを手に取り中身を確かめつつその椅子に座る。

リュックの中には、
……やっぱりこれか。家に置いてきたはずなのによ。
二本のシースナイフが入っていた。合金製鍔ありの特注品。
……いつも思うがどうやって取ってんだよ……。
同級生の住居不法侵入を疑いながら、周囲を窺う。
皆一様にリュックから物を取り出し、念入りにチェックしている。
他の者のリュックにもそれぞれが使用する得物が入っている筈だ。
皆いつもの事なので驚きはしない。丸腰で向かうべき所では無いのだから当然。
天條は二本のナイフを腰に括り付け、肩の辺りにあったシートベルトをたすき掛けにして体を固定する。
天條以外の者もベルトでしっかりと体を固定した。
そこで天條は素朴な疑問を口に出した。
「しかし、十分弱で着くって随分な性能だな。横須賀まで百キロくらいはあるのによ」
「当然ですわ。安全をほとんど考慮していませんもの」
??え?　と全員の疑問の声が揃った瞬間、垂直離着陸機が運動した。

風を切ってその物体は飛んでいく。
機体を軋ませ、今にも自壊しそうなくらい撓む。
速度という字を端的に表すその姿は、まさに風切。
しかしそれを気に留めることなく、その垂直離着陸機は目的地目指して突き進む。
その機中、乗客たちは激しい揺れに襲われていた。
振動と慣性の圧でその体を抑え込まれた天條は、
「??ま、まさかヘリで音速ギリギリまでいくとは。うあ、気持ち悪っ……」
機体内にある座席に寄り掛かりながら深呼吸を繰り返す。

周囲の皆もほぼ同じ状態で青白い顔をしている。識原だけは除外するが。
「この程度で情けない……、それに何度も言いますがヘリじゃなくて垂直離着陸気ですわ。それも安全装置を人間の能力に完全に依存した最新鋭機ですのよ？」
「な、何か、開発の方向性を完全に間違っちゃってる気が……」
「……もしかして私達って実験台？」
もしかしなくてもそうだよ、と返したいが、体調の都合で天條は取り止める。
というか今口を開いたら色々な物が飛び出してきそうで怖くて出来ない。
だがそれでも口を開いて確認しなければならない事があった。
「つ、つーかよ、こんだけ速度出してたら音とか凄えだろ？　目的地がその組織の本部なら気付かれんじゃねえか？」
少し考えれば分かることだ。
亜音速で高速移動すれば音も酷くなるし、空気振動による衝撃も生まれる。
そんな物が自分たちの居場所に近づいてくれば警戒するのは当り前だろう。
しかし識原はそんな心配は杞憂だ、とでも言うように首を横に振り、
「この機体には消音装置、光学迷彩機能と空気抵抗抑制機能を備えているので、視認される可能性はゼロ。空気の流れを感じ取って発見することも不可能に近いのです。言ったではありませんの、ハイスペックの最新鋭だと」
なるほど、と天條は思う。
これだけ人体に有害な航空機でも、機能だけは一級品と言うことらしい。
……一番大事な部分が抜けているがな。
尚も感じる不快感を全力で押し込めていると、不意に揺れが収ま

った。
窓から見える景色の流れもさっきより遅くなっている。低速飛行に入ったのだ。
時計を見ると出発から七分も経っていなかったのだが、
「さ、もうそろそろ付きますから準備してくださいな」
識原に言われるも、既にナイフは腰に括り付けてある。準備は万全、の筈だったが、
「？？って、おい。……何故ベルトを外している？」
「え？　何故って、準備ですよ？　天條さんも早くして下さいませ。もう目的地の真上まで来てるんですから」
天條が疑問詞を頭に浮かべる中、周りの皆は次々にベルトを外していく。
ある者はリュックを背負い、ある者は背負わず入念にストレッチを繰り返す。
嫌な汗が出た。悪い予感もした。
そして識原は、操縦席近くにある搭乗口のレバーに手をかけて、
「？？おい。まさか……」
一気に押し開いた。強風が圧力として機体内に入り込む。
初めに見えるのは青々とした空。眼下には海と港と街。
高度七百メートル。その高さを持って下界を見下ろす識原は、
「さあ、皆さん。飛び降りる準備は良いですの？
……天條さん、速く準備してください。そんなとこで目を瞑っていないで」
天條は出口から対角線上の隅で震えながら目を瞑っていた。
「う、うるさい！　お、お前ら俺が高所恐怖症だってこと知ってんだろうが！」
「ええ、でも貴方？自由の空？使えますし、飛び降りても大丈夫でしょう？」
「？？物理的に大丈夫でも精神的に大丈夫じゃねえんだよ！　お前ら俺が十メートル以上高い所で空中移動やらないのも知ってるだろ

！？」
それを見ていた識原、そして他の皆はやれやれを肩をすくめ、
「良いじゃありませんか。ここをその高所恐怖症の克服の場とすれば」
「そうだよ、天條君。ピーターパンが空嫌いとか言ったら子供の夢ぶち壊しだよ？」
「ほら翔人。さっさと飛んだ飛んだ。目え瞑ってれば怖くないわよ」
「目を開けてねえと使えねえんだよ、この能力……。つーか何でお前らそんなに男らしいんだよ」
そう。？自由の空？は空中を認識する事から始まる。
ここでの認識の定義は視認が第一だ。見た空中の一部を固定化するのだから当たり前。
怖いからと言って目を瞑って空に踏み出せば落下の一語が待っている。
それは解る。目を開けていなければ飛べない。だが怖い物は怖いのだ。
それでも時間は待ってくれない。ここで時間を潰して午後の授業には遅れたくないし、このままでは、誰かさんの怒りを受ける。
「ああもうっ。じれったいですわね！」
今にも泣き言を放ちそうな雰囲気の天條の腕袖と首襟を、眉を立てて苛立ちをあらわにした識原はしっかりと掴み、
「こういう物はショック療法に限りますわ――！」
「どわああ！」
巴投げ。自分の体を支点とし、相手を後方へ投げ飛ばす。
天條の体はそのまま出口に向かい吹っ飛び、
「――っと、セーフ」
空中で一回転し天井を掴み、機体方向から見て側面の宙を足場にして、何とか踏み止まる。
「ったく。危ねえじゃね……」
か、という言葉は出なかった。

己の目の前にいた月形が、その右腕を振りかぶっていたからだ。
「？？？？？っ」
脂汗を瞬間的に大量に浮かべた天條を、月形は苦笑を持って出迎え、
「……御免ね」
右の突っ張りをオーバースイングでぶち込んだ。
人間の状態でも人狼の力は少なからず発揮される。
当然その力を受けた天條は、一瞬空中で堪えるも、その圧に耐え切れず、
「こ、この薄情者――！」
蒼い空へと吸い込まれていった。
数秒経つと、ぬおおー、と雄たけびを上げながら、階段を下るように地に向かっている天條の姿が上空から確認出来た。
「……では、そろそろ私達も参りましょう。パラシュート組は私と一緒に、生身で突貫出来る人は三分後に落ちてきてください」
そう言い残すと、識原とその他数人は飛び降りて行った。

02

薄暗い、四方を囲まれた空間がある。
百メートル四方で、天條は高く三十メートルほど。
日の光は全く入らず、埃が舞うその大気を照らすのは中央に在る二本の松明とランプのみだ。
埃の出所は辺りに雑多に積まれている様々な器物。
倉庫だ。とある組織が所有する土地にあるそれは、港から数百メートルの位置していた。
その倉庫、そしてその周りには数十の人間がいた。
皆スーツを着用しており、異様な雰囲気が漂っている。
閉め切られた倉庫内の中心、二本の松明に挟まれる形で革のソファが二つ備えてあり、中心にはテーブルが置いてある。
そこを境とし、ソファに座った二人の男が相対していた。
一人は杖を携えた初老の白人男性。
もう一人は葉巻を口元で揺らす小柄で小太りの中年男。
二人の男の傍には体格の良い筋肉質な、護衛の男がそれぞれ二人ずつ付いていた。
「Ｓｉｒリベッテ。これが約束の物なのだな」
中年男は木箱に置いてあるアタッシェケースを指示しつつ、日本語で初老に話しかける。
リベッテと呼称された白人男性の横にいた筋骨隆々の男が彼の耳元で何かを呟く。
恐らくは通訳兼護衛だろうと中年は判断する。
リベッテは返すように男の耳元に言葉を放ち、それを頷きながら聞いた護衛は無表情でこちらを向き、
「そうだ。これでこちらの任務は完了した。故に安全を期して帰らせて頂きますこの豚野郎。と申しております」
「ほ、ほう。そうか。残念だな。上物の酒でも飲みかわそうと思っ

ていたのに」
額に青筋を浮かべつつも、中年は穏やかな口調で話す。
……まあ、日本語が母語ではないから仕方ない。私は心が広いのだ。
と、心中で言い続けることで感情を抑える。
そうしていると中年の言葉に返すように相手方の護衛が、
「馬鹿を言うなクソ野郎。酒を飲ませてくれるのなら有り難い。伊太利亜系英国人にとって酒は命の燃料だからな。だけど、今は嫌な予感がするんだ。だから後ろ髪惹かれる事言うんじゃねえよボケ、と申しております」
耐えろ耐えろ耐えろ、と中年は念仏のように唱えながら、
「い、嫌な予感とは？」
通訳後またもや護衛の男に耳打ちをする。護衛は真顔のまま、
「胸騒ぎと言うか、何か頭上から人が落ちてきそうな気がするんだ、と申しております」
「ははっ、そんな馬鹿な――」
笑いながら言う中年の言葉は途中で中断された。それを邪魔する音が二つ鳴ったからだ。
一つは？何か？が天井を突き破ってきた轟音。
二つ目はその？何か？がリベッテとその護衛に直撃し、床に叩きつけられた事による打撃音。
倉庫内で埃や砂が舞い、視界が一時的に悪くなる。
しかし天井がぶち抜かれたことにより明るくはなった。
明かりを得た中年は唖然とした顔で目の前で起きた出来事を見ていた。
中年の傍に控えていた護衛は、最初驚き顔をつくりはしていたが、すぐさま表情を引き締め中年の前に出る。
何だ、どうした、と複数の声が聞こえ閉ざされていたドアが開く。
ドアが解放されたことで空気の流れも良くなり土煙が晴れて行く。
そこにいたのは、

「??あたたた。酷いな、もう。??ってうわっ！　やっちゃったよ、これ……」
眼鏡をかけた一人の少年だった。

識原たちは倉庫の屋根の上にいた。
パラシュート組は降りる為に使ったそれを折り畳む。天條は天條で軽く泣きそうになりながらも屋根までたどり着いた。
這うようにして天條は屋根に乗り、下を見るが
「ああ、やっと着いたけどまだ高い……」
「はいはい。泣き言は良いから行きますわよ。馬鹿が一人、先走って突っ込んでしまいましたからね。まだ二分三十秒しか経っていないというのに」
識原は屋根に開いた人型の穴から件の馬鹿を見る。
倒れた人間二人の上に立ち、腰を擦っている少年を見定め、
「早く上がってきなさいな、月形君。今すぐ張り倒してあげますから」
「いや、こ、これ僕のせいじゃないですって。空で下を覗いていたら急に風が吹いて機体から振り落とされたんですよ？」
「……全く、隠密に事を進める手筈が台無しですわ」
ぶつぶつと文句を言う識原を無視して天條は下を見ないようにしつつ、
「おい、委員長。とりあえず上がって来い。話し辛いんだそこじゃ」
分かりました、と返事する月形だが、
「……うわあ、面倒な事に……」
倉庫内で己を取り囲むように複数の影が現れたのだ。
数は百を超えるであろうそれらは、スーツに身を包み銃器で武装し、既に発射姿勢を取っている男達だ。
倉庫の出口を堅め、それ以上の人員が中年の男と自分の間で壁となっている。

そして倉庫中段部の足場からは、微かながら金属が動く音がした。
恐らくは狙撃、もしくは強襲要員だ。
組織的且つ統制のとれた行動から察するに、熟練の構成員であろうが、
……邪魔ですね、本当に。
その群衆の陰に隠れるように最奥にいる中年が声を放った。
「??お前は何者だ。何が目的だ。五秒以内に応えなければ撃つ」
五、四とカウントダウンを開始する中年。
……何という悪人らしさ丸出しな台詞……。変えようとは思わないのですかね。
今まで会った悪人顔は皆こんな感じなのでむしろ不安になる。
不安と言えば、勝手に突撃したので識原の怒りが来る可能性を思い出す。
スーツたちを無視して頭上を窺う。
そこに在るのは屋根に開いた自分サイズの穴と、そこに腰掛けている友人達。
その顔は唖然という形で止まっていた。こちらを見て驚いている訳ではない。
何だと思う矢先、奥にいた識原が体を仰け反らせそれを戻す勢いに加えて大声で、
「正義と悪の味方、妖精騎士団、????参上!!」
二秒ほど、この場にいる識原以外の動きが止まった。

色々な物が停止した空間でうん、と識原が頷き一つ。
「これがやりたかったのですが、やはり一人だけ先に突っ込むと締まりがありませんわね。……後で御仕置きでもしましょうか?」
「ええっ!　ちょ、ちょっと待って下さい……」
御仕置きという言葉に反応した、月形の言葉の終わりと共に空間の中に動きが満ちる。

組織の者は頭を振ったりお互いにビンタをしたりで意識をその場に戻し、屋根の上にいる者は識原を視界の外に出すことで平静を保ち、制裁を示唆された月形は吐息し、
「はあ、どうしますか、識原さん。僕、そこに行った方がいいですかね？」
頭上の、宣言ショックを起こした識原に問い掛ける。当の本人は何ら気にすることなく携帯電話で何やら連絡を取っているが。それが折檻の為の物では無い事を願うばかりだ。
識原は電話から耳を離すと屋根の穴を覗いて、
「……いや、月影君はそこで暴れて貰って構いませんわ。出来る限り多勢を引き受けて下さいませ。応援は二分後となりますのでお忘れなく。約束は覚えてますわね――」
そう、約束。自分たちのような存在が力を揮う為護るべき事。
「もちろん。誰も失わさせずに失わない、でしたよね」
「よろしい。では存分にお楽しみを」

「……どうやら真面目に答える気はなさそうだな」
中年のやれ、との掛け声と共に鉄音が鳴り響く。
マグナムに小口径拳銃。短機関銃に機関銃。自動小銃に散弾銃。多種多様な銃器が一斉に一人の少年目掛けて放たれた。左右中段部、から。
スタッカートの連続に次ぐ連続。全ての鉛玉が横殴りの雨となって眼鏡の少年にぶち込まれた。
三秒でその演奏は終わったが、少年のいた辺りには多量の土煙が舞い、床と壁には、大量の弾痕と、大型弾が貫通した跡が残っていた。
「さあ、次だ」
そう言って中年は上を見る。
……ふざけた連中だ。

眼に映るのは、先程宣言をした少女たちが屋根に空く穴の縁に腰掛け、こちらを見もせずに会話している姿だった。
こちらの取引を中断させ、損害をもたらした愚かな者たちに、死という事実をくれてやろう、と中年は思う。
決意を実行する為に、頭上に見える人影を指示して射撃の合図を送ろうとした瞬間、
「あー、痛えな畜生」
土埃の中から声が聞こえた。
それはさっきの少年の声と類似しながらも少しばかり思く太い声だった。
埃が晴れ、現れたのは、
「お、狼……！」
狼と人が混じった存在だった。
背中には鉛玉がめり込み少量の血を滲ませているが、それだけだ。
そのめり込んだ弾も内側から、肉と毛に押されるようにして弾かれた。
完全に全身を変化させた少年は、伸縮性の制服の細部を手で直しつつ、眼鏡を外し、
「おいおいおいおい、あんな獣風情と一緒にすんじゃねえ。俺は人狼（ヴォルフ）。誇り高い王の眷族だ。ひれ伏しやがれ、屑ども」
ォオ、と狼の叫びが響く。
狼の咆哮。建物全体が震えるような鋭く伸びる声。
それだけで組織の構成員の間に動揺と焦り、そして恐怖が走った。
その恐怖に負けて、中年の指示を待たずに構成員の一人が発砲した。だが、
「あん？」
簡単に避けられた。行為だけを見れば右に一歩動いただけの単純な回避。ただし、速度は簡単に出せる物では無かった。
動きを捉えることが出来なかった。
そして人狼はおもむろに発砲した男の元まで行く。全てが高速。

発砲した者も、他の者たちも全く動く事が出来なかった。否。反応できなかった。
　互いの手が届くまでの距離に至っても男が反応する事は無い。まるで時間が止まったように動きも止まっている。ただ声だけが、
「ば、化け物……」
不安と恐怖を伝播させるように倉庫内に響く。
ふう、と発砲した男の目の前で一息ついた人狼は、首を一度二度と鳴らすと、
「ま、正当防衛ってことで」
　力任せに、右腕を男の脇腹にぶち込んだ。

　一人吹っ飛ばしたことにより我に返った構成員から銃撃を受けて、しかしそれを何ら気にすることなく月形は前進し、近くにいた男の長銃を今や毛で覆われた五指で掴み、銃身を捻じ切った。
　ひ、と息の詰まるような悲鳴を呑み込んで、男は銃を手放す。そして逃げ出そうとするが、その前に後頭部に一撃を入れて大人しくさせておく。
　爪は使わない。そんなことをすれば軟な人間の場合死に至る。それは約束に反する。
だからこその打撃。
……腕の上からですし、肋骨何本か程度なら死なないでしょう。
それにしても人狼形態になると何故こうも乱暴な口調になるのか。
……精神的にはいつもと同じなのに。
だが、それは今はどうでもいいことだ。今は、
「日ごろのストレス発散の為に、楽しむ事だけ考えようか！」
月形は銃器を構えた男達に突っ込んでいった。

　倉庫大門正面。既に開け放たれた門扉を前に少年少女が集まって

いた。
天條以外は屋根から降り、天條自身は地上から高度七メートルあたりで待機中だ。
人狼から逃げる者を迎撃する為だ。
逃げようとして散り散りになった組織員達を留めようと、既に級友数人は散開している。
倉庫内を見ると二桁単位で人が何度も空中を舞っている。
月形が随分と派手にやらかしているようだ。
……そんなにストレスが溜まっていたんだな、委員長。
一癖や二癖どころでは済まないうちのクラスを纏めるのはそれだけキツイのかもしれない。
同情からか親近感からか、もしくは申し訳なさからなのかは分からないが、少々可哀相に思える。
それでもストレス発散出来て良かった、と天條は呟くが、
「おっ、取り残し。今度は五人組だ??。左右に分かれて来るぞ??」
先程から集団で倉庫から逃げて来る者が多い。今の仕事はそれを周囲に伝える事だ。
どうやら人狼からの逃走作戦を選択したらしい。
……さっきまで取引していたのだから当然か。
勝ち目のない闘いよりも逃走を選ぶ。
守るべきものがあるのなら、それは賢明な判断だ。
……逃げきれるのなら、な。
五人の前に識原が立ち塞がる。
男たちは目で合図しあい、三人が速度を落とし二人を先行させた。
二人は既に拳銃と自動小銃を構え、照準を合わせている。
……女にも容赦ねえな、こいつら。
しかし、対処としては正解だ。
女といえども人狼と共にいたのだ。万全を期すのは当り前だろう。
まず放たれたのは自動小銃の弾丸。相対距離は百メートル。射程

範囲だ。
弾丸が識原の元に向かう。だが、
「甘いですわ」
声とともに識原の姿が掻き消えた。弾丸は誰に当たることも無く虚空を通過する。
組織の者たちは辺りを見回すが、発見できていないようだ。そもそも何が起こったのかも理解できていないだろう。
……まあ、当たり前なんだがな。

「ほう、Ｐ９０ですか。たかが一般兵が、良い物持ってますわね」
声の発生場所は小銃の担い手の背後。
そこに識原はいた。
……対象との位置関係を変化させる？灰を纏いし姫君？。銃器相手ならば効果は絶大ですわね。
単純極まりない能力だが、単純だからこそ強い。
今回の場合は？相対？から？背を預け合う？という位置に変化させただけ。
ノータイムで移動を可能とする能力であれば弾丸が来ても当たる筈がない。
……それに、当たった所で精々衣服に焦げ目が付くくらいですわ。
自らの制服の防護性には自信がある。
識原財閥の総力を挙げて作られた物なのだから当然だ。
防護性と自社の優秀さを自己確認した識原は、銃の担い手が振り向く前に膝の後ろを蹴る。男は上半身を反らせられ、そのままラリアットよろしく首に識原の腕を引っ掛けられ、
「……あ？」
地面に叩き付けられた。何が起きたのかも解っていない様子で、そのまま意識を断たれる。
地面への激突音で、識原を認識出来た拳銃の持ち手が撃とうとす

るが、
「こっちはブローニング。そんなにベルギーがお好きですなら、一度行ってみたらどうですの？　来世で」
またもや相手の背後に識原が出現した。拳銃の持ち手は振り返る事無く、腰の捻りだけで背後に蹴りを放つ。
しかし、既に背後に識原はおらず、
「判断のセンスはいいですけれど、銃を捨てなかったのは減点ですわね」
真横に回っていた識原は、トリガーにかけていた相手の人差し指を何の躊躇いも無く拳で打ち抜いた。指は束になればそれなりの強度を発揮するが、一本一本は弱い。
いとも簡単に指が別方向を向く。だが激痛で悲鳴を上げる間もなく識原が頸動脈を絞め相手の意識を経った。倒れ伏した男どもの前に立つ識原は、
「この程度で、私の怒りは収まりませんわよ……」
目に炎を灯して残りの三人を睨みつけていた。

三人の組織員の男はひ、と声を引きつらしてがくがく震えていた。……マジで怖いな、この女。
ここまで容赦ない状態は久しぶりに見た。裏を返せばそれだけ宝石を楽しみにしてたのだろう。この組織には因果応報とはいえ憐れみを覚える。だからと言ってここまで引っ張り出されてきた恨みもあるので手加減する気は無いが。
「お？」
識原が三人を打撃している最中、上空から新たに数人が倉庫内に飛び込んだ。
地に轟く轟音が鳴り響き、続いて悲鳴が上がる。
その甲斐あってか、逃げ出す者が増えた。
あまりに多い逃走者を前に、散開して各個撃破に当たっている級友

たちが数人ずつ取り逃がしてしまう。
未だ識原は制裁中で手が離せない。自分は集団戦に向かない。ならば、
「おい、凪柄。出番だぞ、出番。お前の見せ場だ」
真下にいる、魔女帽をかぶった凪柄に声をかけるが、反応が無い。
良く見ると口元が僅かに動いている。耳を澄ませてそれを聞いてみると、
「……皆、本当に濃い特性ね。それに比べて私のは地味……。何この差！　主人公の能力は派手で悪役の能力はいつもしょぼいのか――！！」
「お、おい、凪柄！　なに自発的にヒートアップして、別世界にトリップしてんだよ。少し落ち着け！　そしてこっちの世界に戻って来い！」
「はっ！？ご、御免。何か許せない理不尽さがあってさ」
落ち着いた凪柄は呟きながら己の準備をする。
腰元からペットボトルを取り出し、中身を少し口に含んだ後、容器に残った液体を地面に少しづつ落としていく。
その液体は地に落ちても染み込まず、固体化し地上に残った。
凪柄は手に持ったペットボトルを動かし、落ちる液体で図形を描く。
円に正方形、五芒星や六芒星。
七つの図形を描くと、容器内の液体は全てなくなった。
「でも、ほんとに私のは地味だしなあ、ただ魔法を使えるっていうだけだし……。
えーと、遠距離から衝撃波でも撃ち込んでればいいかな」
地に描いた円の上に凪柄が乗り、左手を空中にかざす。
図形が一瞬発光し、その光の全ては凪柄の左手に吸い込まれる。
直後、その手から不可視の力が放たれた。一直線状にそれは向かう。
力そのものの視認は不可能だが、天條は衝撃波を追って地を走る砂埃からそれを確認出来た。

衝撃波の方向線上、約二十メートルの距離にいた黒服の男達が複数で吹き飛び、倉庫の外壁に激突した。
別方向から来た者には雷撃を浴びせ、更に来た者には空気の塊で押し潰し、それでも来た者には重力塊をぶつけ身動きを取れなくした。
「はー、やっぱ何か地味だわ」
「……実はそれが応用力抜群で凄いって事にいい加減気付いておけ、凪柄美菜」
二人が銃弾飛び交う場で会話する中、制裁を終えた識原は何かを思案するように目を瞑り、何度か頷くと、
「天條さん。ちょっと向かってほしい所があるのですけれど――」
「うん？　何だ一体？」

03

夜に光る星が雲に隠れて明度が落ちた空間に、動く姿が二つあった。
硬いコンクリートの地を走る音は二つ。
「はあ、はあ。な、何であんな奴らがこの世に……」
中年とその横に付く護衛の男だ。
倉庫にいた人狼は部下に任せ、側近の護衛と共にケースを持って裏手から出たのだ。
表から出るの人員は全て自分を逃がす為の囮。
人は大抵、大切な物は守る人数が多い方に配置される、という無意識を持っている。
ここは港。船で逃げることも考えたが、それくらい襲撃者が気付いていない筈が無い。
実際船乗り場には数人の人影が見えたことから、海には出さないつもりなのだろう。
だからこそ、自分は護衛と二人だけで今ここに、港の外れにいるのだ。
走り続けて五分。やっと目的の場まで来た。
前方にあるのは巨大な鉄製の門。所有地では余程の事がない限り誰も来ない。
故に助けを求めたければ外に出るしかない。
ともあれこれで助かる、と思う中年の耳に音が入った。
声、という音が。
「あー、本当に読みが当たっちまったよ。もう少し頭使って逃げろよなお前ら」
門を塞ぐように空中に立つ少年が、そこにいた。

識原からの命令で天條は組織のトップを叩きに行ったのだと凪柄は皆に伝えた。
「んだよ、結局おいしいとこはあいつが総取りかよ。つまんねーな、おい」
倉庫内を制圧した妖精守護騎士団の一人が不平を言う。
「塔鐘（とうがね）、終盤しか参加できなくてストレス発散出来なかったからってそう苛立つな」
未だ人狼状態を解除していない月形が一息にそれを宥める。
現在自分達は倉庫の外で風に当たって涼んでいるのだが、
……中々にひどい光景ね、これは。
凪柄の目線の先には何十人もの黒服の男達がまとめて縛られて、倉庫脇に放置されている姿が見えた。
幸いこちらの負傷者は腰を打撲した月形だけで済み、相手方も誰一人として死んではいない。
上出来だ。だが、派手にやり過ぎた。
いくらここが私有地でもあれだけ爆音が聞こえれば警察だって来る可能性がある。
その前に逃げねばならないが、天條がいない以上勝手に帰る訳にはいかない。
何年か前に一度、皆で置いて帰った事があったが、その時は一人で歩いて戻ってきた天條からお叱りを受けた。
……あれは恐ろしかったわね。
普段から温厚、というかあまり怒らない人が怒るとああも変貌するのか、と子供ながらも学んだ覚えがある。
ただ問題はそれだけではない。
あともう一つ。こちらの方が重大で
「ふ、ふふっ。この程度の力で私の宝を、私の宝石を――」
まだ怒りの収まっていないらしい識原はどうしようか。現在は大破した倉庫と睨めっこだ。
怖すぎて誰も話しかけられない。

こういう時に頼りになるツッコミ役、天條は今いない。
……頼むから早く帰ってきて――！

「くそっ！　ここにもいたか、化け物め」
中年男が叫ぶが、天條は口の端を吊り上げて歯を見せる笑みを浮かべ、
「化け物と呼ばれて喜ばない男がいると思うか？　褒め言葉として受け取っておこう
――まあ、俺はあいつらほど化け物ぶりは激しくないけどな」
さて、と天條は宙から降りる。
それに合わせるように護衛が中年男の前に出るが、
「ああ、ちょっと待ってくれ。お前らに聞きてえことがあんだよ」
何？　と組織の二人が首を傾げる。
「お、お前らに話す事なんて無いぞ。この件の発案者の事は特に死んでも言わんからな！」
中年男が言うが、それは天條の意図せぬ情報であった。
……つまり、本当の黒幕が存在する、と。
だが、今それはどうでもいい事だ。今聞くべきことはただ一つ。
「お前らの信念は、何だ？」
は？　と疑問符付きで相手から問い返された天條は、
「信念だよ信念。お前らが犯罪を起こす行動理由。原因。それを教えろっつってんだ」
「それを教えた所で私達に得はあるのか？」
護衛が先んじて答え彼の背後の中年が続くように頷く。
天條はふらふらと男二人を視線の中央に入れたまま歩き、
「ああ。偶に俺たちの行動は間違っている事があってな？　その為に俺はルールを作ってんだ。もし俺がその理由に納得できて気に入ったのなら、お前らを見逃してやる」
「……随分上から目線だな？」

「上からじゃねえと降伏勧告にならねえだろうが。ついでに言うと、降伏すれば俺以外の他の仲間にも手は出させねえ。あ、でもそん時はそのケースは渡して貰うぞ」
最後の一言を聞いた中年に明らかな拒否の意思が映ったのを天條は見逃さなかった。
……本当に当たりだな。
ならばあとは二択。闘うか降伏させるか。
「別に俺は口で言い切れちまうような、つまらねえ価値観の押し付け合いをしたいわけじゃねえ。ただ意思のみを確かめたい」
だからこそ、天條は問う。
「さあ、答えろ！　お前らが信じることを！！」

化け物の問いは組織の二人の頭に疑問を浮かばせた。
……信念、だと。
護衛は思う。自分がどうしてこの中年男の防護を担っているのか。
律儀に答える必要などないが、真摯に問うている者の質問に、それを悟りながらも応答しないというのは良くない。なので、
「自分は軍人だ。命令があって、そして契約があるからこそ、この男を守っている。
??この男が何をやっていようと関係ない。ただ守る。それが自分の仕事だからだ」
「成程、良い理由だ。全てを認識していながら、仕事という、自分のやるべき事を通す為、か。ああ、本当にいい理由だな。分かった、お前とは戦わんでもいい」
つまり自分を見逃すという事だが、
……何を考えている……？
全く意図がつかめない。あの狼の化け物の仲間であることは確かだ。
仲間ということはそれに準ずるくらいの能力は保持している筈。

それならば自分たちくらいそれこそ瞬殺出来る。だが、やらない。
否。
……出来ないのか……？
しかしそれではここを一人で任せられる筈がない。ここは倉庫の裏手から出た場合考えられる唯一の退路だ。前を化け物が固めているのなら逃げるならここしかないと判断されるだろう。
それでも目の前でふらふらしている男が見せたの異常は空中に立つことのみ。
ならば、倒すことも可能な筈だ。
こちらが思考を纏めていると、護衛対象が自分の時の対応を見たからか、
「そ、そんな事は決まっている。やりたいからやる。それ以外に理由など無い！」
大声で返答した。それに納得したように頷き、歩みを止める天條。
その様子を見て、表情を微かに明るくする中年。
しかし少年は無理に作った、まるで苛立ちを堪えるような笑みを持って、
「決まりだな。お前はここで倒れとけ」
「ひっ！」
少年の視線は鋭く、殺気とも憎しみとも呼べるものを含めて中年を射抜く。
口元が震えているのは怒りからか。
「やりたいことをやりたいようにやる。ああ、それは構わない。俺たちだってそうなのだから。別にそれだけならいいんだよ」
だがよ、と少年は区切り、
「……だが、人に迷惑をかけていい訳じゃねえ。やるなら他人に迷惑をかけるな。それが最低限のルールだ。なのに、お前のお陰で迷惑してる奴がいる。それは良くねえ」
そして何より、と少年は思いきり息を吸い
「？？俺たちにその迷惑をかけるな馬鹿野郎！　お前のせいで怖え

女のとばっちり受けてんだよ！」
「そ、それはやつ当たりでは？？」
「行動起こした馬鹿相手にやつ当たりもくそもあるか？？！！」
化け物の叫びと意気に中年が身を竦ませる。
だが、それを遮る者がいた。
護衛だ。
腰に担っていた小立を逆手に構え、中年を庇うように前に出る。
「さすがにそこにいられると邪魔だから、退いてくんね？」
「無理な相談だ。自分の仕事だからなこれは」
そうかい、と再度頷いた少年は前進を開始した。ごく自然な、散歩でもするかのような歩き。
その行動を護衛は訝しみつつも疾走。
当然、速度に乗った護衛が先に出る。その勢いのまま護衛は腕を振って激突、
「？？？？？なっ！？」
しなかった。否。出来なかったのだ。
少年が寸前で空中を昇り、護衛の体を飛び越えたからだ。軍人が振り向いた頃、少年が着いていた場所は中年の目の前。
「く、くそっ。こんな所で……！」
懐から何かを取り出そうとするが、それはあまりに遅すぎた。
少年の左拳で顎を討ち抜かれ、ひざを鳩尾にぶち込まる。
か、と中年は呼気を吐きだし、倒れ伏した。
……空中を移動できるという事がここまでのアドバンテージになるとは……！
少年が振り向くのに合わせて軍人は小太刀を構える。
確かに空中移動は厄介でそれなりに戦えるようだが、
……されど、見た限り、そして年齢から言っても、近接格闘術の錬度は自分の方が上。
ならば心配は杞憂だ。故にこちらに向かってくる敵に向かい言葉を放つ。

「自分の判断では貴様は若く青臭い。逃げるなら今だぞ？」
「ああ、おっさん軍人だったけ？　じゃあＣＱＣだかＢＢＱだか解らないけど会得してんだろ？　自信があるなら来いよ。戦いに年齢を持ちだすと、安く見えるぞ」
「貴様……！」
軍人の体に怒りが走る。許し難い侮辱だ。
感情的になるのは子供みたいだ、と思いつつも軍人は、顔に出た気持ちを抑えない。
小太刀を逆手に、新たに力を込めて握り直し、
「本気で相手になろう。貴様を殺すべき化け物として」
ああ、と少年は頷くが、
「一つ聞きたいんだが、……おっさん、ピーターパンを読んだことあるか？」
ある訳がない。そんな物戦争には必要無かった。
だから否定の為、首を横に振る。
それに少年は笑みを浮かべ、
「おっさん、読んだことねえのか？　なら、その身で理解しとけよ。しっかりと」
直後、銀のナイフを持った少年と、小太刀を持った軍人が交錯した
少年は変わらず歩いて、だが軍人は己の最高速で走った。
その勢いの慣性に任せ少年の横を抜ける。
「？？？？？！？」
軍人の耳に音が入った。何かが弾けるような、断裂音。
直後、手足に力が入らなくなった。
小太刀を手から取り落とし、膝が勝手に落ちて行く奇妙な感覚を味わった。
「？？？？？あ？」
無理解は一瞬で終了した。さらに現状理解は一秒で完了。
腱を断たれたのだ。
音が舞い四か所からの血飛沫がそれに続いた。出血個所は両肩と

右膝、そして右手首。
飛沫は一瞬。一秒にも満たない時間で派手な出血は収まった。しかし、十分深刻なダメージを負ったことを軍人は知った。
軍人が膝を落とす。いや、腰ごと落ちた。力を込めようとしても入れることが出来ない。
左膝は残っているものの右脚との連動が出来ないため動くこともままならない。
……こ、こんな事が……！
ただの一度の交叉。それだけで四肢を穿たれた。
異常な剣速だ。斬られたのではない。
……刃を刺し込まれた。
傷の広さを見れば分かる。無駄な裂傷はほとんどなく、皮膚に鋭利な穴があいている。
腱の集合地に刃を打ち込まれたのだ。
「？？？？？そ、んなこと……」
軍人の背筋に寒気が走る。
刺突は確かに攻撃速度に優れている。
しかし、追撃を放つには腕を引く必要がある。
こちらの肉に刺さったなら速度は摩擦等で激減する筈。
それなのに、
……こちらには刺さった感触が伝わってこなかった。
感触が来たのは既に刃が引き抜かれた後。
あのナイフが業物であるのは間違いないがそれ以上に、
……技量が異常だ。
この年頃で身に着けられるものではない。
それどころか、人の身では不可能かもしれない程のものだ。
そしてそれが出来たということは、自分を殺せた筈なのに殺さなかったということだ。
……情けのつもりか！？
倒れた軍人は地を這いずるような体勢からナイフを持つ少年を睨

みつけ、
「く、くそっ。化け物め！」
少年はその言葉を得て笑みになり、
「その化け物が平和を願ってんだから、一般人なお前らは大人しくしておけ」
ともあれ、と化け物はナイフを左手に持ち直す。
「――まあ、おっさんはその状態で大人しくせざるを得ない訳だけど、その怪我なら十年もリハビリすれば完治するさ」
それだけ言うと彼が右の拳を握る。
叩き付けられる。その直前に，軍人は一つの呟きを耳にした。
「化け物だって安穏を望む時もあるんだがな……」
それに対し抱いた感情が何なのか知る前に、軍人は意識を失った。

「……ピーターパンはフック船長との一騎打ちで渡り合えるほどの剣の腕前を持つってな」
血を流しつつ、気を失って倒れている男を眼下において、天條は出血具合から軍人の傷の深さを測る。
……まあ、深くは斬っていないはずなんだがな。
腱の集合している場所は動脈なども多く、あまり深く斬ると太い血管まで巻き込み致命傷を負わせる恐れがある。
故に浅く速く数多く斬る必要があった。
難しい微調整の連続だったが、失わせないが絶対条件の為仕方がない。
「ま、こんなもんだろ」
頷き、組み合わせた両手を天に突き上げストレッチをする。
久方ぶりの実戦でナイフを振ったせいか体が少々痛い。
これからは少しばかり勘を戻していかねえとな、と思っていると、
「ああ、そうか。これ持ってかねえと」
中年の手から離れたアタッシェケースが転がっているのが目に入

った。
それの取っ手を持ち、ふと思うことは、
……何が入ってんだ？
ケースに鍵は掛っていない。開けようと思えば開けられる。
重さはほとんどケースのもの。重量が感じられないので中に入っている物の想像がつかない。
いかん、とは思うが湧いた好奇心は抑えきれない。
天條はケースの番部を外し、開けて中身を確かめた。
「？？？？。これは……！」

識原は暴れていた。
組織の落とした武器を拾い上げ、滅茶苦茶に辺り構わず乱射する。
「ふふっ、こんな物ですの？　こんな物ですの！？私の楽しみを奪ってくださった組織の強さは？？！」
最早倉庫、いや組織の所有する土地の建造物は原型を留めておらず、そこらかしこに大小のクレーターが出来ていた。
識原以外の皆はあーあ、と呟きつつ、しかし止めることが出来ずにそれを眺めていた。
「……お前ら、何やってんだよ一体？」
空中から天條の声を聞いた皆は一斉に振り仰ぐ。その中の凪柄は慌て顔で、
「か、翔人。は、早く花蓮を止めて――！」
「いや、言われんでもそうするけどよ。……聞きたいこともあるし」
地に足を付けた天條は識原の元に歩き、向かっていく。
「おい、識原。こりゃあ一体何の冗談だ」
「？？何ですの、天條さん！　こっちは忙しいんですのよ？」
「じゃあ、その忙しいはどっかに放り投げて俺の話を聞け」
そう言って天條が渡したのは一つのアタッシェケース。
識原は一旦手に持っていた銃器類を置き、それを受け取るが、

「これがどうかしたんですの？」
「何で中身が肌色成分が多い、ちょっとアレな十八禁本なんだよ！」
は？　と背後で聞き耳を立てていた皆が疑問符を浮かべた。
「ああ、中身を見たんですのね。それは簡単な話で、……お父様の趣味です」
全く恥ずかしがらずに、とても分かり易く識原は言い放った。それに対し、
「「はあ！？」」
皆の全力の叫び声と天條の声が一致した。
「いえ、識原財閥の総帥の好みが十八禁系って世間的によろしくないんですの。私もお父様も全く気にしませんのに」
そこは気にしろよ、と天條の呟きが入るが、聞く事は無く、
「識原財閥は日本経済を担っています。つまり、信用の低下は日本経済に悪影響を与えますの。故に、お父様のエロ本趣味を守り、信用低下を防げば必然的に経済における平和は維持されますわ。総合すれば、私は間違ったことは言っておりません」
識原以外の皆はエロ本に守られる日本って、と嘆いている。そのまましばらくすると、音が耳に入った。
甲高く、しかし所々に低音が混じる。
それは特徴あるサイレン。国家権力の象徴が近づいてきていることを示すものだ。
「？？っ、不味いですわね。……さっさと逃げましょう皆さん」
機嫌は直ったのか、それこそ上機嫌で識原は携帯電話を取り出し、上空待機中の垂直離着陸機を呼び出す。その後ろで天條たちは、
「な、なんか凄え、疲れた……」
「奇遇ね。私もよ」
凪柄の同意を得て、肉体的、精神的に疲労困憊に陥った天條の目の前に、見たことがある地獄が舞い降りた。
目の前に降り立ったのはここに来た時使った、肉体負担を全く考えない機動性抜群の代物。

「また、これに乗るのか。……生きて帰れるかな、俺」
その垂直離着陸機は悲鳴と共に飛び立っていった。
十数分で教室に戻った天條は、朦朧とする意識で級友に情報操作を、今回の事件の内密化を頼んだ。
後日ニュースには、『横須賀港で大爆発。米国軍の事故か？』という見出しで流れていて、申し訳なく思ってしまった天條であった。

第二章　夢と過去の続き

声に満ちた空間がある。机や椅子が規則正しく、所によっては乱雑に設置された場所。
清耀学園の一教室。
日が傾き、窓からの光が平行に近くなった頃。
三年γ組はカリキュラムの変更で、少し遅めの昼食時間となっていた。
「??あ、てめえ稲村！　俺の弁当に何してんだ！?」
「うむ、腹が少し減ったので頂いているだけだ。気にするなジャック少年。この私の血肉になれるこの弁当も感謝するだろう」
「いきなり何暴論ぶっ放してんだこの馬鹿野郎??！」
己の昼食を盗み食いされたジャックが、その容疑者である己が稲村と呼ぶ少年に殴りかかる。だが、
「弁当ガード！」
「ぬあっ！　ひ、卑怯だぞ。俺の弁当を盾にしやがって??！」
「はっはっは。使える物を使わずしてどうするかね??ってぐあああっ！」
自分の食らっていた弁当を掲げていた稲村の頭を鷲掴みにする手があった。
「食べ物を粗末にするな馬鹿共が！！あと周り授業中だから静かにしろ！」
月形だ。人狼形態となった右の五指で、彼の頭をホールドしていた。
そのまま腕をリフトアップしていき、完全な宙づり状態に陥った稲村は、
「い、委員長！　く、首がっ！　ストップストップ、その腕力は不

味い？？！　ってかこの頃その姿になるの早くね？！」
人狼状態故の鋭い爪が握る額の皮膚に突き刺さり、色々な物が落ちていく。
稲村の体液、彼の意識、そして彼の握っていた、
「？？ああ、俺の弁当が！」

天條と凪柄はそれを、離れた自席で、昼食を摂りつつ眺めていた。
……よくもまあ、毎日毎日飽きないわね……。
初等部の頃とあまり変わっていない。唯一の変化は激しくなっている委員長の折檻ぐらいで、後は同じ。最早呆れの域だ。
たまには落ち着いた昼休みの雰囲気の中、落ち着いた食事をしたいものだが。
無理だろうな、と諦めのような自己確認をして吐息していると、
「ふふっ、賑やかでいいねー。ねえ美菜ー？」
己の右横から声が聞こえた。己の名を呼ぶ少女の声だ。
その声を凪柄は知っていた。友人と言える人物のもの。
「あれを賑やかで済ませるあんたの脳内はどうなってんのよ、雪」
声の方向を見ると、そこにいたのは微笑みを浮かべたジャージ姿の少女。
左胸に白水雪（しろうずゆき）と名前が刺繍してあるジャージを着込んだ少女は、顔に柔らかい笑みを浮かべて、返答する。
「だって、楽しそうでしょー。ほら、何だかキラキラしてて青春というかー。ジョーさんもそう思いますよねー」
ジョーと呼んだ彼女の眼に映るのは、数個の弁当を貪っているピーターパン。
話を振られた天條は、弁当の処理を中断してこちらに振り向き、
「いきなり俺に同意を求められても困るというか、人狼に攻撃されて血だるまになる青春なら、俺は間違いなくお断りするぞ、白水雪」
「そんな事言わないでー。あれと一緒ですよー。ほら、親友同士が

河原で殴り合うのとかとー」
　いやいや、と天條は首を振り、
「違うから。男同士の友情を確かめ合うのと、人狼を闘うのとは趣が全く違うから！」
　それでも尚、笑みで顔を固めたまま食い下がる白水に、天條は嫌そうな顔をしながらも律儀に一つ一つ対応していく。
凪柄は二人の会話を聴いて、思うことは、
　……相変わらずのんびり天然ね、雪。一応理論派の天條が追い詰められてるわよ。
　このクラスにいる者のほとんどは小等部からの付き合いだ。
　やはり精神的に成長したことで性格が丸くなったり変わったりする者の方が多いが、
　……この年まで変わらないってのもどうなのよ？
　先祖が先祖だけに緩くて当たり前なのかもしれないが、ここまでボケていると将来が心配になってくる。
　とりあえず現在、天條から助けてくれ、と言っているような視線が来るが、いい気味なので無視しようかとも思ったが、彼の脂汗の掻き方が尋常ではないので助け船を出すことにした。
「あー、そうだ雪。あんた最近調子いいみたいだけど、大丈夫か？」
　言語的には妙な自己否定のようだが、白水に対する問いの場合ニュアンスはこれで合っている。
　白水はその微笑をこちらに向け、
「大丈夫ですよー？　わたし今日の御昼寝でも一度しか心停止しませんでしたしー」
「……そ、そう。そっちも相変わらずで何よりだわ」
「でもー。あの感覚が無いとさびしくなってきちゃいましてー」
「ちょ、ちょっと。止めてよね！？そんな中毒状態の白雪姫なんていやよ？」
「うんー。そこは大丈夫だよー。有り難いってことは解るからー」
　凪柄は、ならいいのよ、と白水の髪を撫でる。

気持ち良さそうに眼を細める白水。
「こうして見ると危ない関係に見えるな、おい」
「……翔人、少女の友情を曲解して捉えるの止めなさい」
妙な勘繰りを入れてきた天條を半目で見る凪柄。
その会話に一つの声が入ってきた。
「??いいんじゃない？　別にそう思われても」

天條は凪柄の背後に現れた人影に見覚えがあった。
こちらが挨拶をしようとするが、その前に凪柄が睨むような細目で、
「何だ起きたのね、巨乳」
「その呼称に明らかな敵意を感じるのは僕の気のせいかな、美菜？」
凪柄に己の所持属性を言われた少女は困ったような笑みを浮かべる。
「いきなり敵意丸出しにするな凪柄。……茨姫の御休みタイムは終了ですかよ、花崎美由紀」
「うん。流石にこれだけ寝ればね。心地いい睡眠だったよ翔人君」
そうかい、と弁当を食い終えた天條はその片付けをしつつ、
「最近寝てばっかだがよ、そんなに忙しいのか？　サークルってのは」
花崎は苦笑を強くして、
「同人作業は休めないんだよね、これが。僕はリーダー格だし、作品人気もイマイチだしここらが頑張り所なんだ」
「……茨姫がエロ同人か。時代も移っていくんだな……」
「いつの世界にも時代の変遷は付き物だよ。ところで??」
黄昏始めた天條を余所に凪柄へ向き直る花崎。
「??美菜。君は数学の課題終えたの？」
「え、ええと。まだ……だけど……」
「あれー？　この前答え全部移したって言ってなかったー？」

うわ、余計な事を！、と仰け反って後退する凪柄。
空気を読まない少女の言を聞いた花崎真剣な目を不真面目な生徒に向け、
「……美菜、今回落としたら君、単位危ないって伝えたよね？　……それでこれだけはやっておくようにってポイントごとに纏めた問題集、……渡したよね？」
段々と威圧感を増していく花崎にたじろいだ凪柄は、
「だ、だって仕方ないじゃん。……忙しかったし」
「へえ？　忙しかったんだ。ふーん。……放課後にショップでエロゲを？？」
「きゃあああ？？？？！」
クラス中に響き渡る大声を真横で聞いた天條は耳を塞ぎながら、
「うおっ！　何だどうした凪柄！？」
「何でもない！　何でもないわよ？」
涙目になった凪柄はあからさまに話を逸らそうとしてくる。突っぱねてからかうのも面白そうだが、
……こ、この眼はやべえ。
眼が本気過ぎてこれ以上話に突っ込むことが出来ない。
「そ、それより、今の聞いた？　聞いたわよね？　じゃあ、息の根止めるわ」
「け、結論早っ！　ってか物騒すぎるぞ！？聞こえてないからちょっと落ち着け」
「これが落ち着いていられる訳ないでしょうが！　私の尊厳が今まさに失われそうになったのよ？！というか聞こえてないって本当でしょうね？」
「ああ、本当だ。後半部をお前の大声で消されて、お前がエロゲを吟味していることなんて全く知らない」
「……」
数瞬の間と沈黙があった。聞こえる音は凪柄が手を置いている机が立てる振動音。

その原因、震えの元は凪柄の身体であり、
「や、やっぱり聞こえてるじゃないのよ？？？？！」
「だからって本気で攻撃してくんな？？？？！」
凪柄が道具も詠唱も無しの状態で、衝撃波をぶつけて来た。予備動作がなかったので反応が遅れた。一歩後退しただけ。このままでは直撃だが、
「はいはい、そこまで」
己の横に現れた花崎が衝撃を打ち消した。否。衝撃が花崎の周りに当たって弾け飛んだ、といったほうが正しいだろう。
眼を凝らせば自分と花崎の周り、その空間に歪みがあるのが解る。
「さすが？茨？。動作無しの無条件結界でこれか」
「うん。でもまあ、寝てないからやっぱりこんなもんだよ。ちょっと抜かれちゃったし」
「その？こんなもん？で一撃を防がれた私の立場はどうなるのよ？」
衝撃の放ち手が不服そうに口を尖らせる。それに花崎は首を横に振り
「準備なしの一撃で僕の結界を抜いたんだから十分だと思うよ。……それより美菜。話を逸らさないでいこうか？」
「？？先に逸らしたのそっちでしょうが！　大体、他の人より私に対する当たり強くない？」
「あのね美菜、僕は生徒会の学年統括役なんだよ？　毎回課題を持ってこないで落第寸前の級友をみすみす見逃せると？」
「で、でも翔人も似たようなもんじゃ」
話に巻き込むのは止めて欲しい、と天條は指をさしてくる凪柄を見つつ内心で思う。
だが、何度も衝撃波が来ると面倒なので口答えはしない。
その代わり、花崎に向って何か言ってやれと目配せをすると、
「翔人君はもう望み無いから諦めてるよ。君はまだ少しだけ希望があるからこうして発奮しているんじゃないか」
「？？おおい、学年委員長！　それフォローになってねえよ！？」

「そうね。まだ気にかけて貰っている分マシだったわね」
凪柄は顔を笑みへと変化させるが、一方天條は、
「勝手に巻き込んだ挙句、最も辛い傷を負わせやがったよこいつら……」
「よしよしー。元気出してジョーさんー」
床に手をつき項垂れ、泣きそうになったが、何とか堪える。
白水が頭を撫でて来るが、本気で止めて欲しい。本格的に泣きそうだ。
大人だから泣かない、と決めて顔を上げたその時、
「あらあら、賑やかですわね天條さん」
……何故このタイミングで一番負担のかかる奴が？？！
教室に入ってきた識原花蓮と目が合った。

識原の登場により教室に僅かな緊張が走る。
傍目からからはいつも通りに騒いでいるようにしか見えないだろうが、既に嫌な経験を何度も味わっている級友たちからは同じ気配を感じることが出来た。
今度は何が起きるのか。
嫌な予感と期待を抱いて、天條は識原に問い掛ける。
「なんか用か、識原花蓮」
「ええ、先日貴方の報告にあった？黒幕？とやらの件でお話が」
いつになく冷静で、何かを考えつつ確かめているような話し方。
猪突猛進主義の識原にしては珍しいことだ。
今、彼女が手に持っている紙の束がこれほど多いのも。
「……軍関係か？」
「ええ、どうやら」
そうか、と天條は頷く。
おかしいとは思っていた。警察内をある程度抑えている識原財閥を狙う組織の護衛に、正規軍人が就いているのはどう考えても妙だ。

だからこそ、襲撃の後にその旨を報告した。
それで出た結果があるのなら、恐らく、
……面倒なことだろうな
諦めたような吐息を一つすると、椅子に座り直し、
「まあ、聞かなきゃならねえことだろうな。当事者たちは、よ？」
周囲を見ればいつの間にか先日の強襲組が集まっていた。
皆態度はそれぞれだが、全てが真面目に聞いているだろう。
「勿論ですわ。特に今回は私の力が軍上層まで及ばなかったせいもありますし、共に在る人が必要ですもの」
識原の言葉に頷きを返しつつも、ふと気付いたことがある。
「そういや、どういうことだ？　お前のことだから軍くらい既に掌握してると思ったんだが」
ああ、そのことですの、と識原は頷き、
「それは簡単なことですわ。私と私の父の影響力が及ばないのです」
「おいおい。お前の親父さんでもかよ……」
厄介だな、と天條が思わず呟く。警察にすら重圧を与える存在でも軍に対しては無力なのかと。
「ええ、全く。あの人軍服では萌えないなどとのたまい中で。婦警ならいくらでもイケるとか何とか言っておりますが」
「そんな理由かよ！！」
皆からのツッコミが入る。ただ、花崎だけは頷いていたが。
「ええ、本当にふざけた理由ですわ。いつも選好みしてはいけないと忠告していますのに」
皆が半目で見るのに気付かない識原はそのまま愚痴を言い続ける。
「先日もコスプレ衣装を買って来て、それをトイレで着て楽しむなんて情けない事をしていらっしゃいましたが……。やるなら堂々と都庁前あたりにすればよろしいのに」
「な、なんか微妙に嫌な秘密知った気がするんだけど」
「……ねえ、花蓮さん。そろそろ本題に入らない？　時間無いんじゃないの？」

「ああ、そうですわね。余計な脱線をしてしまいました。面倒なのでこれからはそういう方向に話を持っていかないように」
お前が勝手にやったんだろ、というツッコミを入れたくなったが、それこそ話が逸れていきそうなので我慢する。
……それにしても、頼りになるな。
普段はただ寝ているだけのグータラ女だが、起きている状態なら理知的で、常識の通じない識原に対してとても有効になる。
理屈を使って率直に、且つ自然に自分の意見を言えるのは素晴らしい、と心中で花崎を褒め称える。
丸め込まれた識原は抱えた書類を一枚捲り、
「では、お話します。??私の宝石をガードしていた者たち、まあそれなりの腕を持っていたのですけど、彼らがどういう状態で発見されたのか。調査書が来ました」
それは、と皆が目で問う中、識原は淡々と話し続ける。
「体には全く傷はありませんでした。ただ、??老化していただけで」
「……老化?」
ええ、と識原は誰かの問いに相槌を返す。
そして紙を一枚束から抜き取り、机の上に広げる。
そこには若い男性の写真と実年齢が表記されていた。そして検査した結果も。
「実年齢二十三歳。肉体年齢八十七歳。それが検査で出た結果ですわ」
新たな写真を取り出す識原。そこに映るのは白髪頭の老人。名前はさっきの書類にあった男性のもの。
手足は細く枯れ木のようになり、今にも折れそうで、実際右の大腿部が折れ曲がっていた。
「彼が発見された際、重傷ですぐにＩＣＵに運ばれましたが、残した言葉がありますの。
妙な煙が見えた瞬間、『そうなった』と」

……成程、な。
不自然な事象。急激な老化。理不尽な状態変化。
自分たちにとっての通常がそこにある。
「向こう側にも俺たちと同じのがいるのか……？」
誰かの問いにやはり頷く識原。
三枚目の書類をめくり、言葉を続ける。
「煙という証言、老化という現象から、判断できる人物。想像して見れば簡単ですわよね？」
一息。
「？？？浦島太郎？。それが今回の、本当の原因ですわ」

02

識原の声に動揺が広がる。
その中で自分の意見を発しようとまず初めに立ちあがったのは、
「おいおい、待てよ識原。？浦島太郎？は正真正銘の寓話だ。元になる人物なんていねえぞ」
天條だ。発言に周囲も同意している。
……やっぱり来ましたわね。
自分でも何度も疑った挙句、これしかいないという結論に辿り着いた。
識原はそう思いつつも、だが、信じ切っている訳ではない。ただ、
「とは言っても？浦島太郎？以外に当てはまる人物などおりません」
それだけだ。他にいない。何と消極的消去法なのか。
下調べも上手くいかなかった。得たのは一つの事実だけ。
だが、それは大きく、また重要なもので、
「軍上層部に、あるシンジケートと関わっている物を発見し、情報を吐かせた所、そこのトップの名は？ベイ（浦）・アイランド（島）？または？ウラシマ？と呼ばれているとのことです」
「？？？？！」
目を丸くする面々。皆一様に驚きの表現を持って識原を見つめる。
期待通りの反応だ。
その期待は決して良い方向のものではなかったが。
「……まさか、証拠まで出て来るとは。何の冗談だよ一体」
天條が呆れの口調で呟く。自分だって最初は信じられなかった。
浦島太郎。聴こえは普通でも、歴とした伝説の一種。
そんな物が実在しているのなら、とんでもない事になる。
「全くね。どうやってかは知らないけど、老化させるなんて防ぎようあるのかしら？　反則級よ？」
「ええ、ですから今回は、？？花崎さん。起きてますか？」

識原が顔を向けたのは、天條の横で本を読んでいた花崎だった。
「ん、起きてるけど何、僕に何か用あるの？　前回は寝てたからあんま状況分からないよ？」
「？？前回のことは関係ありません。今回は何が何でも貴方に来て頂きます。異論も何もかも却下しますが、それでも宜しくて？」
花崎は苦笑を浮かべ、
「はは、それじゃあどっちにしろ断れないじゃないか。？？いいよ、付き合う。花蓮さんには色々便宜図ってもらってるし、さ」
色よい返事を受けた識原は笑みを浮かべ、抱えた紙の束を鞄に押し込み、
「それでは、行きますわよ皆さん」
「おいおい、俺らほとんど何にも聞いていねえぞ？」
「何を仰いますの？　これは延長戦ですわ。先日の、ね。だから行くのは同じメンバーと追加一名で、場所は変われど、やることは変わりませんわ」
周囲を見渡すと皆が沈んだ顔で肩を竦ませているのが解ったが、それはこちらを気遣わせない厚意であると認識する。
遠慮深い自分に余計な心配を経てない為だろう。素晴らしい。
「場所は静岡。任務は敵組織の無力化。集合は本日の二十三時。それまでは我が家で資料に目を通し、準備と待機をして頂きますわ」
「……はあ、……了解、了解」
皆それぞれ適当な返事を返す。仕方ないとふっきった者や、未だ嘆く者、楽しそうな表情のものなど色々いるが、固辞する者はいない。
……いい度胸ですわね……！
ならば、その度胸を自分自身が示さねばならない。
よって識原は息を吸い込み、大声で、
「妖精騎士団出動！　私の宝石を取り戻？？もとい！　悪の組織を潰す為に！」
「……最後の最後で台無しだな、おい……」

星が彩る黒色の空から風が吹き下ろす場がある。
海と松林に挟まれた砂地。
全長六キロ強に及ぶ広大な砂浜だ。
正に白砂青松の名を表現できる。
静岡に存在するそこに、夜半にもかかわらず波と風以外の音があった。
月明かりに照らされた浜の上で蠢くいくつかの姿がある。
天條たちだ。
「なあおい。わざわざあの暴走ヘリに乗って静岡くんだりまで来たは良いけどよ、どこにその組織とやらがいるんだ？」
「慌てないで下さる？　私、陸の上にあるなんて言ってませんわよ？」
「……？」
天條は首を傾げつつも、先行する識原に続いて歩く。
向かっているのは海側。もう砂浜の半場まで来ている。
このままでは海水に浸かることになるが、この時分にそれは勘弁願いたい。
その願いが通じたのか波打ち際寸前で識原が静止する。
何だ、と思うより速く、天條はあることに気付く。
遥か前方の海。闇に慣れてきた目を刺激する強い光。
光条を発す巨大な船が、そこに在った

陸地から肉眼何とかで確認できる程の距離に、その船は停まっていた。
相対的に考えればかなりの大きさであり、豪華客船とでも称せそうなそれは、しかし明らかな異彩を放っていた。
眼鏡をかけた少年が疲れた声を上げる。

「……うわあ、甲板に機関砲伏せてあるよ。上手く隠してあるけど、担い手は普通にいるし、傍には重機関銃もあるよ」
続いて制服ドレスの少女が、
「最上部には妨害電波装置やカモフラージュレーダーが堂々と設置されてますわね。あのライトは完全にサーチライトですし」
更に長い黒髪の魔女帽をかぶる少女が頬を掻きつつ、
「結構中にも人いるわね。邪魔くさいから半分くらい海に身投げしてくれないかしら」
「海上だってのにどんだけ警戒してんだよ。信じらんねえくらい面倒くせえな」
最後に天條が吐息付きで締めくくった。
背後で会話を聞いていた花崎は白い目になり、
「君らのキロ単位での人数確認問題無しな視力の方が僕には信じらんないって。もう少しスペック的に普通人に気を使った発言してよ」
ああ、と何かに気付いたように頷いた識原は花崎の元へ行き、
「はい、これ渡すの忘れてましたわ」
花崎に手渡されたのは白色の生地に黒文字の描かれた札。
文字の意味は解らなかったが、音としては読め、その正体も知っていた。
「や、別に能力強化の護符求めてたわけじゃなくてね？？」
「さあ、今度こそ準備は完了。参りましょう」
「あの、ちょっと？？」
「……諦めろ。解ってるだろ？　あいつが人の話を聞かないの」
花崎を慰めてから、天條は海を見る。
これから行くであろう、そして何かが起きるであろうその場所を。

暗い部屋がある。
二十畳ほどの絨毯敷き。
照明器具はあるがどれもこれもが付いておらず、光は窓から入る

一条とデスク上のＰＣ画面のみ。
その光は微動を続け、定まることはない。動きの正体は揺れ。
波だ。
部屋を有する船体を揺らす波が、その微動を引き起こしていた。
デスク前に存在するのは一人の、甚平を羽織った壮年男性だ。
時折マウスをいじり、時折ヘッドフォンの位置を微調整して、
「うむ。今度はこれだな。今年は我にプレイさせる作品が多くて最高だ」
デスク脇にある棚から一つのカラフルな箱を取り出し、中身のディスクをＰＣ内に取り込んでいく。
「さあ、楽しませてもらおうか」

揺れる大型船の上。
甲板上には三人の男がいた。皆一様に黒衣を纏い、その中には武装が仕込んであった。
彼らは一か所に集まり、持ち込んだ酒を酌み交わしていた。
「あー、寒っ。何でこんな日に見張りなんだっての」
甲板上に座る白髪頭の一人が冷える夜半の風を身に受け、己のブランデーボトルを口に咥えながら、傍にいる同僚に顔を向ける。
手すりに腰掛けた白衣姿で欧米系の顔をした同僚は、酒瓶から己のマグカップに並々と中身を注ぎ足し、
「仕様がないですね。今回は妙な所に手を出したみたいですからね。警戒を怠ってはならないのですね」
彼は隣にいる、金髪碧眼白人の大男にも酒を注ぐ。
「……感謝。……見張り番。……面倒？」
「ああ。うちのボスは何考えてんだか解りゃしねえ。唯一分かってんのは、……あの人は俺達みたいなのに興味はねえってことだ」
「それは言えてますね。だからこそ私達がこんな大きな組織の幹部でいられる理由ですね。何をやっても興味がないし組織が大きいか

ら許されますね。素晴らしい事ですね」
「……楽。……何でもＯＫ」
そうだな、と三人は笑い合う。だが、その中の一人が座る男の口元を指示し、
「それよりなんですかね？　そんな飲み方ではすぐに無くなってしまいますね？　私達の分も残してほしいですね」
「ああ？　俺の酒だし良いだろ？　てめえらは自前があるじゃねえか」
「これはボスの所から拝借してきたモノなのであんまり飲めないですね」
その言葉に座る男は慌て口にした酒を吹く。
「て、てめっ、何してんだ！？ってもう半分以上飲んじまってんじゃねえか！」
「だからですね。これ以上は不味いですね」
「……協力。……熱望」
「？？あー、もう仕方ねえ！　それ全部飲んじまって片付けとけ。物に執着しねえ人だから証拠ない限り何とかなんだろ」
白衣姿が残り半分を座る男の口に押し込んだ。
あまりにも自然なかつ強引な行為だった為、液体は抵抗もなく喉を通っていく。
白衣姿の手元に残ったのは空の酒瓶だけ。
「じゃあ、これで共犯ということですね。有り難うございますですね」
「？？何してんだてめえ！」
「……酒。……終了」
白衣と座る男が取っ組み合う中、白人の大男が揉み合いで吹っ飛んだ酒瓶を拾う為に甲板際まで行く。
そこで彼は発見した。
砂浜に動く影があるのを。

「……何者？　……報告」
彼は今だ殴り合っている二人の間に入り仲裁する。
その上で自分が見たモノについて話す。
「？？この時間帯に珍しいですね。調子に乗った発情期の子供たちが騒いでいるのですかね。近所迷惑ですね」
「それを言うなら思春期だ馬鹿。……だがマジか？　じゃあ丁度良いな。これからよ、誰がこの酒の責任をとるか勝負しようぜ？」
「……方法。……不明？」
ああ、と座っていた白髪頭は頷き、数歩歩いた先に在る防水カバーを剥がした。
身を表わすのは、全長二メートルほどの、
「Ｍ１３４（これ）使って誰が一番多く的を潰せるかってのはどうだ？」
金属製の兵器。ガトリングガンとも称せられるそれは、射出される毎分三千発超の弾丸によって人を簡単に死に至らしめ、塵に変える。
金属弾の雨を降らせる装置がそこに存在した。
彼の目に浮かぶのは笑み。何かがずれて、それでも正常に見える表情。
それを受ける他の二人もまた笑みだった。
「オーケー解りましたね。判定は……、悲鳴にでもしますね？」
「馬鹿言え。この距離じゃ聞こえねえし、即死だったらどうすんだよ」
「……影。……光で作る」
「良いアイデアですね。ついでに敗者は酒をまた持ってくることにしますね。早く終わらせる為に持ち球は一人五百発でどうですね？」
銃架隣の木箱から弾丸を取り出して、二人分けていく白衣姿。
分配を終えると、彼はＭ１３４を使いやすいようにセットしていく。

「おっしゃ！　じゃあ早くやろうぜ！　あ、次は俺な」
「浜辺の後片付けは支援隊に任せるですね？」
「……連絡。……しとく」
三人が浮かべるのは微笑であり興奮。
己が行うことに何の疑問もなく、何の迷いなどなかった。
彼らの間に存在した目的は二つ。酒の喧嘩と暇つぶしだけだったのだから。

「？？？？何！？」
己の周囲一面を照らす圧倒的光量が突如として来た。
光の出所は前方の船から。
闇に慣れた目を光は刺激し、だが夜食を食べていた花崎たちは慌てることなく自分たちの行動を続ける。
各自で用意したものや識原が提供したものを、砂浜に設置したテーブルに乗せ、皆で食べているのだ。
「……ばれたのかな？　折角の栄養補給タイムなんだけど」
「結構距離あるから違うだろ。まあ、こんな時間にこんなとこで騒いで飯食ってたら、それなりに怪しいけどな」
腹が減っては何とやらって事で、と天條は相も変わらず食べ続けている。
彼が持つのは識原が用意したレーション。パッケージにパンツ一丁の男の股間が描かれた、スティック型栄養食品？俺の棒・漲る肉味？だ。
開発会社は勿論識原財閥運営。
茶色い円柱状のそれは、中に極秘開発されたソースが詰まっており、それが味の決め手となっている。
スナック菓子の感覚で手軽に食べられ、種類も豊富。
自分が食べたのはソースが白い？俺の棒・全開ヨーグルト味？で、味も悪くなかった。

ただ、食す際、男性陣から妙な視線を投げかけられたのだが何だろうか一体。
……まあ意味が解らないけど、良からぬことでも考えてたんだろうね。
状況を自己完結してから今のことを考える。
ライトがついた理由は不明だ。
しかしいつまで経っても男性陣は食っていたり仮眠取っていたり、識原の落下型ひじ打ちを食らって叩き起こされていたり、体勢を戻した識原はケーキを食べようとしていたりと緊張感がない。
……だったらいいのかな？
花崎が不安と安心の境でうろついていると、
「？？？？！！」
瞬間、轟音が炸裂した。
破裂音を何重にも連ねたもの。
自分から二メートル左。音の原因はそこだ。
砂煙の中目が捉えたものは、砂に埋もれた金属片。
僅かながらそれは元の形を残していた。
……銃撃……！。
「伏せてろ、馬鹿！」
未だ立ち尽くしていたその身を天條が後ろから押し倒した。
直後、花崎と天條の右傍。その場に在った砂の大地が一気に吹き飛んだ。
砂浜の一部が舞い上がる。
更に、音。
重音が鳴り響く。
連続する。
その度に砂浜は空に打ち上がっていく。
五秒で音は収まった。
雨の様に砂が降ってくるが、それを気にすることなく花崎は起き、頭についた砂を振るい落として、

「皆、大丈夫？　死んだ人いたら手上げてよ？」
「縁起でもないことと、出来ねえこと言うな花崎・美由紀」
既に起き上がっていた天條が、周囲を確認していた。
「ん？　……おい月形。大丈夫かよそれ？」
今まさに人狼に成り掛けている月形が、砂浜に色を新たに加えていた。
右腕を力なく垂らしている。
滴るのは赤。
花崎には一目でその理由が分かった。
「……！」
肩口が大きく裂けていたのだ。
銃弾が当たったのか掠ったのかは分からない。
それでも、月形は痛みに顔を顰めることもなく淡々と、
「……ああ、問題ないすぐに治るよ。？獣皇化？してなかった僕のミスだ」
月形が言いつつ完全に人狼と成ると、その肩を覆うように存在していた傷は生えてきた毛に隠される。
数秒もすると、月形は右腕を確かめるように回し、次いで勢いよく振り、完治をアピールした。
「さて、攻撃されたことだし。……俺らもそろそろ行くか」
月形の視線が船に行く。彼のみではない。
ほとんどの同級生が起き上がり、弾丸が来た方向を見ていた。
皆の顔つきが変わった。
険しく、真剣なものに。恐らくは自分も変わっているだろうが。
ただ一人。識原だけは両の腕と膝をついた状態だった。
砂をもろにかぶった彼女は身を震わせている。
それは百人が百人見て、恐怖とは言えないであろう震えで、
「ふ、不意打ちとは良い根性ですわね。おかげ様で私の食糧が、楽しみにしていた新作ケーキが台無しに……。許しませんわ！」
明らかな怒りが識原を包んでおり、周囲は若干引き気味だ。

食べ物の恨みは恐ろしい、と花崎は人生での事項を再確認した。

「んー。外しましたね。ミニガンは反動が大きくて扱いが難しいですね。遠距離銃撃も苦手ですね」

のんきな声で白衣の男がぼやく。

銃架に備えたＭ１３４の引き金から手を離し、目を凝らして影を確認する。

「んー、一人膝ついているだけですね。？？あ、今起き上がりましたね。零点ですね」

肩を落とし落胆する白衣の男。

背後では白髪男の笑い声が響いており、

「はは、何やってんだよばーか。貸せ、俺が全部貰うぞ」

白衣の代わりに銃の前に立った白髪頭の男は、引き金に手をかけて、

「こういうのはチマチマ狙うよりばら撒いた方が良いんだっての」

スコープで認識。十代の少年少女が驚きの表情を作っているのが解る。

……あー、ほんと当たってねえじゃん。

命中の証明である赤色がほんの少し、一点しか存在しない。ならばあとは全て外れたのだろう。

……普段射撃訓練なんかしねえし、仕様がねえか。

それぞれがやりたいことをやりたいようにやる。それがこの組織のルールだ。

訓練などないし、それこそやりたい奴しかやらない。

……ま、そこが良いんだけどな。

ただ、一発しか命中しなかったのは不手際としか言いようがない。

子供は動きが俊敏だ。逃がすと色々面倒になる。

日本のティーンエイジャーが銃撃を目の前で見て、動けるかどうかは甚だ疑問だが、支援部隊に要らん仕事を増やすのも借りを作っ

たみたいで我慢ならない。
ゲーム如きに本気になるのはどうかと思うが、一応は面子が掛かっている。
だから彼は指に力を込め、
「……！」
射撃した。

03

……また来る！
人狼の視力で銃の放ち手を確認した月形は、咄嗟の一字を持って前進し、
「俺の後ろに回れ！　花崎は起動状態で結界を！」
皆は即座に反応。
人狼の後ろに二列縦隊で伏せる。
しかし、花崎だけは人狼の背中に寄り添うように立ち、
「行くよ。月形君！」
月形は返事を頷きのみに省略し、前を向く。
己の眼に映るのは、引き金を絞ろうとする中国系の顔立ちをした白髪の男だ。
顔には歯を見せる笑みが浮いている。
……遊び気分か……！！
少しの苛立ちが湧いた。怒りも湧いた。
湧いて間もなく、響くのは銃声。金属の塊が放たれる。
着弾時間は先の経験から一秒弱と判断。
「……来い！」
言葉通りになる。
銃弾は違うことなく己の体の前に在る。
数は二十。その他の弾は全て外れだ。
銃の威力は先程体で体験している。拳銃の一撃を容易に耐える人狼の外殻でも、数発で押し切られるレベルの威力だ。
速度も桁違い。
だが、どうにかならない訳ではない。
……俺には仲間がいるのだから。
「？タダ茨アルコトヲ望ム？」
耳にするのは花崎の声。彼女独特の高音が辺りを振動させる。

直後、周囲の空間認識がずれた。
蜃気楼に包まれているようだ、と月形は感じる。
他人の能力を知る由もないが、幻想的であるとも。
感じている間に、弾が蜃気楼内に、花崎の結界の中に入る。
それだけで銃弾の保持する速度が一気に低下した。
少なくとも半分以下に。
そうなってしまえばこちらのものだ。
「??ぬんっ！」
全身に力を漲らせ、両の腕を力任せに上下に振り抜いた。
襲い来る筈の弾の全てを弾き、逸らした。
銃撃が止み、間が生まれる。ならば、
「??行くぞ、決着をつけに！」

月形の啖呵を聞いた識原は顔を上げて苦笑し、
「ふふ、台詞を取られてしまいましたわね」
「……さっさといこうぜ識原・花蓮。銃撃はもう勘弁だ」
天條がこちらに近づいてくる。
彼だけではなく、皆が己の近くに集まる。
「??それでは、行きますわ」
準備は良いか、とは聞かなかった。
行っても良いか、と問わなかった。
顔つきを見れば解る。長年の付き合いだ。
仲間が傷ついた時点で、既に引けない。
引くわけにはいかない。
責任者を呼び出し二点倒立土下座させてやり、殴って叩いて泣かしてやる。
最早、彼らの頭に自分の宝石のことなど無くなっただろう。
それで良い、と彼女は思う。
宝石のことは自分だけが考えれば良い。依頼したのも連れてきた

のも自分なのだから。
彼らは仲間のことだけを想っていれば、それで良い。
「？灰を纏いし姫君？」
彼女は能力を、声を上げて使う。
それは、これからの意思を示すように。
集めた精鋭十一人。
彼らが存分に力を揮える場へ送る為に。

「な、なんだあいつら！？」
白髪頭はスコープ越しの景色に驚きを隠せなかった。
肩を負傷していた眼鏡をかけた少年がいきなり狼になって、こちらの銃撃を防いでしまった。
ズタズタになるのが当然の状況で、無事に形を残している。
そして周囲の子供たちと一か所に集まると、忽然と何処かへ消えてしまった。
常識外れどころではない。
おかしい、という思い。
それだけが頭の中をかけ廻る。
そして、それに既視感に近いものを覚えた。
いや、それを感じた経験があった。
彼は脳内を検索し、思い当たる節を発掘。それは、
「？？俺たちのボスと一緒……！？」
「ご名答だな、おい」
背後からの声に驚きを感じスコープから目を離し、だが振り向くことは出来なかった。
「おっとストップ。見ちゃ駄目よ、ってか」
首と頭を硬質で長い何かに掴まれ、力づくで床に押し付けられた。
顔面を強打し、それでもなお加わる力に頭がい骨が軋む。
同時に背後から打撃音と苦悶の声と悲鳴が聞こえた。

それは同僚二人の声と同一のものであり、どういう結果を辿ったのか容易に想像がついた。
せめて相手を確認しようと、動かぬ首の視界からで見えたのは銀毛と爪。
記憶に新しいそれは、
「さっきの狼！？どうやってこの距離を！」
「企業秘密だ。それより、？？お前らのトップは何処にいる」
いきなりの質問。だが予想出来たことだ。
もし？ボス？と関係があるのならそれを聞く可能性も。
そしてもう一つの可能性もある。
「あ、あんたは、ボスと同じ側の存在だろ？　み、味方じゃねえのか？」
白髪頭の男は押し付けているだろう狼に抗議するように言う。
狼は言葉を聞き、それに失笑する。
「はは、お前らはまず撃ってから味方かどうか確認するのか？」
狼の手の力が強まる。張り詰めすぎて、切れ始めた額から血がこぼれていく。
「……例え味方だったとしても、軽率な行動をとって、あまつさえ笑みを浮かべて人を撃つ様な者なら、八つ裂きにするがな」
「？？？？く！？」
圧倒的な重圧（プレッシャー）。思わず息が詰まる。
「ああ、無駄だな。お前程度ではこの状態からは逃げられん。潰れる前にさっさと答えろ」
「……があっ！」
いくらもがいても、狼の手から逃れられない。
……どうする？
ボスには恩義はある。だが忠誠を誓ったわけじゃない。
この組織が使い勝手が良いからここにいるだけで、命を賭して守るようなものじゃない。
……どうする！？

白状しなければこの狼は自分を殺すだろう。
既にこの狼の仲間に自分の同僚は殺されている可能性がある。
容赦は期待できない。
どの道を選ぶか決めなくてはならない。
故に決めた。
己の命を守るのを第一とした時、取るべき行動は、
「話す！　今すぐ話すから??」
戒めを解いてくれ。そう言おうとした。だがその前に声が一つ。
「もう良いですよ、月形。この船の構造、仕組み、全て理解し終えました。どうせ殲滅するのですから、トップだけを割り出しても仕方ありませんし」
少女の声がした。己の情報を無に帰す。
そういう意味の言葉を吐いた、少女の声が。
「だと、さ。じゃあ、そろそろ終わりにするか」
力は更に強大になる。骨はもう欠けているだろうし、顔の皮膚の血管が次々に切れていくのを白髪頭の男は感じた。
「し、死にたくない……！」
声にもならない、息に近い音で呟いた時、救いが訪れた。
それは幾つもの足音。
聞き覚えのある軍靴が船の甲板に打ちならす音。
……き、来た！
呼んでおいた後方支援部隊が到着したのだ。

天條たちは音の方向を見る。
総勢百人はくだらない黒の軍勢が、武装して現れたのだ。
甲板上だけではなく、見張り台や、砲塔の根元などにもいる。
「よくもまあ、ぞろぞろと。夏場の台所に出て来るアレですかよ?」
「一匹いたら数十匹いると思えって奴ね。これは数十どころじゃないけど」

凪柄は自身の足元に魔法陣を描きながら胡乱な眼を多勢に向ける。
すると黒の群の先頭に拡声器を手にした一人が進み出て、
「あー、テステス。？？？？侵入者諸君に告ぐ。現在貴様たちが人質としているのは我が組織？竜宮？における四十四天王が一人？？？？」
言葉を聞いた天條たちは皆で円陣を組み、
「？？四十四天王って何だよ？　戦力インフレしすぎじゃね？」
「いいのよ、細かい事は。悪の組織ってのは自分を派手に見せたがるんだから」
「あー、あれだね。実は大したことないのに第七将軍とか大層な役職作って、でも人いないから小規模作戦しか出来ないっていう矮小軍団」
「そうですわね、世界征服が目標なのに地元一つ落とせない方々もいらっしゃいますし」
「……お前らもう少し真面目に話聞いてやれよ。相手方ちゃんと話してんのに惨めだろうが」
件の四十四天王の一人を、現在取り押さえている月形が黒の先頭に哀れな視線を差し上げていた。
「？？という訳であるからして、解放を願いたい」
「あ、話終わったみたいだね」
「……で、どうするのよ。地図は頭に入ったんでしょ？　そいつの記憶覗いて」
話しかけるのは同年代と比べてもかなり小柄な少女。
彼女は天條に四肢を穿たれ昏倒させられた、白衣姿の頭に手を翳している。
「はい。後で皆さんに転送しますので、地理は大丈夫だと思います」
「じゃあ、……こうする事にしますわ」
識原は己が気絶させた大男を、
「？？？？はあっ！」
軍勢目掛けて投げ飛ばした。

元々の図体からして重く、気を失って更に重くなったであろう男の身体を、難なく持ち上げた上での、遠投。
放物線を描いて飛んで来る大男を黒服たちは受け止めるかどうか迷う暇もなく、強制的にその重量物を支える羽目になった。
慣性付きの重量を耐えきれない者は下敷きとなって潰れ、速度あるものは避け、技術あるものは受け流した。
それに続けるようにして、
「おお？　意外に効果あるな。俺もやろう」
「うあ……！？」
月形が白髪男を片手もちのままぶん投げた。文字通り投げた。
あっと言う間に速度に乗り、きりもみ回転付きで一直線に男は飛び、
「？？？？？！」
そのまま黒の群の中心にストライクした。
彼らは水平に飛んで来る人間を受け止める術を持ち合わせていないらしく、そのまま十数人が薙ぎ倒された。
それによって、黒の中に隙間が生まれた。
細いが確かな一本道。その先に見えるのは船内通路だ。
「なんか道出来たわよ。あそこ通り抜けるの？」
「そうですわね。予想と違いましたけど結果オーライですわ。じゃあ、あそこを通り抜けてから地図転送して各自策敵&殲滅行動ということで」
数秒でこれからの方針が決まる。だが、異論を唱える者がいた。
「……月形。お前ここに残れ」

「ん？　何を言っているんだ翔人？」
天條だ。彼の言葉に月形は戸惑いの様な疑問を浮かべる。
……まさか、な。
解る筈がない、と月形は思う。

だが彼は人狼と化した月形の右腕を指し示し、
「いやだって、お前のその腕、まだ本調子じゃねえだろ？」
「……む、気付くか？」
やはり、と言うべきか。危惧していたことを気取られた。
確かに完治はしていない。肉をこ削ぎ取られたからか、動きに支障はなくとも痛覚による反射行動が鈍る。
僅かに庇っていたのを見抜かれていたのだろうか。
「前にも言ったような気がするが、初等部の頃からのお前の癖。負傷が治らない時にいてえって言わねえのな。その腕で俺たちみたいなのと当たるとキツイだろ？」
指摘を受けてその通り、と月形は苦笑する。
この状態で能力も何も未知な？ウラシマ？と戦うのは心許ない。確かにそうなのだが、
……細かい所までよくもまあ。
人の癖を把握している。苦労性の天條らしい。思わず苦笑からただの笑みに変化してしまう。
「……んじゃ仕方ねえ。俺はここの掃除をしながら回復してればいいか？」
「おう、珍しく委員長らしい仕事出来るじゃねえか。良かったな」
そういえば、初等部の頃から委員長をやってきたが、初等部中ごろに来ると人狼となって肉体言語に訴え出ることが多かった。
委員長らしい仕事なんてほとんどやってこれなかったのだ。
例え雑務であろうと、それがらしい仕事であるのなら、
「おおう！　何かやる気出てきたな、おい！」
「その調子で頼むぞ、委員長」
「……クラス会議は終わった様ですわね。じゃあ、走りましょうか皆さん。月形さんは休む前の一仕事として突破役をお願いしますわ」
こちらの意見を聞かず有無を言わさず突破役に認定されてしまった。
……まあ、言われなくとも、やるつもりでしたが。

話が済んだと見るや、識原は服を整え体を前に倒す。
疾走の準備だ。他の皆も各々で準備を整えている。
そして識原はいつものように思いきり息を吸い、いつもの言葉を吐く。
「妖精騎士団、??出・撃！」
月形を先頭に全員が黒の群れに突撃した。

人狼が、立ち塞がる黒を跳ね飛ばしていく。
あるものは水平に跳ねられ人を巻き込み、ある者は打ち上がって鈍い落下音を立てる。
高速故に銃を使う暇はなく、多勢故に銃器を使う隙間がない。
かと言って、格闘で立ち向かえば弾かれ跳ねられ終了する。
人が埃の様に舞う。
散っていく。
吹き飛んでいく。
一分も経たぬうちに数を半分以下に減らされた。
対処法を考える時間もなく、そう悩んでいる内に、
「抜けましたわ！　では計画通りに！」
応、と意気の籠った返事が壁を挟んだ通路から聞こえた。
通過されてしまった。
元より足止めが任務ではないものの、本拠地に敵を入れてしまうというのは些か不味いことだ。
そして、通路に通じるゲートの前には
「それじゃあ委員長であるこの俺が、ここの整理整頓を始めるぞ。掃除を任されたのは久々だから、気合入れて念入りにいくぞ。吹き飛びたい奴は一列に並べ??！」
人狼が堂々と腕を組んで立っていた。
彼を中心に放射状の陣で取り囲むが、先程の惨劇を見せられた黒の群にとっては、そこへ突っ込む行為は愚か以外の何ものでもなか

った。
人狼は動かない。
こちらが動くのを待ってからやる気か？　との声が囁かれる中、
「あ、あの狼は、み、右肩に、怪我、が……」
あちこちを擦り切り、所々に骨折のあとがある上官が、そう呟いた。
黒の群内に動揺が走り、その後、勝利を予想する笑みが広がった。

その経過を月形は静かに見ていた。
群衆とは面白いものだ、と月形は心底思う。
たった一つの希望が伝播することで士気が上がる。人狼としての聴力で郡内の会話を聞くと、怪我をしているから動かない、動けないのだ、という憶測が飛び交っている。
そしてその言葉を信じた兵がこちらに銃口を向ける。
白髪頭の言葉を聞いた全員が、月形の一点に狙いを集中させる。
右肩。
銃撃のオンパレードが始まった。
的確に確実に右肩を銃弾で打撃する。
怪我のことを大々的に言ってくれたおかげだろう。
「だがよ……！」
その全てを弾き、逸らし、または真正面から受けて耐え、前進していく。
一つの希望が士気を上げる。ならばその希望を潰してしまえば良い。
そしてそれが言えるなら、
「たった一つの絶望で、士気は駄々下がりってこともあるだろうが！」
前進する。
来る弾は弾き、銃撃の合間を縫って突っ込んでくる者を潰し、また銃弾を逸らし、進んでいく。

このゲートを通しはしない。仲間が先にいるのだから、背後から突っ込ませるわけにはいかない。
拳銃では効かぬと判断したのか、後方にいた人物が縁に在るＭ１３４の銃口を向け、
「？？？？？？？！」
引き金を引いた。己を一度は貫いた弾丸が襲い来る。
しかし、月形は避けようとはしなかった。
……逃げるものか。
無粋な玩具如きに二度も傷を許すわけにはいかない。
全身の力を限界まで漲らせる。
「人狼を、この月形清義を、――なめるな！！」
身体に豪速がぶち当たった。
轟音。
爆発のような音が月形の体から発せられた。
月形の上半身が仰け反るのを見て、黒が歓声を上げる。
それでも、そこまで止まりだった。
月形は何事もなかったかのように歩行する。足取り確かに一歩一歩。
ガトリングガンの銃声。
今度は腕で弾いた。そしてまた前進。
ひ、と怯えの声が広まるが、構わず更に前進する。
銃弾降る中進みながら、己の射程まで辿り着いた月形は心に溜めた言葉を想う。
単純で浅はかな考えで、己に勝てると思いつけ上がった者に、ただ一言。
「終いだ……！」
黒の軍勢の悲鳴と、打撃音だけが響いていく。

04

喧しい音が響く四角い空間がある。
響く喧騒は黒いスーツを来た者たちが起こす口論。
深夜だというのに元気よく己の言い分を通しあっている。
天井照明は臨時会議の場を夜でも変わらず明るくし、またよく人を照らしている。
幾つもの柱と窓から成るその空間。柱には５Ｆと表記されている。高さ三メートル、道幅五メートルの船内通路だ。
照らす影の中に一つ、地を離れて疾走するものがあった。
天條だ。
彼は宙を蹴って進む。黒服を捕まえ尋問し、時に案内させ、時に気絶させて、最短距離を突っ走ってここまで来たのだ。
……あいつらの話だと？ボス？ってのは最上階にいるらしいが……。
どうも嫌な予感がする。
脳内には同級生から配信された船内地図があるのだが、船の中心にはボートにもなるようなシェルターが配備されている。
隠れるならばそっちの方が断然いい。
なのに何故、態々最上階にいるのか。
「馬鹿と煙は何とやらってか……」
自分でも妙だ、と思うことを口にしながらも、天條は走り続ける。
「……つーか、俺以外こっちに回って来ねえってどうなんだよ？人、少ねえからいいけどよ、せめて二人一組にすべきだろ」
現在は各個人で行動中だ。単独もあればグループもコンビもある。
……ボス相手だったらグループだろ普通。
心の中で文句を垂れつつも、迎撃の少ない、ほぼ無いと言っても良い連絡通路を走り抜ける。今まで見てきた分かったが、そもそも船内武装兵自体が少ない。

自分がそれなりの速度で走れているのがその証拠だ。
「甲板に出てきたのが大半の大半だったのかね？」
疑問には思うが、こちらとしてはむしろ有り難い事なので深く考えない。
そうこうしている内に、六階への階段が見えてきた。
巨大な螺旋状の階段。
この船は一つの階段では一階ずつしか上がれないようになっており、最上階に行く為には別の階段を使っていかねばならない。
防衛用なのだろうが、
「？？面倒なんだよ畜生！」
階段中心の吹き抜けを？自由の空？で駆け上がる。
真上へ連続で飛び、辿り着いた先は、
「……最上階の大扉。先は一フロアすべてを使ったスイートルーム。通称？ボスの間？。
……締まらねえな、おい」
微妙なネーミングセンスに愚痴を言いながら、扉に耳をそばだてる。
聞こえるのは男の声。
『むう。そうきたか。ならば我はこれで、？？チェックメイトだ』
何か指示を出している。もしかしたらモニターでこちらを確認し、潰す算段を付けているのかもしれない。
そうであれば急がなくてはならない。
目の前の扉の先に何が待ってるかは分からないが、
「……飛び込むしかないだろう」
天條は一度深呼吸する。
覚悟を決めた。
迅速な行動を自身で望んだ天條は、
「……」
扉を三回ノックした。

船内に侵入した少女二人が、ゆっくり二階部奥へ歩いていく。
その前に立ちふさがるのは防弾アーマーを身に付けた男たち。
「ここを通すな？？？？！」
恐らくは迎撃部隊だ。数人も集まれば細長い通路だ、壁に等しい。
一直線の廊下という、銃には有利な状況下で、しかし彼らは押し返されていた。
ドレスを纏った少女は出現と消失を繰り返し、いつの間にか肉薄されて打撃される。
遠距離から銃撃しても魔女帽をかぶった少女に止められ、跳ね返される。
肉弾戦に切り替えても、近づく前に何かに押しつぶされて動けなくなり、意識を刈られる。
たった二人の、見た目は普通の少女に投げられ撃たれ吹き飛ばされる。
く、と誰かが歯噛みするも、以前勢いはそのまま。
背後には、守れと命令されたものがあるのに。
もし奪われでもしたら、その先に待っているのはボス直々の処罰。
それだけは絶対に避けたかった。
後方に行かれてはならない。それが絶対の意思。
だが、その意思に気を取られ過ぎた。背後を気にするあまり、前の注意をコンマ秒単位で疎かにしたのだ。
それを彼が知ったのは、超至近まで迫ったドレスの少女が、自分を地面に叩きつけた時だった。

どうぞ、との返事を受けた天條は、扉を開いてボスの間に入る。
まず目に入ったのは、光を放つ物体。
ＰＣだ。
そしてモニターの前には一つの姿が座っていた。

Tシャツにジーンズ。その上から甚平を羽織った壮年終期の男。
彼はこちらを一瞥すると、
「何の用かな？　貴殿は誰かな？　我に何か用かな？」
質問の雨をぶつけてきた。
予想外だが、それでも銃弾よりはマシだ、と天條は思い、
「私立清耀学園所属、？自由の空（ピーターパン）？天條翔人だ。アンタは、……ウラシマか？」
「ふむ。知っているのならこちらの名乗りは必要ないでな。それでは帰ってくれるかな。我は今忙しいのだよ」
ウラシマは天條の名を聞くと、もう興味はないとばかりに視線をPCに固定。
マウスとキーボードを弄り始める。
「そうはいかねえよ。こっちにゃ用があるんだから」
「……む。そこは、？？いや、これで行けるでな」
全く人の話を聞こうとしない。天條には似たような経験がある。
……こいつ、識原に通ずるものがあるな。
あの少女も人の話を聞かない。いや、聞いていても結局は聞かないのと同じだからより性質が悪い。
仕方ない、と天條は覚悟を決める。
人の話を聞かない野郎には、
「……実力行使が一番だな」
間髪いれずに自分の意思の意見に賛同する。
こういう輩を相手にする際、下手に頭を使うと鬱になる。短絡的考えが一番だ。
……とりあえず、殴っとくか。
昏倒させて連れていく。その後は識原の裁量次第だ。
目的を果たす為に天條は、
「んじゃ、先手必勝って事で」
宙を両の足で蹴ってロケットスタート。
床とほぼ水平になって、足元の大気を蹴り加速。

距離にして三十メートルを二秒で駆けデスク上、パソコンの脇に位置取ると、腰のホルスターからナイフを抜き、
……刃を隠して、と。
峰で思いきり頭を殴る。手加減はしない。
識原の家で一通りの資料に目を通したが、本当に浦島太郎であるかどうかも怪しい。
だが、何らかの能力を持つのは事実なのだ。油断しないに越したことはない。
天條は左腕を思いのままに振るった。バックハンド。
瞬間、ウラシマが反応を見せた。
……避けるか……！
だが、その予感は外れた。
「ぐあー、またバットエンドか！」
ほんの少し上半身を仰け反らせただけ。必然的にナイフは狙いから外れ、
「あ……」
ウラシマの首筋に叩き込まれた。
それなりの重みを持った金属が細い首に直撃した。
外したと思って慌てて振り抜こうとしたのがいけなかった。
ナイフの刃は反り返っている。丁度その反し部分に首が引っ掛かったのだ。
鋭利な部分だ。切り裂いていても不思議ではないのだが、
……？
それにしては妙な感覚が天條の手に残った。
刺突にせよ打撃にせよ、肉の感触はあるのに、
……全く無いのは何故だ？
「うーむ。……我の楽しみの邪魔をするのは頂けないな」
首にナイフが刺さったままウラシマがこちらに眼の焦点を当ててくる。
否。

首にナイフが当たってすらいない。
見えない何かに防がれるように、ほんの僅かだがウラシマの首との間に空間があった。
……何だ？　浦島太郎にこんなことは記されていない……。
「どうしようか。このまま邪魔をされては堪らん。どうして欲しい？」
自問自答の末に問い掛けて来るウラシマ。首の傍にナイフがあるというのに落ち着き払っている。
「……さあな。ちょっと俺と戦ってみるってのはどうだ？」
嫌な予感を感じた天條は挑発をしつつ、数歩後退する。
デスクを挟んで相対し、その能力を見極めようとした。その直後、
「？？では、こうしよう」
ウラシマが移動した。速度は並。
デスクを飛び越え、歩いてこちら側へ。手に持つやけに長い棒は杖だろうか。
そこまで考えて思考を中断し、様子を見る為に距離を取る。
取ろうとした。
「……！？」
何故か身体が動かなかった。
彼が、自分に手の届く範囲に来る。
その時、体は起動した。
「どうだ？　神の威光というのものは。面白いであろう？」
「？？？っおお……！」
判断は一瞬。
躊躇いは無し。
天條は跳んだ。
全力のバックステップ。
体勢もへったくれもない。
自らの脚力に任せた強引な跳躍。
離れなければ、と感じた。不味い、とも。

とにかく足を動せ、と意志が命じる。
距離をとれ。
遠ざかれ。
近くにいてはならない。
反射に近いレベルで体が動いた。しかし、
「逃げられると、少し寂しいでな」
追いつかれた。
当然だ。
「？？？？！？」
あれほど離れたと思ったのに、動けたのは二歩だけ。
己の歩幅二つ分より少し大きく下がって浮いただけで、後退は止まっていた。

空中に在れるという珍しい特技を披露した、天條と言うらしい少年をウラシマは完全に捉え、言葉を投げかける。
「気分はどうだい、天條とやら？」
「最低だ、馬鹿野郎……！」
良い返事だ、と感じつつウラシマは、己の釣り竿のように撓る杖を振りかぶり、フルスイングした。
芯で腹を打たれた天條はくの字に曲がり、自然法則に従って吹き飛び、部屋の内壁と外壁、二枚分突き抜けて廊下を勢いのまま転がっていく。
そして柱に身体が激突し、勢いが止まる。
スイング後の残心を終えたウラシマは、
「ふむ、では続き続き、と」
自分の定位置であるデスクへと戻っていく。

廊下で瓦礫に埋もれる中、参った、と天條は思った。

今の一撃で識原から貰った見代わりの護符二枚が全て御釈迦である。
聞けば一枚で下半身が吹き飛んだり、内臓を貫かれたりするのを庇ってくれるらしい。
まともに受けたら内臓破裂どころじゃなかったようだ。
……しかし、威光か。
そんな台詞を吐ける類の存在は限られている。
確かめねば、と天條は立ち上がり、先ほど強制退室を促された部屋へと舞い戻る。
今度はノックなしでいきなり部屋へ。
中の光景は先程とほとんど変わらない。ＰＣ画面前に座るウラシマ。
表情豊かに画面を見つめるウラシマに天條は問うた。
「……アンタもしかして、日本書紀に書かれた奴かよ」
「ん？　それ以外に何があるのだね？」
こちらを見もせず、当然のように答えた。
「成程ね。妙だ妙だと思ってたら、最古の神格位かよ。そりゃ話が噛み合う筈ねえか」
昔話どころではない。歴史書に神仙として書かれた歴とした神格だ。
こちらの話に興味を持ったのか、ウラシマが顔を上げてこちらを見て、
「そうじゃな、天條とやら。我は貴殿の先祖、……ピーターパンでいいのかな？」
天條は頷く。
「？？それが出現する遥か昔から、己の存在確立していたでな」
やはりと言うべきか、ウラシマは御伽話の真実を知っている。
ということは自分たちのことも、予想できていると考えた方が良い。
「……童話や昔話は俺らから出たもんだが、伝承クラスともなると

な……」
面倒だ、と天條は心底思った。
神格位はその名の通り、神の座に位置するものだ。人の身でそれと争うとなると、
……やべえこと極まりねえな……。
だが何もしない訳にはいかないのだ。
「まあ、自己紹介は済んだんだ。本題に入ろうぜ？」
「本題？　我はこれをプレイするのに忙しいんじゃが？」
これとは？　と天條は問う。
先程から神ともあろう者が忙しそうにしている。その原因に、少しばかりの好奇心を抱いていたのだ。
こちらの疑問にウラシマは頷き、会心の笑みを浮かべ、デスク棚から一つの箱を取り出し、
「今月発売。既に歴史に残る名作として名高い『乙姫と遊ぼう（成年編）亀の擬人化もあるよ』だ！」
胸を張って堂々と、女性の肌色全開で、とてもカラフルなパッケージを突きだして来たウラシマに、
「ただのエロゲーじゃねえか！！」
渾身のツッコミを入れた。

……っは！？危ねえ。
一瞬あまりの出来事に意識を手放しそうになった。
予想を五千七百六十度ほど回転させられた気分だ。
「か、仮にも神格位が、十八禁ゲームなんかしてんじゃねえ！」
「何を言っているのだね？　別に神格位がエロゲをやってはいかん、という法律はないでな！」
「法律とかの問題じゃねえんだよ！　イメージが全部台無しだろうが！」
天條の言葉をウラシマは嘲笑し、

「？？ふん。イメージなど勝手に人間が付けただけじゃろうて。例え、神であろうとエロゲはするし、覗きだってする時はするのだよ」
「格好良く言っても後者は犯罪だ？？？？！」
天條の叫びをウラシマは耳を塞ぐことで回避した。
……こ、このやろ……！
落ち着け。落ち着いて考えを元に戻せ。
色々ずれたが、こいつは性格はともかく能力は間違いなく神格位。
人の動きを近づくだけで阻害し、ある程度こちらの攻撃を自動キャンセルする。
反則クラスだ。
まともにやりあっても勝ち目は薄い。
だが、と天條は思う。
……結局一緒だよな。
全ては己の道。変わることなどありはしない。
「聞きたいことがあるんだが、いいか？」
「まあ、丁度バットエンドを迎えて息抜きが欲しかった所じゃし、構わんよ」
細かい所はスル―決定。
相手が神であろうと何だろうと、やることは結局変わらない。
ツッコミと、
「言ってくれ。アンタの信念を」
いつも通りの自分の問い。自分のルール。
「アンタがこの組織を何故作り、何故犯罪行為をさせているのかを、教えてくれ」

05

粗方の兵を片付け、凪柄と識原は通路を歩く。
兵がここにいるということはこの先に大事な物があるのだ、と識原は推測する。
地図によればこの先は倉庫。
前衛を識原に任せ、凪柄は後方から敵を狙い撃つ。
そうして敵を退けて辿り着いたのは、重々しい扉を持つ倉庫。
その扉に取っ手はなく、金庫の蓋のようにダイアル式ロックが取り付けられている。
「パ、パスワードがなければ入ることは出来ん。そして我々はそれを知らぬ！」
勝ち誇るように告げる倒れた兵士。
彼の言葉に頷いた識原は徐に腰に付けた小太刀に手を伸ばし、
「……よいしょっと……！」
横に一閃。抵抗なく鋼鉄の中に刃が吸い込まれる。
「ほいほいっと……」
縦に二閃。まるでバターのように柔らか。
扉を切り裂いていく。後ろを窺うと唖然とした眼を向ける兵士がいた。
いい気分だ、と感じつつも、
「ラスト」
コの字型に斬った中心に直蹴りを入れる。
当然、切り取られていた厚さ二十センチの鋼鉄は重力に従って倒れる。
金属の重扉は意味をなさなくなった。
穴というには綺麗すぎる空洞から識原たちは侵入する。
三十平米の倉庫内には、数々の物品が並べられていた。もう宝物庫と言った方が正しいだろう。

識原の調べによれば、かなり高価なものをため込んで、魔具や呪術具なども節操無く世界からかき集めているらしい。
自分が今回頼んだ宝石の中には、曰くつきの物が幾つか入っていたので狙われたのだろう。
……そんなことは今どうでもいいですわ。
現在の最優先目標は己の物を取り返すこと。
室内を隈なく見渡し、己を期待するものを探す。
「??み、見つけましたわ。私の宝石箱??！」
今にも踊りだしそうな識原の視線の先。
部屋の中央のテーブルには小型金属ケースが置かれていた。
その周りには檻のような物が張り巡らされていたが。
人狼もかくやというスピードで突進する識原。
背後では呆れた眼をした凪柄が壁に背を任せて起立していた。
「……花蓮。よくもまあ、綺麗な石如きにそこまで拘れるわね?」
「聞き捨てなりませんわよ、美菜。貴女も宝石は好きでしょう」
「いや、嫌いじゃないけれど……。ここまで執着はしないでしょ普通?」
確かにそうだろう、と識原は正常な精神で判断する。しかし、
「??忘れたんですの? 物欲と執着心の暴走。それが私が?灰かぶり?の末裔である、
……いいえ、私の一族がそうである理由ですもの」
何ら気負うことなく、識原は言った。

「ふむ、信念。犯罪動機、か。??特に無い」
何の感慨も込めずにウラシマは言った。
「特に無い、というと?」
「うむ。言葉の通りだ天條とやら。我が組織を作ったのは昔で、今の顔触れは知らんのでな。何をやっているのかも解らぬ」
つまり、こう言いたいのだろうか。

組織がやっていることと自分は関係ないと。例え自分がそこのトップであるとしても
それを天條が口に出すと、
「その通り。そもそも我の目的は一つ。それ以外はおまけに過ぎぬのだよ。だから他人を気にする事はないし、気にしない。だから我は組織などどうでもいい」
「……目的？」
ああ、と頷いたウラシマはこちらを見つつ、懐から物体を取り出す。
それは野球ボール大ほどの、黒色漆塗りの立方体。
「そりゃあ、まさかあの有名な？？」
「そう玉手箱。不死の我が永遠を生きる為に必要不可欠な、蓬莱にて賜った至高の一品じゃよ」
「どういうことだよ。アンタ神で不死なんだろ」
言ってウラシマは箱の上側？吸？と刻まれた部分を弄る。
するとその面がバネ仕掛けのように勢いよく、観音開きした。
そこから出るのは黒煙。十秒経たずに煙はウラシマを包みその姿を隠す。
「我は神仙であり不死。だが、不老では無かったのじゃよ。だからこそ、玉手箱が必須なのじゃな。老化を吸う玉手箱が」
だけれども、と黒煙の向こうからウラシマの声が聞こえる。
「これは贋作じゃて。あと数回使えば壊れてしまうほどにガタがきているでな。乙姫が作ったとされるオリジナルは何処にあるのか解らぬ」
黒煙が晴れる。そこに現れたのは外見二十歳ほどの青年。
さっきまでのウラシマが若返ればこんな感じであろう、と容易に想像出来る。
そしてそれが玉手箱の効果であろうことも。
……そうだ、あのガードマン。
煙を見て老化というのは、玉手箱の効果に他ならないだろう。

何故、彼らを襲ったのか。何故、
「識原の宝石を狙った？　あの財閥を敵に回した所の噂、聞かなかった訳じゃないだろう？」
「簡単な話でな。何を敵に回しても我の望むものがそこに在ったという、それだけのことじゃよ」
ウラシマの口調から察するに宝石が目的ではなく、
……それに付随する何か。
もしくは、
……宝石では無い、何かが紛れ込んでいたのだとしたら……。
天條は必死で知恵を巡らす。
この状況をどうにか抜け出す為に。

凪柄は、識原に告げられた言葉に対し、過去の記憶を呼び起こしていた。
我慢するという機能が破綻した存在。
ある一定の閾値を越えた瞬間、それは作動し、おかしいと認識していても歯止めが利かなくなる。
それが、識原の一族に課せられた呪い。
中等部に入って間もなく当の本人から聞かされたことだ。
誰に掛けられたのかも、何故掛かったのかも、凪柄には解らない。
ただ、それが辛いということだけは解った。
自分が異常だと理解しているのに、止めることが出来ないのだから。
妖精騎士団は、それを緩和する為に存在しているのだ。
いつかその呪いの経緯も話してくれるのかしら、と凪柄は思いつつ、
「……そんなあっけらかんと言うことじゃないわよ？」
「事実ですもの。……それに聞かれたら返す。当然の礼儀ですわ。
……それにしても空きませんわね」

先程から檻を小太刀で何度も斬りつけているが、傷一つ付いていない。
「斬るのはさすがに無理じゃない？」
「これは、一応錬鉄も切り裂く振動型なのですけど……」
さっきも見ていたのだ。それは解る。
しかし、この檻には妙な力が感じられた。
「花蓮、どいて。……解析は私向きみたいよ、これ」
己と同種の力、魔法だ。
それは事象に干渉する奇跡。人を害する呪い。
だが実際は、然るべき手順を踏んで、然るべき行為を成すことで現実を操る。
ただそれだけの技能だ。
この檻にかかるのは、恐らく概念の固定。
「宿題サボった時似たようなのを、母さんにかけられてね。椅子に固定されて移動できなくされて、強制的に勉強させられたわ」
下半身だけ固定だったので、上半身は動けた。
数学の問題集を全部解くまで開放しないと言われたので必死にやった。
尿意を催してもトイレに行けないのでかなり焦ったが、粗相を犯す前に解呪完了したのはいい思い出だ。
そのあとはまた、より頑丈に縛りつけられたが。
「はあ、それはそれは仲の良いことで。？？で、その際の解除法は？」
「まあ、簡単なのよね。この？状況？を壊すことよ」
存在を概念として固定するには座標や目標がいる。
自分の場合、椅子が座標だった為、それを破壊することで逃れることが出来た。
なので、この場合は、
「テーブルを壊せばいいんだけど、……難しいかも」
「どうしてですの？　見た限り何の変哲もない木製の机ですけれど

？」
凪柄は首を横に振る。彼女は懐の水筒を手にすると、
「違うのよ。この机、運動力半減されるわ」
中身を僅かに机の上目掛けてこぼした。当然液体は引力に従い落下していくが、
「……これは……！」
机まで十センチの位置で、速度をガクンと落とした。まるで速力を奪い取られたかのように、ゆっくりと落下していく。
たっぷり数秒かけて、水滴は十センチを移動し、机に着いた。
凪柄は吐息し、
「呆れるくらい厳重ね。そんなに宝石大好き人間なのかしら、ウラシマとやらは」
概念に、重力。手間もかかり体力も消費する魔法ばかりだ。
自分であれば重ねがけで一分持たないくらいの。
この堅い守りをどうするのか、と識原を見ると、
「……花蓮？」
笑みを浮かべていた。
楽しそうな、楽しくて楽しくて仕方ないとでも言うような、そんな笑みを。
「いいでしょう。最大出力でぶっ壊しますわ。美菜は離れていてくださいませ」
何をするのか、凪柄には理解出来ていた。
……外に出た方がいいわね。
識原に背を向け、倉庫を後にする。
彼女の本気。一度見た時は眼を疑ったが、
……生身で出来るものじゃないわね。
考えた直後、大規模な揺れが彼女を襲った。
沈黙の中、天條とウラシマは相対していた。

彼らにも船の振動は伝わっていた。
いきなりの激震に、ウラシマは驚いた様子で、
「おおっ！？何だこの揺れは？」
「あー、多分うちの連れだな、こりゃ」
天條は頬を掻きつつ、攻撃力過多な女性を思い浮かべる。
……少しは加減してくれよ、識原。
この船沈むかもな、との不安を押し隠して、ウラシマへの集中を続ける。
「悪いが、ちょっとアンタの信念は許せそうにないわ」
「ふむ、我は誰に許可を得ようとも思わないのじゃが」
だろうな、と頷き、しかし抗うように、
「その玉手箱。予測だが、吸うことだけをしてられないだろ？」
ウラシマは意外とでも言うような表情を作り、
「おお？　当たりだ天條とやら」
言い終えるや否や、玉手箱の？吸？の字がある所の背面をこちらに向ける。
その面に書かれた文字は？発？。
「これが贋作足る理由の一つにそれがあるでな。吸引量の限界。いずれは吐かんとパンクしてしまうのじゃよ」
だから、目的の物を手に入れる際、老化を吐きだして解消した。
実力があるのに、無難に押し通ることも出来たのに、それをせずに利用した。
気に食わない。
自分の力を理解せず使う。気に入らない。
自分の作った組織ですら放任し、責任を放棄する。
……気に入らねえ。
そう思った。
だから、天條は、気に食わないモノを潰すため思考に入る。
現状勝ち目の薄い戦いを前に少しでも活路を開く。その為に。

撃砕音。
まず凪柄の耳に入ったのはそれだ。
様々な物を纏めて同時に砕いたような、高低おり混ざった音。
……さて、と。
改めて倉庫に入ると、粉塵が充満していた。
しかし同時に風も感じられた。風が塵を吹き流していく。
埃舞う中に影が見える。
口を袖口で覆いながら、その陰に近づいていく。
影の正体は識原。彼女は金属ケースを手にし、目の前に在る事実を見ていた。
「……相変わらずの威力ね、花蓮。船体に穴開いちゃってるじゃないの」
そこには遥か下、波打つ海が見える一筋の空洞が出来上がっていた。
明らかにやり過ぎだ。
「む。これでも結構手加減したつもりなのですけれど……」
全力でやったらこの船轟沈してるわよ、と心中で凪柄は言う。
「??まあ、良いわ。目的一つ達成ね」
「ええ、でも中身が無事か確認しませんと」
はいはい、と凪柄は勝手にやるように促す。
そこで彼女は上から射す赤い光に気付いた。
それは緊急アラームが鳴る際につく非常灯で、何故今着いているのか予測するのは簡単だった。
……アラームのケーブルが引き千切れたのね。
だから、光だけで音がない。呆れるほどの馬鹿力だ。
恐らく一撃においてはクラスでトップだ。
……ま、何度も使えないのが弱点だけどね。
と、凪柄は先程から何も言わない識原を見る。
ケースを開けた彼女は自分の宝石を取り戻した喜びで震えていた。

「……震え？」
何かがおかしい、と凪柄は思う。
彼女が震えて嬉しがる様など見せない、とも。
考えられる原因は一つだ。
凪柄は識原の手元にあるケースを覗きこむ。その中には、
「……一個だけ？」
深緑色の楕円形宝石が一つ、厳重な梱包をされて入っていた。
識原の震えの正体は怒り。
肩透かしを食らった分だけそれは大きく、
「ふっ、ふふっ。なめられたものですわ。私も……！」
ふらふらと立ち上がると、倉庫から出ていく。
これは不味いかも、と凪柄は冷や汗を掻き、識原に続く。
いざとなった時の為、物理的に動きを止める魔法を用意しながら。

天條とウラシマはデスクを挟んで未だ相対していた。
一切の緊張感を持たないウラシマは、ゲームを声を上げてやりながら、時折天條の質問に答えている。
天條は緊張を保ちつつも、次々に情報を仕入れていった。
……だが、弱点は解らねえな。
こうして生きている以上、生物としての弱点が必ずある。
それを探っているのだが有用な情報がない。
手詰まりか、と天條が悩んでいると
「そう言えば、貴殿のここにいる理由が不明瞭じゃな。聞く限り、宝石を奪いに来ただけではあるまい？　我だけ語るのは不公平じゃし、説明を願おうかの？」
久々の問い返しが来た。それも飛びきり言い辛い、この場にクラスメイトがいたら絶対話せないことだ。
が、今の状況は違う。だから天條は息を吸って、
「まあ、理由は二つ。一つは単純なんだが、アンタが気に食わねえ

から。？？だけどこれはここにきてから見つけた理由だ」
来る前から理由はある。無ければ来ることはないのだから。
「俺の仲間に、人の話は聞かない、忠告も受け付けない、肝心な所は人任せにするどうしようもない女がいるんだ」
ああ、そうだ。
「そいつの頼みはいつも無茶ばかりで、本当にどうしようもないんだがな……」
感情が入っていて論理的ではない。
解りつつも、天條は言葉を紡ぐ。
「そいつは、俺たちに日常を与えてくれたんだ。学校通って、クラスの中でダベって、友人達と馬鹿をやれる。そんな普通でいられる場所を、そいつは用意してくれた」
こう考えてんのは俺だけかもしれないが、と天條は苦笑する。
「だから、あいつを止めたり、あいつの言い分を拒むことはあっても、見捨てることだけは出来ねえんだ、これがな」
放っておけば一人で何処へでも突っ込んでいきそうなじゃじゃ馬だ。手綱を引いて、もしくは見守っておかねば心配だ。
全ては自己満足でしかないが、
「そういう訳だ。理由とも言えねえだろうが、やっぱりこれくらいなんだよ。俺の戦ってる原理ってのは」
言う天條は更に苦笑を強め、
「本人には言うなよ？　恥ずかしいからな」
ふむ、とウラシマは頷くが、
「言うなというのなら言わない。本人というのも解らないでな。しかし、君の背後で顔を赤らめている少女が、その本人であるのなら無駄ではないのかね？」
「はあ！？」
天條は全力で振り返った。
そこには照れか怒りで顔を染めた識原と、恥ずかしいものを見たという顔をしている凪柄、月形、花崎の姿があった。

「？？？？いやですわ、もう」
訂正。識原のは完全な照れだ。
……ぐあああ！！
この日これまでで一番の大ダメージを、この時天條は負った。

「ち、畜生。お前を侮っていたぞウラシマ。まさか俺に台詞誘導をかけ、こんな精神攻撃を繰り出すとは」
「いや、今のは貴殿の自爆だと思うが……」
「大体、何でお前らがここにいるんだ！？それぞれの役目を終えたら各自離脱つってたろうが。しかも何か月形や花崎までいやがりますし！」
取り乱して言語機能に支障が出ている天條を微笑ましく見つめる月形と花崎。
「いやあ、何か面白そうだと思って花蓮さんに着いてきたら、……まさか、翔人君からあんなクサイ台詞を聞く羽目になるとは。……っくく」
「笑い声が抑えられていないぞ花崎。？？っぷく」
「てめえら……」
二人して笑いを堪え切れていない。いけない冷静さを失ってきた。
そして更にいけないことがあった。
「あ、あの、その、感謝の気持ちは嬉しいのですが、こうもっと婉曲的に伝えて貰えば」
何を勘違いしたのかしおらしい口調になっているのは、赤面中の識原だ。
扱いにとても困る、というか赤面したいのはこっちだ。
「はいはい。なんか妙な空気出てるけど現状確認良い？」
「お、おう。有り難うな、凪柄」
友人の助け舟で赤面&にやけ顔の包囲網から突破出来た。
この時ばかりは本気で感謝した。

06

「??まあ、それで見つけたのは宝石一個だけってわけか」
「ええ、だからこうして聞きに来ましたのよ。残りは何処だ、とね」
凪柄から経緯を聞いて、この状況を理解出来た。
……納得は出来ていないが。
未だにやけの収まらぬ花崎達を視界から外し、赤面は収まった識原に焦点を置く。
「そして、これがその宝石ですわ」
見せられたのは、深緑色の楕円形。
エメラルドとは違う、明らかなその石自体の発光が物質を彩っていた。
それに加え天條が注目した部分がもう一か所。それは、
「なあ、ウラシマ。アンタこれ見た瞬間に血相変えたけど、何でだ？」
当然の疑問。数分の観察が生きた結果だ。
明瞭な表情の変化が、この宝石の登場と共に生じたのは、
「お前の望むものに、この石ころが関係あるのか？」
「石ころなどでは無いでな。……？真実の魔石？じゃよ」
睨んだ通り、ただの宝石では無かった。
今度はその力を知る必要がある。だから問うた。
「これで何をするつもりだった？」

……鋭いなあ。
ウラシマは感嘆した。これだけの情報で必要な物を抜きだすには最適な問い掛け方だ。
それへの称賛の形で、天條に答えを返す。

「その魔石は、どんな偽物をも本物にする効果を持つ。ただ偽物の定義を満たしていれば、じゃがな」
その定義は、と息を吸ってウラシマは続け、
「物体の本物を知る全世界の人々の過半数が、それを偽物と認識すること、だ」
現実的に考えればそんなこと出来ない。
世界中にどれだけの人がそれを知っているのか、なんて調べられる限度を超えている。
使い勝手が悪い。
それが、この魔石の注目度が低かった理由。
綺麗な宝石としか認識されなかった理由。
「だが、その偽物論には例外が存在してな？　製作者が偽物だと認めているのなら、それは間違いなく偽物になる」
理屈として当たり前のことだ。本物を知る者が贋作を作り、それを認定しているのなら、それは偽物以外の何物でもない。
それに例外は無い、例えそれが、己が蓬莱で作成した神仙の道具でも。
「これで我がどうしたいか、少し考えれば解る事じゃな？」

それが、全ての答えだった。
……識原財閥を敵に回しても、欲しいものってのはそういう意味か。
確かに希望の成就が可能となるなら、やってもおかしくはない。
……まあ、願いが願いだしな。
真なる不老不死。得てしまえば己の好奇心が尽きるまで死ぬことはない。
何を敵に回しても欲しいものであろう。
駆け引きに使える、と天條は直感を得る。

「じゃあよ、これ賭けて勝負しねえか？」
「断る」
返事は対して、そっけない一言だった。

何故、と問う間もなかった。
「幾多の魔法陣を仕掛けて守っていたそれを取られたのは驚いたが、別に奪い返せば済むことでな」
「この面子に勝てるとでも？　俺たちはこの場から逃げればそれで終わりだぞ？」
月形が挑発を込めた、歯を見せる獰猛な笑みを浮かべた。
「勿論。仮に、もし、万一、億一、神である我が勝てなくとも、我には貴殿らより遥かな時間を所有している。貴殿らが弱った時、奪えばいいだけだ」
不死の神格位だからこその荒技。
逃げは封じられた。どうにかして戦いを選ばねば。
……渡す、という選択は浮かばねえのな。
自分の思考に苦笑する。渡してしまえば済むのに、ウラシマを許すことが出来ないので却下だ。
感情で色々見失っているが、根本には許容不可の文字が浮かぶ。だったら、それに従うのみだ。
戦いを選ぶ為、言葉を模索していると、
「じゃあ、使ってしまいましょうか」
宝石を手にしている識原が、そう言った。
「なに？」
意外の一字を持ってウラシマは反応する。
「捨てるのも逃げるのも、恐らく壊すのも不可なのであれば、ここで使い尽くしてしまうのが最善かと」
そうか、と天條は頷き、内心では好手に喜び、
「じゃあ、これ」

自らの銀製ナイフを渡す。
説明を視線で求めて来る識原に、戦いのきっかけでなるであろう言葉を放つ。
「ま、初代ピーターパンの持つナイフのレプリカなんだよな、これが。それを本物にしてくれれば価値も上がるだろ」
「いいですわね。ちゃっちゃとやりましょうか」
「??止めろ！」
ウラシマの怒声が響いた。
「……なんだよ、神も人も望むモノの前では一緒じゃねえか」
初めて聞く感情の爆発。天條は笑みを押さえることが出来なかった。
生物としての共通点を見つけられたからだろうか。
その場に一触即発の空気が漂い始める。
「で、どうする？　勝負すっか？」
ウラシマは天條の言葉に今度ばかりは頷いた。
「??ああ、それしかないのだろう。ルールは??」
「おいおい、んなもんいるのか？　……まあ、あえて言うならば、この船が沈みきるまでにお前に逃げられたら俺の負け。俺が逃がさなかったらお前の負けってことで」
ということで、
「勝負、スタートだ」
言葉の締まりと共に、ウラシマが動く。
二丁の銃架付き機関銃を取り出しデスク上にセットしたのだ。
天條たちの動きが止まる。
「えーと、……普通こういう時は、肉弾戦じゃね？」
「我は神仙の中では非力でな。人に毛が生えた程度でしかない。打撃は苦手じゃ。だから小道具を使わせてもらうぞ」
小道具というの名の、重火器。
普通の人間では片手で持つのも難しいそれをウラシマは軽々持ち上げる。

「何処が非力だ！　というか、神が工場生産の市販品を使うな？？？？！」
「大丈夫だ。この神式？びーあーるじー一五？は神的に改良を加えている。心配は無用だ」
「……あれだね。一応長生きしてるだけあって横文字には弱いんだね」
ツッコむのそこか、と天條が口にする前に、
「？？？？？！」
鋼鉄の弾丸がばら撒かれた。

「花崎、頼む！」
引き金が絞られる寸前、声が飛ぶ。
「うん、分かっているよ。翔人君！」
花崎は頷き、眼を瞑り、
「……お休みなさい」
寝た。

天條はこの事実に焦りを抱く。
……いつものことだが怖えな、おい。
花崎は横で既に気持ち良さそうに寝息を立てている。
いつでもどこでも素早く眠れる。花崎の特技だ。
そして花崎の力。
……？深淵たる眠りの防護？（スリーピング・ビューティー）か。
眠っている限り、いかなる力も遮断する。
その効果範囲は半径二メートル。
言葉の通りの事象が起きる。
人を貫いてあまりある運動力は、しかし彼女に触れるまでもなく自発的に床に落ちる。

命中予定の弾は全て同じ運命を辿った。
銃弾連射を無駄だと判断したウラシマは、
「ふむ。相手が悪いでな」
宣言と同時、後方の窓を突き破って外に出た。
多数を相手にする場合、己が最も有利な場所に出て一体ずつ仕留める。
古い兵法だが現代にも通ずるものだ。
だから予測はあったのだが、
……本当にやるとは。
神故に、力押しで来ると、そう思い込んでいた。
これまでの行動から総合して、知恵が回るタイプらしい。
なおさら逃がす訳にはいかなくなった。
「起きろ、花崎」
「んあ？　もうおしまい？」
睡眠時間が短い為、起こしても凶暴化しなかった。有り難い。
話がずれたがウラシマは、そのまま放置しておけば何をしでかすか分かった物ではない。
天條、花崎、凪柄も同じように窓から飛び出る。
「わ、私泳げませんわよ？？！」
聞いたことのある女性の悲鳴を、天條は無視し、宙を行く。

海上。
浸水が始まり、沈み始めた船の隣。
一人の人間が宙にいた。
天條、ではなく、モップに乗った凪柄だ。
彼女は眼下を捜索していた。
夜天の空に浮かぶ彼女にとって眼下は周囲一キロに及ぶ。
それだけの範囲を策敵する。約十二秒。それだけで、
「いたわよ、翔人！　二時の方向、海中！」

「おうよ！」
天條は海面すれすれを激走する。並走するのは、結界を足元に展開しサーフボード代わりにした花崎だ。
前に見えるのは、身体を海に突っ込ませ、背泳ぎしているかのようにこちらを見るウラシマだ。
すかさず、腰のナイフを一本投擲。だが、水の抵抗に呆気なく敗北し、敵に届く前に流された。
……こりゃあ、直接打撃しかねえな。
海という補助があまりに大きすぎ、圧倒的すぎる。
それに快く付き合ってくれるとは思っていない。
なので、引きずり出してやる。こちらの土俵に泣き叫んでも連れて来る。
決定した。まずは、
「その海から剥いでやる……！　凪柄！」
天條は叫ぶ。己の出来ないことを、出来る者に託すために。

「ご期待通り全力で行くわよ」
凪柄の周囲に水の陣が生まれる。
直径十メートルに及ぶ大円だ。
円の中には文字と記号。五秒足らずで円内を埋め尽くす。
使う魔法は自分の十八番。
「吹き飛べ？？！」
巨大な不可視の衝撃波が隕石のように海上に叩きつけられる。

水中から神の眼で見ていたウラシマは驚きを得る。
このままではあの衝撃を海は吸収しきれない。自分に当たると少

々不味いレベルだ。
考える。どうするべきか、と。
すると答えは簡単に出た。
本当に単純明快。
「……迎撃じゃの」

07

海面が打ち上がる。
天條の目に入ったのはそういう現象。
海面が膨張したように盛り上がり、振動し、
「皆、下がれ??!!」
上がった。
圧倒される膨大な水量が、重力に逆らって上昇し、
「??????!」
衝撃波と激突した。
必然的に起こるのは、上がった水の逆流。
海の瀑布が天條たちに襲いかかる。
波に乗ってきた花崎は、これ以上は不可能だと判断したのか、結界で自分を完全に覆い海上を転がる。
泳げない識原と、それを抱えた月形は、船からの大跳躍で浅瀬まで辿り着く。
空を飛ぶ凪柄は海の効果範囲外へと離れる。
空を踏む天條は、
「待っていたぞ、それを!」
海の盾が消え、露わとなった神へ突撃を敢行する。
海上に立ち、水の戻りを待ちかまえているウラシマがこちらの行動に気付いた
残った周囲の水を固体化、矢のように打ちだしてくる。
その大きさはもはや槍。海の槍が十数本。生み出されては発射される。
天條は襲い来る脅威を気にしない。これが好機。
次にいつ来るかは分からない、神を有利な場所から追い出す絶好のチャンス。
水槍が己の身体を掠める。最低限の回避をして突っ込んでいるのだ

から帰結としては妥当。
だが、どれもこれも天條の身体を貫きはしない。
速度に乗った天條は勢いそのままに腰へタックルをかまし、
「ぬおっ！？何を」
「？？あああ……！」
ウラシマを持ち上げ、宙を蹴ってその場を離脱した。
抱える腕には全力を。走る足にも全力を。
この機会を逃してはならないと、二つの本気を持って加速する。
到着すべき目標は、
「陸地だ……！」
自分たちのスタート地点。
銃撃を受けた海岸にウラシマを投げつけた。

時間にして七秒の空中浮遊を味わったウラシマは、現在絶賛飛行中だ。
残念ながら自分には海に無限に居られる力はあっても、飛行能力は無い。
身体を捻り、三回ほど回転して、足から着地する。
「……随分高度からの三回転半捻りだな、おい」
頭上から呆れの声が響いた。
「連れてきた本人が言うセリフではなかろう？」
そうだな、と頷く天條を前に、ウラシマには感じることが在った。
……だんだん慣れてきたのかな？
いくら神仙といえども、いくら古くから生きていても、戦えば疲れるし、その力を上回る者もいる。
目の前の彼は単体ではそれほどでもない。しかし、
……仲間がいるでな。
揃ってしまえば恐らく、自分を越えられる存在になる。長引くと面倒だ。

ただでさえ、自分の楽しみを邪魔されているというのに。
これ以上は我慢ならない。
ウラシマは留まることを知らぬ欲望を、より早く成就させる為、己の最大を使うことに決めた。
それは野球ボール大の黒ボックス。
「蓬莱山にて会得した玉手箱。その効果驚嘆の中で見よ！」
？発？の字が描かれた面が中心で割れ、内側から白煙が噴き出す。
高速。
老化の白煙が、自然現象には有るまじき速さで天條の周りを覆う。
花は枯れ、木は成長し、砂地の生物は死に絶える。
煙に覆われたものは例外なく歳を取る。
老化した者は弱く、脆くなり、圧倒的有利が確定される。
大気も砂も水も人も全て違うことなく老化する。
その筈だった。
……なのに。
「？？なのに、何故だ？　……何故、貴殿は歳をとらんのじゃ？！」
先と変わらぬ姿を取る天條の姿が眼前に在った。
「いいや。ちゃんと取ってるぞ。百年分」
一瞬で過ぎた百年。経つ前と変わらぬ思考で、天條は自覚する。

「？？俺はピーターパンだ。？永遠の少年？の名を持つ一族の一人。
……俺にも不老性はあるんだよ、面倒な事に」
何故、という問いに答えるのは容易だった。
ただ、自分にだけ解っている問題もある。
「でもよ、アンタとは違ってこちとら脆弱な人間だ。その長命に精神が耐え切れる保証がないんだよ」
ああ、そうだ。
「正直俺はアンタがうらやましい。何年生きても狂わず好奇心を持って行動できるのだから」

その通りだ。
羨ましい。嫉妬する。熱望する。
「何故貴殿が我を羨むのじゃ？　人間としては最高の能力であろうに」
「？？昔話をしよう。かつてのことだ。かつて、空を飛ぶ能力を得た子供が他の子供と共に空中遊泳を楽しんでいた頃が在った。
毎日が楽しかったが、子供はある時気付いた。自分が歳を取っていないことに」
幼少より聞かされてきた話。
己が一族の愚かさを思い知る為、忘れない為に童話として残されたもの。
「やがて歳を経て、皆大人になった。ただ、不幸な事に、ある子は家の没落で、ある子は貧困から、ある子は興味本位から。それぞれ理由は違えど、その子供の友人は皆、娼婦になってしまった」
遥か昔のこと。在り得ない時代では無かった。
「彼はな、変わっていく子供たちの、自分の友人の様子に耐え切れなかった」
だから、と続け
「これ以上変わる前に殺した。綺麗な時のまま殺せば良い、という考えを我慢できなかったんだ」
感情の暴走。抑制の完全なる欠落。
異常なまでの、親しいものを壊したくなる、そういう思い。
「これが数百年前に、英国で起きた事件」
現実で起きた惨劇。
「？？そう。ジャック・ザ・リッパー、彼こそが狂いに狂った初代ピーターパンだ」
感情が抑えられずに、狂う。
ただそれだけのことだ。
老化しなくともなることがある。そして歳を隔てれば確実になる。
ならば気負うだけ無駄だ。

受け入れるし受け入れた。
「誤解ねえように言っとくが、この状態だからって身体能力が上がる訳じゃねえ。歳取ってるか暴走してんだから当然だけどよ。だが、妙なもんが付随しちまう」
「それは??」
簡単なもの。
明朗に説明できないが単純なもの。
「??ジャックザリッパーは殺害した者の内臓を切り取ったが、何故あんなに綺麗に切り分けられたのか……」
答えは簡素。
「見えていたからだ。その皮膚の下、人間の体組織がありありとな」
天條は自分がその血族として持つ能力を口に出す。
まるで憎しみを吹きだすように。
「生物を見通す目。それこそが狂いが呼び起こすモノだ。面倒なことだろう？　結構辛いんだぞ、自動的ってのもよ」
自動で作動する狂気の技能。
初めて見た時は気持ちが悪くなり、吐きかけた。
だが、今は違う。
今は運用できる。使える。使いこなせる。
「……さあ、試してみようか。アンタは??神は細切れにされても動けるのかどうか！」

相手は神。容赦も加減もいらない。
己の狂気に拍車がかかるが、もう止めることは出来ない。
身体が動く。いつもより軽い。
動きが気持ちに縛られない。
宙を駆ける。
ウラシマへと辿り着く最短ルートを自然に選択する。
こちらの異常性を察知したのか、ウラシマは回避を選ぼうとする。

筋肉が、骨が、関節が動いている。
右脚に体重が乗る。
力を込めている。
地を蹴って左に行く気だ。
だから天條は左へ行った。一歩で踏み切り身を飛ばす。
動きについてきた自分を見て僅かだがウラシマの顔に驚愕が宿る。
着地ざまにその身体の流れを利用して、天條は左手のナイフを振る。
狙いは首。上段から斜めに切りこむ。
ウラシマの首と肩の肉が動く。己を右に傾けるつもりだ。
だから動作を調整した。軌道を無理やり下に変更。
「？？？？なっ！？」
ナイフは皮膚だけを切り裂いて抜ける。全力の攻撃ならば神の防護を抜けるらしい。
血管まで届く寸前で回避された。
刃が抜けると、ウラシマの皮膚は治り始めていた。
……不死たる所以、神仙の再生能力か。
考えながら、自分の身体が右に流れるのを感じるが、
「……まだまだ！」
返す動きで右手のナイフを、振り抜いた。
斬撃。
狙うは胸部。ウラシマの服を切り裂き、刃は肋骨まで届いたが、
「……お……ああ！」
ウラシマが胸でナイフを押し返した。強引な、だが強力な力で天條はたたらを踏み、その隙にナイフを抜かれた。
赤の飛沫が舞う。
舞った分だけ距離を取られた。
胸から血を垂らしつつも、その眼光衰えないウラシマが追撃にかかる。
それをけん制する為に右のナイフを投じるが、
「？？？？甘い！」

右拳で弾かれ、ウラシマは勢いそのままに特攻。
投擲の反動で、ほんの少し動きに空白が生まれる。
代わりというように、ウラシマの動きがこちらに来る。
右拳の二連打。
……打撃は苦手じゃなかったのかよ。
思いはしても、今さらだ。かわすことは出来ない。だから、
「……！？」
宙を蹴って自ら前のめりに倒れ、相対距離を詰めた。
その分、打撃は速く届き、
「？？？？！」
痛覚に大量の刺激を貫った。妙な音もした。
骨が擦れて割れるような感覚もした。護符がなければここまでのダメージを食らうのか、と再認識。
それでも、傷を得るだけでは終わらない。
左のナイフを踏み込みに使った右大腿部に突き刺す。
空中を歩き、立体的な行動を可能とする天條だからこその技。
業物の刃は抵抗する肉を押さえて、腱と血管を断った。
しかし、ウラシマの動きはやはり止まらなかった。
「それくらいで、我が止まるとでも！？」
「思ってるわけがないだろう！」
左の肘を腹に叩き込まれた。即座に空中をクッションにし軽減。
威力は減衰するも勢いは残る。体が跳ね、口から血がこぼれる。
それでも天條は至近距離から離れない。バウンドを生かし下から上へと腕を振る。
右の斬撃で相手の左腕を上腕から斬り飛ばす。
「……ぐ、ああ！」
ウラシマは痛みに顔を顰め、だが迎撃を選んだ。
残る右の手で天條の頭を鷲掴み、力任せに投げた。下方向に。
頭から砂地に激突する。
堅いもの同士が擦れ合い、入り込む雑音。

それを聞いて尚、天條は起き上がり宙に立ち、斬撃を続ける。
最早引き戻しに時間のかかる刺突を天條は選ばなかった。
お互いに引かず超至近で斬り、殴る。
天條が右足を斬り飛ばせば、ウラシマが何処かを叩き折り、何処かを打たれれば何処かを斬った。
果てしなく濃く、限りなく短い時間。それは繰り返され、続いた。
そして終わりを見せる。
天條は幾つもの痣を作り、幾つもの骨を砕かれて、だが屹立していた。
対して、四肢の半分を斬り飛ばされ、幾つもの貫通創を作りながらも、ウラシマは立っていた。
足元は定まらず、視線を血で染めた彼は、
「ははっ、これは良い。神だ何だと言ってはいても、我はここまでなるのじゃな」
「ああ、だからそろそろ終わりにしようぜ。互いに面倒になってきただろ？」
二人は笑う。
血に塗れた互いを破顔で迎える。
二人は同じように身体を縮め、
「……お！」
「？？？？らあっ！」
加速。一人は宙を一人は地面を蹴った。
息を合わせたように同時。
足を失っていても、骨が砕けていても、二人の速度は高速と表現して差し支えない。
先に腕を振るったのはウラシマ。
片腕片足を失い、軽くなった体を旋回させる。
鞭の様に裏拳の一撃を放つ。
突撃し、超至近にいる天條には回避不能のタイミング。
「神に、この我に、人間ごときが勝てるものか！」

ウラシマが叫ぶ。感情を露わに、ただ勝利を欲して。
それに臆することなく、天條は見る。ウラシマとその攻撃を。
……避けられないのなら、避けなければいい。
ナイフを構え、振られる拳に刃を立てる。
砕かれたら自分の負け。
切り裂いたのなら己の勝ち。
最後の最後でシンプルだ。
良いな。
素晴らしい。
己の全てを出しつくした。悔いはない。
だが、その表現は勝ってから使うべきものだ。敗北に台詞は似合わない。
「??俺は勝つ。俺が勝つ！　アンタは、負ける。人に、負けるんだ！！」
音が一つ鳴った。
空気を裂く、鋭利な音が。
倒れる姿は一つ。
決着がついた。
「俺の、勝ちだ」

08

血の海で倒れ、意識さえも失ったウラシマを天條は見る。
「例え不死でも血を失えば、そりゃ動けなくなるだろうよ」
動きも鈍くなる。完全な状態でやり合えば動きについていくことなど出来なかった。
「……ついていけても結果がこれじゃあな。……ってて」
しばらくは絶対安静で間違いないだろう。
だが、今は痛みを嘆く時ではない。倒れたウラシマの懐から玉手箱を抜き取る。
もうウラシマが使うことはない。
「完全に再生するまで寝てろ。起きたら組織を統制しろよ。それが不老じゃないアンタの生きる意味になる」
言って、吐息し、膝を着く天條。
そんな彼を後ろから見る影が在った。
「天條？？？？！」
月形だ。識原たちも一緒だ。
あの海水瀑布を食らったせいか、所々濡れているが元気そうで何よりだ。
……本当に、何よりだ。
走り近づいてくる彼らに天條は手を振って応える。

「勝ったんだね、翔人君」
「ああ、花崎達は意外と無事だったみたいだな」
「まあ、そりゃ翔人君に比べればね」
あちこちを負傷し、色を変えた天條を見て苦笑する花崎。
「それで天條、こいつはどうすんだ？　まだ生きてるっぽいが」
「ああ、それは放っておいて大丈夫だ。チョットした約束しててな、

もう害はねえよ」
これも取ったしとその手に持つのは、
「玉手箱……？」
漆塗りの黒の立方体だ。
彼は手指で回転させつつ、
「こんなもんが伝説級って事が信じられねえよな」
感慨深そうに見つめる。
ともあれ、もう任務は終わったのだ。
帰ろう、と口にした時、
「いや、まだだな」
否定の言葉が響いた。

言葉の主は天條。
月形は訝しんでいるのが表情で解る。
「ほらよ」
天條が放り投げるのは、玉手箱。
識原が両の手でそれを受け止める。自分の行為に不自然を感じたのか月形が心配の声を上げる。
「天條……？　大丈夫か？」
「ああ、時間までに、何とか間にあったみてえだな」
その台詞で理解したのだろう。
仲間の間に緊張が走る。解っているのだ。
これから起きることと、何をすべきかを。
「さて、これからが面倒なんだが……、？？皆大丈夫か？」
「？？っく。……ああ、勿論だ。任せておけ」
人狼が口の端を吊り上げる笑みを見せる。

その動きは無理やりで苦笑にも見えたが、
「じゃあ、……俺を頼む」
構うことなく、己の願いを口にした。

……ああ、解ってるさ。
月形は後ろにいる少女達に目配せをし、陣を組んだ。
自分を先頭に置き、背後に少女三人を控えさせる。
対する天條は腰の両横にナイフをセット。
そして新たな一振りを己が右手に構えた。
その顔には笑みと、それを堪えるように不自然な力が顔に入れられているのが見えた。
彼の眼は何かに逆らうようでもあり、こちらを狙う獣のようでもある。
……乗ってやらなければな。
自分達が天條に任せたのだ。ならば、その責任は己らに在り、果たさなければならないものだ。
ならば、
「行くぞ、天條翔人っ！！」
「おお！　来やがれ、馬鹿共！！」
月形は己の速度を持って天條に突撃した。
豪速。
人狼とピーターパンが激突する。
「？？？？おらあ！」
月形は拳を握った右腕を振りかぶり、オーバースイングで天條にぶち込む。
人狼の力を躊躇いなく揮う。甘さを消せ、と人狼としての、野生の本能が叫ぶ。
撃音がした。
硬質が合い打つ音。

天條のナイフと拳が衝突したのだ。
質量差から当然天條は吹き飛ぶが、
「……駄目か！」
何事もなかったように着地した。恐らく？自由の空？で衝撃を緩和したのだろう。
どうする、と疑問が浮かぶが、それを無理やり払って、同じように天條に向かってチャージを加える。だが、先とは一つ違うモノがある。
「体勢だ……！」
人狼の全力だ。いくら受け流せても人間には限度がある。姿勢を崩すのも当然。
ならば、今が好機だ。
相手の行動に怖気づいていてはそれを逃す。
だから、今こそ、
「……おお！」
月形は最速の攻撃を放った。
加速させた身体を天條の寸前で急停止。
起こす現象は左の腕を振るだけの単純な動き。
ただそれだけ。
それだけで、
「……っぐ！？」
天條の右腕をへし折った。
打撃音と共に、嫌な音が頭に走る。
が、そんなことに思考を裂いている暇はない。
目の前にいるのは切り裂き魔。
こちらの渾身を受けても、弾き飛ばされずに立っていた。
空中に。
……空気を緩衝材にしたのか！？
「？？？？斬……る……！」
天條の射程に入ってしまった。

その上、力を発揮した後の技後硬直。
月形が高速で迫る天條のナイフをかわせる筈が無かった。
「??ぬうっ！」
左腕にナイフが差し込まれた。
避ける暇などない。
自分の体の硬度を無視するように銀の色が侵入してくる。
硬質の毛を貫き、肉の間を滑り、血管を裂いていくが、
「????行けっ！！」
言葉と同時、月形の背後から花崎、凪柄、識原が飛び出した。
更に、負傷した腕で、それを貫いたナイフごと、天條の腕をホールドした。関節を絞め、腕の動作を不可能にする。
「……っお！」
人狼の膂力を持って、天條の行動を阻害した。
「??????!?」
腕を支点に全体を絞るように抑え込む。
天條の顔が驚きに染まる。
腕を貫いても怯まなかったからなのか、その腕を惜しげもなく使っているからなのかは知らない。
だが、そうなのだとすれば本能というのも甘い。
人狼にとってこの程度の負傷は、軽傷と判断できるレベルだ。
狙うならば首や、臓器。それでも致命傷には至らないが、攻撃するならそこだろう。
しかし、それをしなかった。
……もしかしたら??。
狙うだけの隙はあった。
にもかかわらず、腕の、しかも太い血管があまりない場所を刺突したということは、
……まだ意志が残っているのか！？

……俺にも容赦ねえぞ、こいつら。
天條はクラスメイトの攻撃を受けながらそう思う。
だがそれでいい、とも。
狂気に囚われた以上、力尽くで取り押さえるのが定石だ。
何せ、体の自由はほとんど利かないのだから。感情でなるのとは訳が違う。
ウラシマを押さえ、玉手箱を放り投げるのが精々だった。
意識はあっても意志が無い。
脳はもはや本能にのみ従い、それに追随して体も反応を起こす。
こちらがいくら級友を斬りたくない、と思っても、それを聞き入れることはない。
すべては？親しいものを斬る？という一点に絞られる。
そこまでは、納得してはいないものの理解はしている。だからそれは良い。だが、
「あー、もう痛えな！」
五感とほんの少しの会話機能だけが残るのは理不尽なのではないか。
先程から痛覚が刺激を止めていないのは、右腕が折れたからではなく、
……あだだだ！　もう少し考えて動けよ、本能！
無理な動きを本能が続けているせいだ。骨が折れていようが、筋肉が切れていようがお構いなしに動く。
その上、満足な回避も取っていない。
負傷率は上がるし、痛みを食らうのも必然。
……さっさと終わらせてくれよ、皆。
それだけを天條は呟き、願う。
どんな結末になって欲しいか、それを希望するということは決して無い。

凪柄は天條に肉薄し、
「恨まないでよ、翔人」
「??当たり前だ！　これを何度繰り返したと思っている！?」
そのまま天條を重化した。
僅かな呻きを上げて、天條は増加した重量を受けた。
……御免なさい……！
心中でこの選択をしてしまったことに謝罪を入れ、しかし、やるべきことは為そうと全身に力を漲らせる。
重化設定は十倍。己が出来る、準備なしでの限界だ。
「限界時間は三十秒。急いで！」
天條と彼の足元の砂に圧力が一気にかかり、彼自身を沈めていく。
ただ、それだけでは終わらない。
天條は十倍となった自重に耐えきれずに膝をつき、そのまま地面に潰された。
「がっ……はっ……！」
うつ伏せに倒れ、砂に埋もれていく天條の呼気が荒く吐きだされる。
だが、それに構うことなく、
「次は僕だ。行くよ！　翔人君！」

結界を全開にした花崎が天條の身体に乗っかり、力を発揮した。
?茨の揺り籠?。
不眠においてでは最高の結界。
自身を中心に球状の空間が出来上がる。
「ぬ……う、……うあ」
その力場で天條の身体を砂に沈めたまま固定した。
自重と概念上の圧力で体を押さえ、行動不能にする。
完全に、静止させた。
ならば、次にやるべきことは決まっている。

だが、その役目は自分では無い。
既にそれを解って動く者がいる。
「天條さん。行きますわよ！！」

この場に飛び込んできた識原だ。
彼女は手に掲げた玉手箱を、思い切り地面に叩きつけ、
「飛びなさい！！」
叫びと共に、全員が天條から飛び離れる。
念のための調査はやっておくものだ。
そのおかげで玉手箱の機能が確かめられ、
……級友を救えるのですから！
砂地に半場まで埋まる玉手箱。砂地から飛び出ている片方の蓋は
既に開いており、黒煙が噴出していた。
玉手箱の機能の一つ、？吸齢の黒煙？だ。
やがて黒が天條の周囲を覆う。
これで百年老化を無効にした筈だ。
起きた現象はそれだけではない。
煙が及ぶ範囲全ての生物が、若返ったのだ。
草花は縮み種となり、成木が縮小し苗木ほどの大きさになるのを、
凪柄たちは離れた所で見届けた。
「さすが、伝説級。……起きる事象がケタ違いですわね」
識原は驚嘆を得つつ、しかし大事なことから目を離さなかった。
天條翔人。
花崎の結界で押さえておらず、凪柄の重化も消えた今、彼は完全
に自由だ。
地面に倒れ伏していた彼が、黒煙の中立ち上がる。

砂地は起立しにくい、と天條は体力を失った身で気付く。

狂っているのに正常な意識がある。
面白い現象だが面倒だ。
その正常な意識で、ここまで至る一部始終を見て来た。
この結末は、己の望んでいたものかも、薄れゆく意識の中では判断できないが、言っておくべきことがある。
「……まあ、何だ？　……有り難うよ。止めてくれて……な……」
黒煙が視界を狭めていく。
だが、完全に目の前を塞がれるより前に、天條の思考は無くなった。

海岸においては波と風の音が支配する静寂。
その中に身を置いた花崎は息を吐いて、その場に座り込む。
黒煙が晴れると、再度倒れ伏した天條が見えた。
「ほんとにもう、何度やっても翔人君の相手は疲れるよ。ただ、今回は格別だったけど」
「ええ、全くですわ。元が味方だとどうしても敵として見辛くなりますし」
ふん、と誰かが鼻で笑う。
「こちらに刃を向ければ敵さ。……納めれば味方になるかもしれないが」
全員がその言葉に苦笑する。
この先、また天條が暴走するかもしれない。
だが、その時は自分たちが殴り倒してこちらに引き戻してやればいいだけだ。
その後で三回半捻り土下座で謝罪させれば気も済む。
穏便で最良の解決法だ。
彼を一人で行かせる、なんてことはしない。
「……」

波の音が響き、沈黙が支配する。
「さて、帰りましょうか。私達が戻るべき場所へ」

09

暗闇に包まれた場所がある。
四方を壁に包まれ、窓は南と東に一つずつ。
八畳ほどの空間は鍵付きクローゼットが半壊しているほかは、綺麗に整頓されていた。
その部屋を持つ家。玄関には天條の文字があった。
部屋にある木製ベッド。その上に転がっているモノが一つ。
天條だ。
目を開けて、静かに天井を見上げていた。
「……今回も助かった。感謝する」
今はここにいない、恐らく自分を運んでくれたであろう面々に向かって、聞こえる筈のない礼を言う。
老化によって狂ったのは初めてで、やはり感情によってなるのとでは勝手が違う。
……だが、これで確定した。
将来、自分は狂う。確実に狂う。
もしかしたら、という淡い期待は消えた。
年齢を幾つ重ねればそうなるのかは定かではない。
だが、百年後は絶対に狂うということだけは分かったのだから。
嫌な気分だが、同時に、
……解り易くて良いな。
残り百年、その間に解決策を見つければ良いだけ。猶予はある。
やることが決まると途端に眠気が強くなった。いつもより消耗したからだろうか。
明日は平日だ。学生の本分を休むわけにはいかない。
だから天條は眠ることに決めた。
……睡眠は頭の整理を付ける為でもあるんだ。

下敷きとなっている掛け布団を捲り、中へ潜り込む。
頭を枕に乗せ、いつもの癖で横向きになる。
仰向けで眠る奴は凄い。何故あんな襲われそうな格好で眠れるのか。
かつての中等部修学旅行、仰向けで眠りについた数人の男子は皆額に？天使降臨？と油性太字で書かれ、全裸になっていたのだから。
そして下半身にはモザイク画が貼ってあった。
実行犯の中に知り合いの女子を見つけた時はヘコんだが、ともあれ仰向けで寝てはいけない。天條は過去を懐かしみながら、安置の姿勢を取り目を瞑る。
その際、最後にとある代物が目に飛び込んできた。
「……ナイフ取る為に一々クローゼットぶっ壊すなよな」
大きなため息と共に、天條は就寝した。

朝の寒気がまだ残り、だが日によって緩和された頃。
学園内の教室の一つ、二年γ組内には登校した者が多くいた。
雑談を楽しむ者もいれば、ぐったりして机に突っ伏して寝ている者もおり、さらには殴り合いを繰り広げている者もいる。
それぞれが授業が始まるまでのわずかな暇を楽しんでいた。そこにやって来たのは、
「さあ、今日も行きますわよ皆――」
ドアをぶち破って登場してくる識原を皆は視界の外に追いやった。
例のように吹き飛ばしたドアを元に戻した識原は、
「さあさあさあ、今日も張り切って頑張りましょう！」
数日の出来事が原因で疲労が溜まり、凪柄の席で睡眠を取っていた天條が頭を描きつつ問うた。
「……朝っぱらから超ハイテンションだな。めんどいからクラス内の意思を総括して言うが、今度は何だ？」
良くぞ聞いてくれました、と識原は懐からいきなり紙を取り出し

た。それは、
「日本地図か……？」
彼女はええ、と頷いた後地図を黒板に貼りつける。
そして、指示棒で一点を指す。
「あの組織が非合法な手段で売り出した宝石類が、本日ここに置かれることが分かりました。
よって妖精守護騎士団はこの宝石を私に取り戻、げふんげふん。
――色々な人の為に奪還して貰います」
「……本音の後に建前を喋るなよ」
天條だけではなくクラスのほとんどが吐息する。
「さあ、今回暴れたい人はいませんの？　今回は花崎さんを無理やりにでも連れて行くのでいくら暴れても大丈夫ですわよ」
識原が挙手を求めても誰も手を上げない。
……どうせ誰かが連れ出されるがな。
それだけは変わることは無い事実だ、と天條は思う。
「では私の特技の説得術で――」
未だ識原が何かを言い続けているが、天條は眠ることにした。
どうせ説得の名を借りた強制なのだから抗議しても無駄だ。それ以前に抗議する元気も無い。
ぎゃあ、と悲鳴が耳に入ってくる。誰かが識原流説得術を食らったらしい。
……騒がしいことだが、楽しくもある。
初等部の頃からずっとこの調子だ。歳を重ねても変わることは無い。
そんなことを頭に浮かべつつ、天條は完全に眠ることに決めた。
恐らく自分も呼ばれるのだろう。
今まで識原が参加する時は必ず自分も付き合わされたのだから。
ならば出動までの少しの間だけでも安らかに眠ろうと思う。
……まあ、疲れることだが、退屈はしない、か。賑やかだしな。
「天條さん？　天條さんは何処です？」

自分の席を見て疑問を上げる識原。
おいおい、さっき話してたのに見えてないのか、と思う間にまた睡魔が来た。しかし、名残惜しいが睡眠という未練を振り払わなければならないようだ。
こちらを識原が見つけてしまった。
仕方ない。
いつも通りだ。
「……ああ、急かすなよ。??今そっちに行くさ」

09（後書き）

これで一幕、といった所です。シリーズタイトルをつけるならば宝石争奪篇といった所でしょうか。有りがちですねすみません。

次回はいつになるか未定で、毎日更新は不可能となりますが、拙作を気に入りお付き合いしていただける人がいらっしゃるならば幸いです。

画家の心

月は浮かばず、星が瞬きの時を得る夜。
都会の喧騒とは程遠い、虫と風を響かせる土地がある。
東京青梅市のとある山。その中腹。
そこには一つの平屋が存在した。
外観はみすぼらしく、古民家というよりは古い山小屋の様で、しかし目新しい檜の表札が貼りつけられているのが確認出来る。
檜板が接着されているのは、古い木の家に似つかわしくない重厚な金属の扉。
山から吹き下ろす風に小屋は時折その身を揺らしつつも、倒れることなく建っている。
その金属扉内部から、重い音がした。
岩石が固い地面に激突した時のような短く低い打撃音。
音の発生個所は、屋内の一部屋だ。
家屋内部に目立った装飾は無く、一通りの水周りの他は、広い一部屋があるのみである。
その部屋の中央に、エプロン姿の男性がいた。
彼は足下に転がる一斗缶を踏み潰しながら、ただ前を見ていた。
目線を固定し、片時も離さぬというような強い意志を感じさせる瞳で。
男の前には赤の飛沫があった。
部屋のおよそ半分がほぼ一色で染められていた。
赤で。
深紅が。
真紅で。
赤色が。
飛沫で。

朱の飛沫で。
紅で。
に。
丹で。
アカで。
緋で。
あかで。
アカデ。
赤
あか
緋色
濃朱
朱飛沫
アカ
濃度の差はあれど、その一色がこの場を彩っていた。
室内に充満するのは鉄と、血の香り。
鼻腔に粘りつく匂いを放出するのは、男の前にある肉の山。そこから流れ落ちる液体。
それを眺める男性は、
「ああ、爽快だ。……しかし、足りない。完璧では無い。
??あと一つ。後もう少しだけ、あと一人だけ必要だ」
肉の塊の前で、蕩ける様な微笑を浮かべていた。
あか

画家の心（後書き）

新章ということでまあ、よろしくお願いします。

横入り好きな乱入者

太陽により地上に届いた光は、人の視界を明るくする。
光によって人は、遠方を見ることが出来、また夜見えなかったモノを見ることが可能になる。
東京都は八王子市。
ＪＲ八王子駅と京王八王子駅の間。二つの駅から等間隔の場所に大通りはあり、そこから幾本も分かれた細い路地がある。
その中の一つ、京王プラザホテル近隣のビルとデパートに挟まれた、暗く細長い通路に二つの姿があった。
「おいおい、面倒だな、こりゃあよ」
声の持ち主は二つの片割れ、無精ひげを生やし、スーツを纏った巨躯の初老男性。
彼の視線の先には、千切れた人の腕が貼りつけられる壁があった。あべこべに曲がりくねった人腕は肩から指先のほとんどが、自然状態では在り得ない体をなしていた。
それが貼り付けられている。否。めり込んで縫い付けられている。コンクリートの壁に半分埋まり、切断部には小型の金属杭が打ち込まれているのだ。
その周囲にはバケツの水をぶちまけたように、多量の血液が付着している。
「サンシャイン６０、都庁ビル、明大和泉近辺に続いて四件目。……殺人においては実質的に二十件目。腕に在る文字は、？不要？。怖いくらいに前例と同じですね。
……となると、被害者はまた女性ということに……」
その腕を傍らで観察し、男に報告するのは小柄な、しかし背筋を伸ばし、しゃんと地に立つ目つきの鋭い若い女性。

傍目から見れば父娘、もしくは祖父と孫娘に見える。
が、そう判断するには異常な状況だった。

初老は禁煙用パイプをふかし、薄くなった白髪頭を掻きながら眼前の状況を口にした。
「現代日本でこれはねえだろうよ。面倒臭えな、連続殺人ってのはよ。俺の見えねえとこでやってくれよ」
「人死にが出ているのに、それは無いでしょう、水登（みと）刑事」
水登と呼ばれた初老は、眠たげな瞼を擦り、
「そうは言うが、笠邨（かさむら）ちゃんよ。こんな面倒な事態に上は関わろうとしねえし、そもそも俺は警察ってのが嫌いなんだよ」
こちらが視線を向けた笠邨は呆れたように吐息し、
「じゃあ、何で警察官になったんですか……」
「ああ？　そりゃ、あれに決まってるだろうよ。権力持って俺カッコイイ！、ってやりたかったからよ」
「本当に貴方ときたら……」
嘆息する女性に水登は苦笑する。
……こいつは真面目すぎるな。ったく、面倒だよ。
件の笠邨は真面目に指紋を取ろうとしたり、真面目に状況把握に努めている。
まだ二十歳過ぎなのだから仕方ないとも言えるが、
……無駄だってのによ。
既に十件以上もこんなことは起きている。
その度に鑑識は何も成果を得られず、検察もお手上げ。
犯人の姿どころか、ヒントすらない。あるのはただ人が死んでいるらしいという憶測だけ。死体が見つからないのだから推測しか出来ない。
現場に残る血液量から明らかに致死とは分かるが、確証はない。
何もかもが不確かで不明瞭。現状では正攻法など無駄の一言でし

かない。
まさかこの歳になって子守りをする羽目になるとは思わなかった。
……体の良い左遷ですかよ？
上の意向など知ったこっちゃないとばかりに、今の捜査に口出ししたからかもしれない。
それこそ知った事では無い。目の前で、職務に勤しむ若者に己の考えを教える気もないし、それこそ面倒だ。だから、
「おーい、笠邨ちゃん。俺はもう行くぞ？　用があるからよ」
「水登刑事。まだ状況整理が出来ていません。貴方の職務時間も残っています」
「かー、本当に硬いな、お前はよ。いいだろ、自由にやってもよ」
真面目一辺倒は融通が効かなくていかん、と水登は思う。
「駄目です。権力を持つ私達警察は市民の安全を守る為に、己の自由を犠牲にしてでも犯罪者を捕まえねばなりません。それが正義です」
強い瞳で問うてきた。
自分の言っていることが全て正しい、とそう信じている目だ。今時そんな目を持つ物は珍しいが、
「くっ、権力かよ」
思わず笑いを溢してしまった。
それが癪に障ったのか、笠邨は眉を顰め、僅かに顔を紅潮させ、
「私は何かおかしいことを言いましたか？　守る為に力を揮うことはおかしいですか？」
論点がずれているな、と水登は考える。
ただ、この己の正しさに酔う瞳は、こちらを逃がそうとしない。
論争も無駄な答えを聞こうとしている。無駄と分かっていても答えねばならないのは面倒だが、
「……権力なんて降らない力で、守れる奴なんて限られてるだろうよ。だったら、守れない奴を守ろうとするより、自分自身の為に動くってのが楽ってものよ」

自分の言葉で若者の紅潮が明らかになっている。
……他人の答えを聞いて怒りを得るならば、最初から聴かなければ良いのにな。
恐らく、目の前の少女は頑固物で、人の理論を受け入れられないタイプだ。
……さすがお嬢様ってやつかよ。正義、正義と一つ覚えに連呼してよ。
履歴を見る限り、幼少より英才教育を受け、全て第一希望の名門校に通っているらしく、難なくキャリア試験を突破してきた、らしい。上役の情報など信用する価値も無いが、そういうことになっている。
組んで暫く経つが、学力的に頭が良いとは分かった。
加えて、プライドの高さも理解した。
……何せ発対面での台詞が『夢は女性警視総監になり、市民にとって理想的な、正義を誇れる警察を作ります！』だからな。
人の夢を笑うことは出来ないが、今の調子では不可能だ、と断言出来る。
関係のない事を考えている内に、嘲笑の表情が顕現してしまった。
気付いた時にはもう遅く、
「刑事っ！　貴方は国家権力を、正義の力を何だと思っているんですか！？」
紅潮を最大限にした笠邨の叫びが来た。
これは不味い。感情に流されている意見のやり取りなど不毛であるし、何よりこれ以上長引くと面倒だ。なにしろ自分にも私用があるのだから。
軽く流す方針に決めた水登は、笠邨から視線を外しつつ、
「それも決まっているだろうがよ。弱い奴に振るう為の力さ。降らない、な」
「刑事っ！」
既に怒り顔に変わっている笠邨を無視し、周囲を見回すと、

「……お？」
一人の男がこちらに向かってきた。

白衣に近い灰色の、腰元に幾つもの縦横線を入れた長衣を纏い、服と同系色の髪を持つ痩躯の青年が現場内に侵入するのを、笠松はその眼の端で捉えていた。
「そこの貴方。ここは立ち入り禁止ですよ！」
水登に向けていたままの剣幕で、青年に語るが構わない。
通路の入り口には立ち入り禁止のテープがあり、ここにいるということは、それを乗り越えてきたということでもある。
見張りをつけてはいないが、確かに乗り越えてはいけないと解るように張った。
例え一般市民といえどもルールを破る者に、気を使う必要はない。正義と道理はこちらに在る。
だが、こちらの、怒りを含めた一声を受けた青年は構わず近づいてきて、
「ふふっ、随分面白い事を言うな、この、お嬢ちゃんは」
柔らかい、しかし馬鹿にするような口調で微笑んだのだ。
カチンと来た。
どう見ても同年代、もしくはそれ以下にしか見えない男にお嬢ちゃんと言われたこともそうだが、こちらの忠告を逆なでするような、その態度にだ。
断じて背の低い事を馬鹿にされたから怒っている訳ではない。
中学生に間違われることもあるが、そこは大人だ。
自分は感情を高ぶらせたりはしない。
ただ今回は、頭の中に熱く、煮える様な物が浮かんだ。
糸威は意思に任せて青年に詰め寄る。
このまま大声を出してしまおうか、とも思うが、流石にそれは自制し、それでも何らかの反論をしようと口を開く。だが、その前に、

「??わりいな、糸威(いとかい)。手間あ、かけちまってよ」
背後からの明るく太い水登の声と共に、彼の手が頭に置かれる。
まるで自分を抑えるように。
「ふふっ、今、私は君をどうしてくれようかと思っている。君は何をしたい?」
「まあ、そういうなって。あとで高い焼き肉連れてってやるから。勿論経費で落とすがよ」
「ふふふ、それならば宜しい。私は宜しいと思うね」
自分の頭越しに会話するのは止めて欲しい。
追加で馬鹿にされているようで非常に不愉快である。心中にそれを抱く最中、水登がこちらを見つめ、
「??笠邨ちゃんよ? 別に感情的になるのは構わねえが、誰かれ構わず当たり散らすのは止めろよ? 関係のある奴だけに向けられるべきものなんだからよ」
熱くなっていた頭が、一瞬で冷えた。
そして気付く。
客観的に見れば自分のやっていることはただのやつ当たりだ、と。
青年の言い方が気に入らないのは確かであるが、それは怒りを見せる程の物ではないのだから。
「で、でも、それがここにいていい理由には……」
「このお嬢ちゃんには話してないのかい? 水登」
「ああ、いっけね……、でもまあ今説明すりゃあいいかよ。
??こいつはおれが協力求めた奴でな、まあ、そういうことよ」
頷くことしか、今の笠邨には出来なかった。
頭のクールダウンを終えた今、自分の醜態を考えると顔から火が出そうであった。
だが、羞恥に浸る前にすべきことがある。迷惑をかけたのなら、素直に謝るべきだ。
「あ、あの、御免なさい」
「ふふ、構わないと私は思っているよお嬢ちゃん。全ては目の前に

いるデカイ爺さんが挑発したせいだとね」
青年は初対面から変わらない、柔らかい笑みで手を振る。
彼の表情と対応に、ほ、と息を一つ吐くが、そこでふと気付く。
……桃の香り……？
やや酸味がかった甘さが青年から漂ってくる。香水だろうか？
鼻をひくつかせて、その匂いを追っていると、
「ほら水登、彼女、こんなに鼻を動かして。とても怒っているみたいだよ？」
「おいおい糸威、そりゃあ濡れ衣よ？　お前と居ると大抵の奴はイライラするんだよ。つーかじいさんって何だよ。同い年だろうよテメエ」
「ふ、これはまた、今の私にそういうことを言うとはいい度胸だと思うね。そして世の中には外見という概念が存在する事を理解するべきだね」
二人とも笑顔で会話しているが、水登はこめかみを青筋付きで動かしている。
苛々するのは先輩も一緒だと、妙な安心感を得る。
此方の行動意義を訂正しようか、とも思うが、それよりも此方の興味を動かしたのは、
「お二人は知り合いなのですか？　というか同年代って……？」
糸威という男は笑う声もそうだが、声そのものが細い。
だが、芯の通った声で、中性的な顔立ちにもかかわらず、確実に男性だと分かる。
それも青年という意味で、だ。対して水登は、しゃがれ声で白髪。
明らかに差があるのだが、
「……笠邨ちゃんよ。お前、俺の事何歳だと思っているんだよ？」
半目で見られた。
どうしようか。
本音を出そうか。ただそれでは糸威に似合わず非現実的だ。
それでも、自分の偽るのは良くないし、そもそも得意ではない。

嘘をついて、後に発覚し気不味くなっては今後のコンビ作業に支障が出る。
ならばここは、
「ええと、四十五……くらい……かと」
嘘でいった。
正直者に御成りなさいと育ててくれたお父さん、お母さん御免なさい。私は計画的に嘘を吐いてしまいました。
だが、十近く鯖読んだのだ。気を良くしてくれるだろう、と水登を見ると、
「……」
唖然としていた。対して糸威は、
「ふ、ふふふっ、だってさ、水登」
笑みを堪えようと必死になっていた。思い切り表に出ているが。
やってしまった、と笠邨は直感した。
「お、俺はまだ三十だってのに……」
「良かったじゃないか、十五オーバーで済んで良かったと私は思うね」
「あ、あの、その」
狼狽えるこちらに、大丈夫、と親指立て付きで語りかけて来る。
その顔にはいかにも楽しそうに、口元を吊り上げていた。
「さあ、水登。精神的負傷は何処かに放置して、さっさと自分の用を果たすべきだ、と私は思うね」
「……く、く、悔しいが、??仕方ねえな。じゃあ、ちゃっちゃとやっちまうかよ……」
「ちょ、お二人とも、何処へ??」
こちらが言いきるよりも早く、男二人は現場から離れていった。
このまま行けば、通りから出てしまう。
笠邨は、彼らに対し迷いを得るが、このまま現場に残ってはコンビ失格で、更には上司に従わぬことになる。
それは組織に身を置く者として駄目だろう。

だがついて行って良いものだろうか。
水登の知り合いの、糸威という男を笠邨は知らない。
男が何をしていて、これから何をするのかも同じく分からない。
分からないことばかりであるが、唯一分かっていることは、
……ここで呆けていても仕方ない……。
ならば、
「??ああ、もう！　待って下さい水登刑事」

決断の相違点

板張りの床が敷かれた部屋がある。
三十畳の長方形型の一室。糸威のアトリエ兼リビングだ。
奥の戸口先には台所や風呂など水回り系、左右戸口にはベッドルームに物置と、一応の生活環境が整っている。
ログハウスの玄関を開けてすぐのアトリエで、笠邨は四隅に配置されたL字ソファの一角に腰掛けていた。
今回の協力者で、水登の友人でもあり、画家である糸威のアトリエは、家というべき建造物であった、と笠邨は得た情報を心で呟くことにより、インプットしていく。
彼はアトリエのみで寝泊まりしているらしく、左右の部屋は主に荷物起きとして使用され、実質的な空き部屋になっているらしい。
……確かにこんな所で生活していれば、自然と匂いも付着していきますよね。
日常的な疑問が一つ解けた所で何がどうなる訳でもないが、糸威の信頼性がワンランクアップしたと思えばいい事だ。
具体的に言うと不審人物から見たことある人、程度のレベルアップではあるが。
この表現には理由がある。これらの情報はどれもこれも自分から質面攻めにして聞いた事だ。向こう側から自発的に渡されたものは全く無い。
こちらの知りたいことを小出しにされて、大部分を隠されているような感覚もある。
中でも、今さっき知って一番驚いたのは、
……以前から糸威さんは水登刑事に協力していた、ということ。
この事件が始まってすぐに、協力を依頼されたらしい。

だから、絵も描けた。
水登とは初動捜査以外、何時でも一緒にいるという訳ではない。
自分の預かり知らぬ所で、糸威が事件現場に案内されていても、何一つ不思議なことは無い。
水登の事だ。他の者にも口止めしているであろうし、そんな事をしなくても人に悪戯することが好きなあの先輩刑事にとっては、だれにも見つからず人間一人を紛れ込ますことぐらい訳は無い。
とは言え、日付が今日に変わって初めて知った事実だ。水登は協力という意味の言葉を一つも話さなかったのだから当然ともいえるが。
しかし、そうであるならば、
……話して欲しかったですよ……。
愚痴に続いて文句ばかり呟いていた。
調査する気は無いのだと。捜査する気も無いのだろうと。
この人は民間人などどうでもいいと考えているんだ、とかってに決め付けて、勝手に未解決事件のやつ当たり対象にしていた。
すみません、と水登に対する謝意か、自分の見当力の無さに対する憤りへのものか解らない言葉が生まれて来る。
最初から依頼はどうかと思うが、本当は熱心な刑事なのかもしれない。
コンビを組んで数カ月。信頼できる所が見えてきた。
あとは此方へのからかいと、
「なあ、糸威。俺、腹減ったんだが」
こういう所を直して欲しいと心底思う。
というか、他人の家に来ていきなり冷蔵庫を漁り始めるとはびっくりだ。
「知らんよ、そんな事。全く、君は十年前から思考レベルが変わってないね？　人のアトリエに来たら必ず腹を空かせて。成長しろ、と私は思うよ」
糸威の質問攻めが終わるなり、白色のカンバスを台に設置してい

た糸威は、面倒とも取れる表情で、水登の相手をしている。
「良いじゃねえか、ケチケチすんなよ。食うものぐらいで」
食べ物でここまで熱心になるとは、
……水登刑事もしかして金欠だったりするんですかね。
偶に自分にもタカって来ることもあるし。
もしくは底無しなだけか。
一度飲みに行った際ウワバミだということは判明したが、食物に対してもそれが適応されるのだろう。
糸威は、表情に面倒の文字をあからさまに出して、
「……炊飯器の中に米が残っているから、勝手に調理でもして食いたまえよ」
「ははっ、分かってんじゃねえかよ」
向かいのソファに寝転がっていた水登は飛び起き、陽気になって台所へ向かう。
糸威は吐息しつつも、カンバスを台で固定し、自分とそれを内部に閉じ込めるように半月型デスクを配する。
そのデスク上に腰を乗せ、安定性を確かめた後で、霧吹きなどの小道具を並べていく。
真剣な顔で糸威が動いていく最中にも、
「おーい、糸威。これ炊き込み系かよー？　出汁と醤油入れ過ぎたか知らんが茶色が強いんだがよー！」
「？？君は私に協力を頼んだのか？　それともタダ飯を貪りに来たのか！？」
「ちぇっ、分かったよ。これで何とかするってー」
……客観的に見ると苛々させている張本人って水登刑事ですよねー。
と、笠邨が岡目八目を発揮していると、
「……へ？」
糸威が手招きをしていた。こっちに来なさいとでも言うように。
数瞬の躊躇いの後、手の動きに従い糸威の元へ、デスクを挟む形

で応対すると、彼は耳元で囁くように、
「ああ、お嬢ちゃんは薦められても料理を食わない方が良いね。……何せ五日前に炊いた米だから」
「……茶色ってそれが原因ですか？」
こちらが困った瞳で見つめると、さあね、と言って糸威はカンバス方向へ顔を向けてしまった。
誤魔化されたのであろうが、水登が腹を壊しても一向に構わないと、笠邨は思う。
……決して普段の仕返しなんかじゃないですよ……？
絶対に違う。そんなに心が狭い人間では無い。
笠邨が誰に対するものか解らない弁解をしていると、ふと、妙な寒気が背筋を走り抜けた。
寒気の発信源は解る。こちらへ背と横腹を見せカンバスに集中力を注ぎ始めた糸威だ。
微かな横顔しか見えないが、真っ白なカンバスを睨むように見詰めている。
その視線は冷酷とも、怒りとも、憎しみとも違う、単純な鋭さを持っていた。
何も感じられない、ただの鋭さ。
笠邨はそれを恐怖として受け取っていた。
身を縮こまさせる、得体の知れないものへの畏怖として、だ。
……動けない。
集中の度合いが自分の想像を超えているからか、音一つ出すことさえ憚られた。
何秒こうしていただろうか。
張り詰めた空気の中、動くモノが一つ。
糸威の腕だ。
彼は左手で台に置かれたパレットを掌に置くと、長衣腰元のスリットから筆と絵の具を指運で取り出す。
流れる動きで指を締め、キャップの外れた絵の具を紙製使い捨てパ

レットに吹きかけ、
「？？？？？？！」
絵の具上を走らせた筆、それを持つ腕を、勢いよくカンバスに振り下ろしたのだ。
白色に色が追加されていく。

高速。糸威にはその表わし方が相応しい。
一心不乱に、筆に油で練った顔料を付け、カンバスに下ろし、また付ける。
彼個人のやり方なのか、色を変えるごとに筆も換えている。普通に調色するのであれば必要無い行為だ。
既に六本の筆がスリットから出され、デスク上の筆立てに置かれている。
油絵なので筆の洗浄にも時間はかかり、乾きのタイミングなどもあるのに、
……速い。
筆を振る腕に風が巻かれる程の速度でカンバスが彩られる。
まだ筆を握って五分ほどなのに、カンバスの三分の一は色で埋まっている。
顔料も特注なのか、縫って数十秒もすれば乾き、糸威がスリットから取り出したナイフで削る姿が見られた。
正に速筆。未見の早絵描きに笠邨が感動していると、
「おうし、完成！　俺特製、おこわ炒飯！　魚醤がいい味出してるってものよ」
空気をぶち壊して水登が来た。片手にチャーハンを盛り付けた平皿を、もう片方に水を入れたコップを乗っけた上でのダブルアクセル付きだ。

よく零れないな、というよりも、よく怒られないな、と思ってしまうのは彼の事を少しは理解した証拠だろうか。
彼は己の逆端に座ると、糸威へ意識も向けず、ただ一心不乱に飯を掻きこみ始めた。
ここまで派手に食って、一粒も飛び散らないのはある意味凄い技術であるが、
……大丈夫なんですかねー。
心配はする。だが、教えよう、という気にはなれない。
何度も言うが、いつもからかわれている仕返しという訳ではない。絶対に、天地神明にかけ……られはしないが、断じて違う。
すると、水登は、こちらの視線を勘違いしたのか、
「何だ？　やらんぞ？」
ええ要りませんとも。
というか、味で解りませんかね、と笠邨は視線を逸らす。
だから、笠邨は、何もせず迂闊に関わらない方向で行こうと、糸威の観察をして気を散らそうする。
筆に色を擦り込む粘りや、使った筆を立てていく事全てが音出しとなり、小気味よいリズムを刻む。
感情を抜きにして、糸威はその手腕に見惚れていた。
その視線にも水登は細かく反応し、
「ああ、コイツもう始めたのかよ。いつにも増して早えな」
「始めた？　いつにも？」
昔馴染みだから見慣れているのか、随分慣れた口調だ
「ん？　ああ、そうか。こいつがどんな風に協力してくれてっか、お前は見た事ねえんだっけな。……そうだな、説明面倒だから、周囲見回してくれよ」
この人は本当に上司なのだろうか。
一から十まで教えろとは言わないが、一以下で放置は勘弁願いたい。
しかし、無視する訳にも行かず、笠邨はアトリエ内を見回す。

初見の通り、この一カ月、何度も睨めっこを繰り返して来た風景がそこにあった。
「で、この描かれた事件現場が何になるのですか？」
「あー、何だ。後でまとめて説明すっから絵が描き終わるまで、延いては俺が飯を食い終わるまで待ってろよ」
見回せと言ったのにそれか。
もうその米にあたってしまえ、と瞬間的思考を発生してしまったが、
「そこの爺を、待つ必要は無いよ」
文句の代替とも取れる声がした。爺とまで言われた水登はそれこそ嫌な顔をしているが笠邨は気にしない。
しつこく言うが、別に意趣返しでは無い。
注意すべき点が他にもあるのだ。笠邨の視線が向く。
「ふふ、完成だ。我ながら見事、不備は無い、と私は思うね」
そこには、今日見たばかりの事件現場が、ありありと描かれていた。

02

糸威は使った筆を油に浸し、数回かき混ぜた後で白衣のスリットに戻していく。
かき混ぜる瞬間に匂いが強くなったことから推測するに、恐らく油が果物由来、もしくは香料が含まれているのだろうが、
……珍しいですね……。
油にここまで拘る絵師は他にもいるのだろうか。芸術については疎いので解らないが、筆を洗うだけならば精油で充分であろうに。
どういうことだろう、と考えている内に糸威はデスクを片付け、三枚の絵を両の手で抱えつつ、こちらへ来ている
それを端目に茶色に変色した米を平らげた水登は、さてと、と息を吐いて立ち上がり、此方を見て、
「じゃあ、説明……、は糸威に任せるってのよ」
いきなり丸投げですかと突っ込みたいが、上司だ。ここは我慢。
代わりに糸威が水登の頭を叩いているので防衛機制を働かせるとしよう。
笠邨がエアー上司殴りを脳内で描いていると、
「では僭越ながら部外者の私が、語らせて貰うとしようか。
??まずこれを見て欲しい」
言うと糸威は、周囲から絵の入ったカンバスを三枚持ってきた。サンシャイン、都庁、明治大学が背に描かれているそれらは、全て今回の事件現場を描いたものであり、
「？　素晴らしい出来栄えですが、これらが何か？」
自分の目利きでは、リアルだとは思えても、それ以上は解らない。だから疑問するしかないのだが、対して糸威は盛大な、息吹でもしているのかと勘違い出来るくらいの溜息を、五秒に渡って吐き続け、
「やれやれだ。ここまで絵心が、芸術的感性が無いと逆に清々しい

ね。まあ、水登が連れて来たのだから仕方ない。むしろ、これが良いと判断出来ただけ水登よりもマシと言うべきか。いやいや、どうしようもない、と私は思う……」
半目で見られた挙句、不評を食らった。
自分に芸術家としてのセンスが無いことは、学生時代の経験で知っているので別に腹は立たないが、嫌に長い吐息については別だ。
まあそれも、水登よりは上であるという評価でプラスマイナス帳消しにして心を平静に保ち、次の言を待つ。
「それじゃあ、芸術的に馬鹿な……、いや、馬鹿は水登だけだから、馬鹿と少し間の抜けた部下のお嬢ちゃんに懇切丁寧に解説するから、耳の穴から血が出るまで掃除して良く聞くように」
「おい、馬鹿糸威。面棒とか渡さなくて良いから、さっさと話進めろよ。飯食ったから眠いんだよ??ってぐあ！　め、面棒で喉突くなよ！」
「だったら少しくらい黙っていろ！　全く飯の後は文句か。いい加減喧しくて手が出そうだぞ？」
「も、もう出てるじゃねえかよ！　軟そうなもんでも結構痛えんだよ！　局部は止めろ、局部は。別の所にしやがれよ」
「ふ、手では無い面棒だ。大体、君が無駄に鍛えてるから年々突く所が減っていくんだこの筋肉馬鹿め。喉以外なら眼か鼻の穴か耳の穴しかないじゃないか。それで、いいのか？」
言い争いがヒートアップしてきた。
じゃれ合いの間違いかもしれないが、流石に見苦しいので
「あ、あの、そろそろ話を戻してもらえると有り難いのですが……？」
両者を刺激しないように、恐る恐る訂正を申し出た。
するとクロスカウンターを打ち合いかけた二人も、何かに気付く素振りを見せた後、手をおろして落ち着き、
「……済まなかったね。君の上司の爺がうるさくて」
「いえいえ、いつもの事なので」

「な、てめえらっ??ぐおっ！?」
面棒を三本使用した金的が水登を襲い、そのまま彼は崩れ落ちた。
面棒の持ち主は即座に三本をゴミ箱に入れ、手を石鹸で洗うと、崩れを落ちた水登を踏み付けて、
「では、説明を開始しようか。じっくりたっぷり教えてあげよう」

はい、と小さく頷く少女を前に、糸威は思っていた。
……ううむ、背徳的！
幼女（体型）に何かしらを教える、という響きだけでもインモラルを感じずにはいられないというのに、目の前のこれだ。
こちらが何を話すのかと、期待している視線だ。気味になっているが少し半目気味になっているがそれも愛嬌。
残念なのは、警服を着ていないということだが、こういったフォーマルな格好でも全然オーケーである。むしろ制服より普段着の方が露出が少ないのはどういうことだろうか。
……けしからんが、まあいい！
最近は全体的にごつくなってきているので、宜しくない傾向にある。その傾向の中では抗っているほうであろう。
自分は少女趣味を持っていないが、可愛らしいものは可愛らしいと思う程度の慣性は持ち合わせているので、何ら問題は無い。
少女はこちらに助力を求めている。女性でなく、少女が、だ。
「ちょ、何クネクネしているんですか！?」
「き、気にするな笠邨ちゃん。そいつは奇特で最悪な事にエロい持病を持っているだけだから」
足下で復活を果たした水登が、立ち上がりざまに笠邨に声をかけた。
エロいとは何事だ。ど突きたいがこの際だ、無視して先に説明しよう。
「この絵はね、知っての通り事件現場を描いたものであるのだが？

？」
「……はい」
少女が真剣な顔になった。これもまた良い。
だが、焦ってはならない。逸る気持ちを抑えていかねば、この顔の持続時間が少なくなる。それに、こちらも確かめるべきことがある。
「？？少し確認を取るけれど、全ての現場に肉体の一部が残されていて、その全てが骨折していたそうだね」
「ええ、最初の事件では五人の失踪者が出ましたが、見つかった腕は二本。足は一本。どれもが複雑骨折を負って、根元から引き千切れていました」
眉も動かさず淡々と喋るさまは、正に仕事人を想起させてくれる。
そこに無理を隠し切れていないのはまだ未熟で在る証拠だが、愛らしいので構わない。
「ふふふ、これも気付いているかな？　池袋、新宿、明大前、そして八王子と、事件発生位置が東京西部に移行していることに」
「そこまでならば。ある程度の推測で、こちらも既知の範囲内です。……ですが、それ以上が中々……」
成程、と糸威は理解した。前もって水登から聞いた通り、そこまでが警察の掴んでいる、少なくとも実際に調査している者が知れた情報なのだ、と。
「そこから先が、私の話すべき個所だね。
？？それでは言うけど、この三枚の絵、実は共通点があるんだ。散らばった肉片を見てみ給え」
肉片って……、と笠邨は嫌な顔をするが、今そこを気にするべきでは無い。
こちらが手の動きで急かすと、少女は絵の一部に集中する。しばし待つと、
「……ん、何か妙な感覚があります……」
「それが吐き気などでは無いのなら、その感は正しいよ。

？？答え合わせと行こうか。実はこの腕や足、そして血痕の散らばり方に一定の方向性がある」
右の二指で示すのは、腕や足が多量の血痕からどれだけ、どの方角に吹き飛ばされ、縫い付けられているのか。血液そのものもどれがどの方向に在るのか。
それらをゆっくりとなぞっていく。
「……？　それが……どうかしたのですか？」
「ふふ、鈍いね。鈍すぎる、と私は思う。？？案内しているのだよ、犯人が」
「……」
笠邨は意味が解らないとでも言うように沈黙した。
……やれやれ、だな。
洞察力が足りていない。
「良いかい？　この犯人は態々千切った四肢を平面に張り付けている。いつ殺人を犯しているのかは知らないが、手間暇を考えたら、そこら辺に投げ捨てればいいだけの話なのだよ」
それなのに、やる。ならば、その意味は、
「アピールなんだよ、これは。自分がこれをやった。自分はここにいる。だから早く来てみろと、そう言っているのだね。芸術家の私が言えた事ではないがかなり自己顕示欲が強いようで何よりだ」

笠邨は、糸威の推理を聴いていた。いや、推理と言えるものではなかった。
本人にとっては確信に満ちていて、論理も無く、ただ絵で判断したというとんでもないもの。
しかし、それは違う、と胸を張って言えるかと問われればノーだ。それでも疑念は残ってしまう。はっきりしないと自覚する笠邨は、
「……仮にそうだとしても、そう判断した根拠はどこに在るのですか？」

我慢ならず、聞いた。ここははっきりさせた方が良い。
「根拠？　ふっ、馬鹿な事を今更聞くね。私が描いた絵に移るのは全てが真実。違うことなど在り得ず、また、私が絵を読み誤ることもない。
？？私がやった。それが根拠だ！」
笠邨は呆気にとられ、沈黙する。あまりの豪論によるもの。
息を深く吸って、自信満々に語る口は早く、
「ふふっ、やはり、やはり絵は素晴らしい！　写真などよりも明らかに、現実よりもしめやかに、だが確実に真実へと導いてくれる。
そこらの探偵が証拠物品に頼って教えて貰っているのを見ると滑稽に思えるほど、絵は優秀だと、私は思うね」
それは歴史的な探偵作品を馬鹿にしているんですか、と言おうか笠邨は一瞬迷ったが、今の所は黙っている。
こちらが文句の葛藤に陥る中、糸威がテーブルに地図を広げ、
「見たまえよ、この地図を。そうすればもっと良く分かる、と私は思うね」
地図に描かれているのは東京。八王子と青梅を主にした縮小地図だ。
笠邨が大人しく見ると、紙上には赤いマーカーが貼ってあり、そこから一本ずつ線が引かれている。
マーカーは全ての殺人現場。そして新たな一本の直線が糸威の手によって引かれていく。
ペンが動く。
分かる、という彼の言葉の意味を、最初は戸惑い、中盤で疑念を抱き、しかし最後で理解した。
「集合点……」
線が集まる一点が存在した。
惣岳山の麓。
全ての直線はその一点から放射状に発せられているのだ。
「ふーん。お前の疑う場所はここってことかよ？」

「疑いでは無いよ。昔から君も知っているだろう？　これは確定、確信であることを」
そうさ、と糸威は一呼吸。
「絵はね、語るんだよ。誰も見ていない誰かの気持ちを。写せないモノを映す鏡なのだよ。だからこそ、絵が語ることは真実であるし、間違った、惑わすことを言うものは存在しない。つまり、真理だと、私は思う」
真理だからこそ、糸威は続け、
「私には分かる。この一点は自らが示そうとして示している。つまり、誰かに見て欲しがっている。現場に残る血痕に、腕に、足に僅かな指向性を持たせているのがその証拠だ。つまり、ここにいる」
言い切る糸威に対し笠邨は何の言葉も返すは出来なかった。
対して、こちらと同じように地図を覗きこんでいた水登は極めて何気ない口ぶりで、
「……ま、そうだな。お前は昔から気持ち悪いくらい人の機微探って、人心を当ててきたからな。疑いはしねえよ」
言っていることはあまり理解できないが、糸威の情報の正確性と信頼性には、一名のお墨付きがあるようだ。
水登が信頼を置いているという辺り、少々不安、否、とてつもなく不安であるが明確で目の前に出され、それなりのデータを持った情報がこれなので、言ってみる価値はある。
犯人（仮）の居場所はつかめたのだから。
これまでに比べれば、進歩には変わりない。確認するべき目的が出来ただけ御の字。
「じゃあ、早速？？」
行きましょう、という前向きな台詞は続かなかった。
笠邨が舌を噛んだ訳でも、部分的記憶喪失に陥った訳でもない。
こちらの出鼻を挫く二つの言葉が、先に入り込んだからだ。
「んじゃ、待つかよ」
「ふふ、そうだね。ここは動かず傍観しているのが賢明だね。休む

べきだ、と私は思う」
笠邨の意識は数瞬失われた。

03

衝撃のあまり、朧げになる意識を、叩き戻し、聞き間違いを、己の耳の異常を期待して問い直す。
「い、今、何と、仰いました？」
此方の問いに至って平然と、場合によっては等閑に見える程の脱力状態で先輩刑事は答えた。
「ああ？　ちゃんと聞いてろよ笠邨ちゃん。
？？まあ、要するに、俺たちは動かないからお前も動くなってことよ」
確かに聞こえた。二度目の台詞は脳髄にしっかりと刻み込んだ。
「うご……かない？」
冗談でしょう、と続く言葉は消え入った。
なんで、どうして、と疑問が脳内に浮かぶが、答えを持ち合わせていなかった。
事実として思考できるのは、また一人殺されるかもしれない、ということ。
笠邨にとって殺人犯を見つけて動かない、というのは助けない、と同意義だった。
言おうとしたが、封殺するがごとく、
「当然の判断。当たり前だ、と私は思うね。動かなければ被害者がもう一人くらいは出る。その際にこの一点を見張っていれば現行犯逮捕、または緊急逮捕できるだろう？
逮捕状もまだ無いし、これが最も確実な方法だね」
「……お前、それは警察である俺の説明領分だってのよ？」
男二人は談笑するが、
「……して……、……どうして……」
そうして笑顔で話せること自体が笠邨には許容できなかった。
「……場所が分かっているのに、……確信に至っているというのに

……」
何故、
「なんで、貴方達はそうなんですか！　今この時にも悲しんでいる人が居るというのに、何故動かないのですか！！」
渾身の叫びだった。
眼の端には涙が浮いてしまっている。
水登を見直しかけていたのに、自分のような小娘に八つ当たりされても自分の捜査を続けられる、尊敬できる人物だと思い直していたのに。
裏切られた気分だ。
お門違いなのは分かる。自分の考えを押し付けているだけで、これこそが本当の八つ当たりなのだ、ということも。
だが、言わなければ気が済まなかった
感情が溢れだすのを我慢できなかったのだ。
「私達は、人々を守るヒーローじゃ、法の下に正義を実行し、弱者を守る者じゃないんですか！？」

眼の端に涙を溜め、咆哮する笠邨を見た水登と糸威は、しばらくして顔を見合せ、同時に吐息した。
息は深く、呆れや諦観、面倒が溢れたもの。
やがて糸威は、なあ、と前置きする。
此方を冷めた視線で見つめた上で、彼は言った。
「お嬢ちゃん、勘違いしてはいけない。私は警察では無い。ただの協力者だ。正義を語ることなど仰々しくて出来ない、無理だ、と私は思っておくよ」
そして、
「この馬鹿爺さんも警察ではあるが、決して万人の為にいる訳では無い。金の為に働く公務員でしかないのだよ？」
「おいおい、ひでえ言い方だな。合ってるけどよ。

??つまりな、笠邨ちゃん。金貰う職務が人を捕まえる権限と責任を持つだけの警察官が正義っつーのはおかしいだろってことだ」
「そ、それでも、例え賃金を得ていたとしても、無償の正義で無いとしても、正義の指針で弱者を守ることこそが我々の仕事です。そこに異なりは無い筈です！」
意志の強い瞳を開け、眉を吊り上げ視線で射ってくる。図体にしては迫力がある、と糸威は判断した。
そして彼は何かを言おうと口を開き、止めた。何故なら、
……ここは私の出番ではない……。
彼女は警察としての立場からモノを言っている。ならば、部外者が何を言っても聞く筈もなく、効果も無い。
ゆえにここは、
……水登に任せるか。
こちらが視線を送ると、仕方ない、と背を預けていたソファから上半身を惹きはがし、前のめりになって笠邨を見た。
口を開く。

「なあ、笠邨よ。お前、正義で守るっつってるけどよ、お前の言う今回の弱者って誰だ？　んで、どういう意味だよ？」
「????っ！」
「答えられねえか？　まあ、そうだな。いるって言っちまうのは今後事件が起きるか不確定な以上不可能で、いないって認めちまったらお前の?弱者の為に行動論?じゃ、動けねえよな」
あのよ、と水登は区切り、
「平等を謳っているにも拘らず実際に弱者がいることを認め、助けようとするのは構わねえんだよ。それを出来ねえ奴もいるし、確実に善い事だからよ。
??ただよ、お前の好き勝手で、人を勝手に弱者として扱うんじゃねえよ。それは思われた者にとっても、真に弱い者にとっても、

失礼なことだぞ？」
そもそも、弱者と見なすこと自体がおかしいと何故気付かないのか。
警察は弱者の為にいるのではない。正義の為にいるのでもない。
「俺達は、大勢の市民が安定していれば、それだけで存在意義を果たせる。むしろ、それくらいしか出来ねえ矮小な力しか持たねえのよ」
人間一人で、他人の生活をカバーできるか。答えは否。
一人で複数の他人を守りながら、己の生活を保てるか。回答は勿論、非。
全ては警察という大組織で賄っていることであり、その中の一構成員がどれだけ動こうが、外部は何も変わらない。
警察はとにかく、市民を安定させる調整剤でしかない。
……平和とか秩序とか、便利な言葉だよ。
それが存在理由の全てだ。そう伝えてやっても、
「だからって、……人を見殺しにするかもしれないんですよ！」
まだ笠邨は食い下がって来た。だから、
……面倒だから、任せた。
アイコンタクトを糸威に送ってやった。厄介事は人任せにするに限る。

笠邨は己の、感情的と自己判断出来る言に、一切の後悔を持たなかった。
例え、手痛い反論を食らっても、それは変わらない。
糸威の視線と共に、言葉が来る。
「大抵の者は見ず知らずの人間が死ぬことに悲しみを覚えることは無いよ。
誰だってそうさ。君は一年に自殺した人の数を覚えて、悲しんでいるか？

仕事中に事故に遭って負傷し、死んでいった者の数を知っているか？　死んだ理由を知って憤っているか？
日本では何万人もの死者が毎年毎年出ているな。君は死んだ者達を一人一人をチェックし、個々に嘆いているとでも言うのか？
それらすべて見ず知らずの人間で。もしかしたら助けられたかもしれない命だ。これも立派な見殺しだ」
「それは、論点がずれています！」
こちらが反駁しても、淡々と、感情の一端すら見せず、
「論点は最初から変わらないよ。知らぬ他人に感情を抱けるかどうかだ。そして私は抱けない、大抵の中の一人だ。つまり動く義務も道理もない。ある方がおかしい。
……長くなったが私の言いたいことが分かったかな？　分かるよな、と私は思うよ？」
あまりにも冷静に、しかし残酷な事を告げられた。
親しみを得なければ人を助ける事が出来ない、と彼はそう言っているのだ。
こんなことはおかしい、と笠邨は苦笑を浮かべる。
眼と鼻の先で人が居なくなっているというのに、死しているかもしれないのに、
……それを止められるかもしれないのに、放置する……？
あまりの非常識に笑みすら浮かんでしまう。理解不能だ。もしかしたら自分こそが非常識で理解不能なのかもしれないが。
否。
理解する訳にはいかなかった。
法の下に、人を守る警察として。
その職を担うものとして。
正義を誇りとして持つ己として。
「……いいです……」
「……ん？　どうしたんだいお嬢ちゃん」
口を開いて出た言葉は弱く、対面する相手に届かないほど、力の

ないものだった。
　自分でもこんな声を発した事に驚きを得るが、今はそれ以上の激情が身体を火照らし、しかし、それを直接表にせず、内部に溜めこみ、
「？？もう、いいです。分かりました」
　静かに言った。
「そうかそうか、分かってくれて何よりだ。君の頭脳を再評価しなければならない、と私は思うね」
　拍手でこちらの回答を受け取る糸威を一度睨んで、笠邨は立ち上がる。
　椅子から離れた彼女は、歩みを持ってドアへと向かう。
表情には緊の一文字が浮いていた。
「……笠邨ちゃん……？」
　此方の雰囲気を察したのか、水登が眉を顰めてこちらを確かめる。
すぐに返事はしなかった。
この場で一度放出してしまえば、自分でも止められないと分かっていたからだ。
　だから、放つべき言葉は極短く。
呼吸を深めながらドアの前に立ち、開け、外に出る。
　扉を閉める直前に、相手と、己の決めたことと、自身の答えを纏め、発した。
「……貴方達は悲しみを止める気がないのですね。ならば、私は貴方達と同じ方向を行くことは出来ません」
　言って、ドアを閉め、
「見直していたのに。……真剣に誰かを救う人なんだって……」
　呟き、
「そんな人達だったなんて思わなかった……」
心内の感情を漏らしつつ、ログハウスを立ち去った。

水登は笠邨が出て行ったドアを見つめつつも、コップの中に入る水をゆっくりと口に含む。　喉を潤し、気分を落ち着かせ、
「やれやれ、言ってくれるってのよ。？悲しみを止める気が無い？ね。……ちょっと苛めすぎたんじゃねえの、糸威よ？　涙目だったぞ？」
問うた先の糸威は、相変わらずの微笑みで、
「ふ、君こそやり過ぎだね。あの程度の妄論と屁理屈で騙せるお嬢ちゃんなら、少し現実を知った方が良いとは思うが。
それより良いのかい水登。年下の恋愛フラグを圧し折って。勿体無い、と私は思うね」
「おいおい、妻子持ちに言う台詞じゃねえぞそれ。大体、フラグ立っていたのはお前も同じだろうがよ」
「ふふふふ、ロリコンと一緒にしないで欲しいな。学生時代から妹系のエロゲを嗜んできた君であれば正当な成長とも言えるが、少し抑えた方が良いよ？」
「ひ、人の話聞けよ馬鹿野郎！　つーかその話、嫁さんには絶対言うなよ？」
「ふふ、大丈夫大丈夫。私は口が堅いからね。君の細君には何も話してはいない。
？？うん、携帯メールで送ったけどね」
水登は始め、怒り顔になり、続いて悩み、次いで落ち込み、最後に肩と膝を落として項垂れた。終わった、と哀愁漂うぼやき付きだ。
「ほら、水登。私の家で水をやり過ぎた朝顔みたいに萎れた顔をして倒れていないで、さっさと動きなよ。動け、と私は思うよ。仕事上のパートナーは出て行ったけど、君はどうするんだい？」
まあ、な、と水登は今日何度目かの溜息をこれ見よがしに吐いた後で、
「あの調子だと一人で突っ走ってそうだからよ。確実なのは俺もお前も行くしかなさそうだってことよ」
「……折角遠まわしに、行くな、と言ってあげたのに、とんでもな

い裏目になってしまったようだね」
ふふ、と笑って来る糸威に対し水登は口を吊り上げる。
……気づいてやがんな、コイツ。
水登は腰を上げつつ思う。笠邨は、ただの新米で、自分の部署のぶの字も知らないひよっこ。そして、自分が相対する者の正体すら勘付けない、言わば警察初心者だ。
だがあの頑固さがある。この場で真実を話した所で、否定するか何も考えなくなるかのどちらかだ。
ならば少しでも納得を得てもらい、その上で向かって貰う。自分たちに敵意を抱き、それが意気込みになってくれれば幸いだった。だが、
「……はあ、もう少し、時間をかけたかったんだがよ。何の知恵も作戦もねえあれじゃ、ただの突っ走り馬鹿だ。これじゃあ、行くしかねえじゃねえかよ」
「ふふ、やはり過保護だね君は。ちゃんと成長させてあげようとするなんて、お嬢ちゃんの父親か、と私は思うくらいに」
「流石にむざむざ死なせる訳にはいかねえだろうよ。危ねえ目にはあってもいいがよ」
糸威はシニカルな笑みをこちらに向け、
「君はつくづくな性格をしているね。尊敬するよ」
「ほっとけよ、馬鹿野郎」
男二人は笑いながら、ログハウスを出ていった。

言われずの口実

落ちかけの日光が射し込み、舗装された一本道を木々の陰から照らし出すとある山中。
普段は人通り、車通りが共に少ないこの道に置いて、排気ガスを撒き散らす動く物体がある。
黒塗りのタクシーだ。
老人の男性運転手一名、少女の乗客一名を中に仕込んで走る車は、奥へ奥へと進んでいく。
その車内で、地図と睨めっこする少女、笠邨は、
「あー、運転手さん。そっちじゃないです。……そう、そこで右に？？」
盛大に迷っていた。

笠邨がタクシーを頼み向かった先は地図の一点。
一目見ただけで覚えてしまったのは、やっと得られた情報だからか。
ただ、整備された道が揃っている訳でもなく、県道あり、砂利道獣道あり、あれこれ指示しながらの目測移動だ。
運転手もそんな所に人を送ったことが無い、とのことで道行はあやふや。
地図を引っ張り出し、老年の運転手と協力し合い、やっと目的の場所近くまで辿り着いたのが、水登たちの下を飛び出て四時間後。
時間は掛ったが、笠邨はナイスコンビネーションだと自画自賛する。
しかし、それでも、夕焼けがとても綺麗な時間帯だ。暗くなってはこちらも危険。
丘を切り開いたためか、崖になっていて車は入れないらしい。

目的地である麓へは脇道に入って登る必要があり、これからの道程は徒歩。
最終地点に着くことを考えたら時間が掛かり過ぎだ、とも思うが、
……動かない人間よりマシです……！
繰り返し何度も自分に、言い聞かせ、自らの正しさを自己認識する。
自分は決して間違ってなんかいない。と、ここまで考えた所で、
「あ、運転手さん、色々有り難うございました。いきなり捕まえて、こんな所まで来させてしまって」
「いーていーて、別に暇じゃったから。それよりも気をつけなされよ。この先の登りは急でな、ここまで来るのに通過してきたつづら折りが何層にも渡ってあるんじゃて。おちなさんなよ」
はい、と運転手に礼を行って、笠邨は進み行く。
背の方から車の去る音が聞こえて来る。タクシーが帰る音であろう。
老年の運転手にもう一度、有り難うございます、と感謝を口にして笠邨は山道独特の段差を登っていく。

「おい、こっちの用は終わったぞ。お前の方はどうだよ？」
「うむ、私の仕込みは完璧だよ、水登。寸分の狂いなく完了した、と私は思うよ」
「んじゃ、行くかよ」
「ふふ、そうだね……ん？」
「どうしたよ、糸威」
「いや、ただこの辺りでタクシーを見るのは珍しい、と思っただけさ。それだけ、と私は思うよ」
「……人がいりゃあ、タクシーは来るだろうよ。そんなことはどうでもいいから、速く行こうぜ。あそこの崖に横付けして止めれば邪魔になんねえだろうしよ」

「ふふふ、やっぱり君は過保護だね。歩くのは面倒だけれど、仕方が無い、か」

笠邨が数分かけて坂の連続を登り切った。
額に汗を浮かべた彼女の目の前に現れたのは、切り開かれた土地と、……また、ログハウス……？
何処かで見たことがあるような形式の家だ。しかし、午前に見たものと違ってやや小振りで古臭い。
座標で見た場合、この辺りがヒットする。
であれば、目の前の小屋に容疑者が存在する筈。
笠邨は恐る恐る近寄っていく。銃は携帯済みだ。いざという時は放てる。
小屋の扉は、全景にそぐわない金属製。隣にはインターフォンが設置されている。
だから、笠邨は押した。
鐘の音が室内で反響する。三秒の間をおいて、ドアがゆるりと開かれる。
ドアの隙間からはみ出るように現れたのは、
……何、この人？　キツネの耳？
キツネ耳を頭に装備した、若いコスプレ青年だった。
「何の御用ですかねえ。こんな山奥に若い女性が、この僕に」
ジーンズにカッターシャツという普通の出で立ちなのに、異彩を放ってしまうのは、脳天付近にある二つのキツネ耳のせいだろう。
ヘアバンド式なのか、たまに動いている。
頭を振り、気を取り直して、
「いやすみません。ちょっとお聞きしたいことがありまして、この辺りで何か変わったことは？」
「むう、変わったことは無いねえ。少なくともここに長く住んでいる僕にとっては。何かな？　自由研究でミステリーやツチノコでも

探しているのかい？」
腹立たしいが、目の前の男はこちらを学生程度にしか思っていないらしい。
だが、自分にはそういった経験は豊富だ。間違われることには慣れている。慣れたくないのに慣れてしまっている。だから表情に怒りを表しはしない。
ただ苛立ちは流石に生産されたので、無言で警察手帳を掲げ、
「少しばかり、細かい話を聞かせていただけませんか？」
組織的プレッシャーをかけることにした。こういった交渉や情報収集に置いて大切なのは、こちらのアクションと、それに対する相手の反応である。
目の前のキツネ男は、手帳を見せた瞬間、肩の辺りを痙攣するように動かしていた。
顔には平静が浮いていることから、意図しない行動だったのかもしれないが、
……これは。当たりですかね……。
挙動不審とまでは言わずとも、十分に怪しいと思える。
だから、ここでは追及一択。
「ええと、貴方はここで何をなされている方で？」
こんな所にいるのなら、何らかの意味がある、と笠邨は推理する。
「また随分込み入った質問だねえ。まあ、一応、芸術家やらして貰ってるよう」
芸術家は皆こんな所にすむのかい、と笠邨は過去の、というよりは四時間前の出来事を思い出し苦々しい表情を作る。
と、こちらが思考していると目の前のキツネ耳の青年が嫌そうな顔をした。
此方の表情に反応したものか、忙しいのに話しているからなのか、それとも、
……疑われていることに焦っているの……？
今はまだ不明だ。

未確定事項。ここで下手に突っ込んでは自滅する。
しかし、追い打ちの余地はある。
「??上がらせて貰っても?」
先程からキツネはずっとドアに貼り付き状態だ。中に何かがある。
例えば、いままでの不明死体等。
力づくで押し入ってはならない。それくらいの線引きは出来る。
故に聞いたのだ。
犯人であれば拒むか言い淀むかする筈。
「別に構わないけれど、大した御持て成しはないよう?」
拒まない。むしろ受け入れた。
その事に驚きを感じつつも、警察としてポーカーフェイスを保ち、室内に入る。
中は暗く、窓から射光が入ってもそれは変わらない。
窓を探しても一つだけ、それも三十センチ四方の小さなものだけだ。
気になるのはそれだけでは無い。
……何、コレ。
匂いだ。
油のような、鉄のような、嗅いだ事のない濃密な匂いが漂っている。
糸威のベクトルを真逆に変更した様な芳香が、鼻の奥まで染み込んでくる。
本来の芸術家のアトリエとはこんな感じなのかもしれない。
「ああ、御免。暗いよねえ。今御持て成しするから、電気つけるねえ?」
言葉通り天條に付属する電球が点灯した。
部屋を露わにする。
笠邨は、匂いの原因を、その眼で見た。
彼女の予想はぴったりと的中していた。
「うっ……」

塔がそこに在ったのだ。
真っ直ぐに直上に伸び、今や天井に届きそうな、人を折り曲げ組み立てられた塔が。
背筋を伸ばした死体を基部に、井を幾つも重ねた形状。
材料となって梁のように組まれた人間の各部は撓り、形を保っている。
ある者は耳を削がれ平坦になり、ある者は口元から血泡を吹き下に垂らしていく。
「〜〜〜〜！」
吐く、寸前で堪え切った。
胃から逆流したものが喉と鼻の粘膜を刺激する。目もちかちかする。
字義通り、吐き気のする光景を笠邨は目に焼き付けることとなった。

02

施錠音を聞いたのは、明かりがついて二秒後の事だった。
内心吐き気を堪えて慌て、しかし表に出さず何とか振り向くと、
「どうだい刑事さん、僕の御持て成しは？　楽しめたかい？」
「貴方は……！」
扉の前に立ちふさがり、腹脇からかすかに見える極太の南京錠を取り付けたキツネ男が微笑していた。
目だけを弓にして、口元は裂けたかと見間違う程に吊りあげた、気味の悪い微笑みを。その顔を維持して、キツネは喋る。
「僕の最高傑作だよう。誰かの血と僕の汗の結晶。バベル……は言い過ぎだなあ。じゃあ？神の家？とでも名付けようかなあ」
「あ、貴方は自分が何をやっているのか、理解しているのですか？！」
「勿論。塔をつくっていたんだよ？　僕は曲線が嫌いでなあ、いくら材料にするとはいえ、曲がった者を家に持ち込むことは出来なかったんだよなあ。だからその場に残して来たけれど、あまりに勿体無くて毎回毎回即興作品を作ってしまった。
だからこれを作るまでにとてもとても時間が掛かってしまった。それが今回の反省点だよう」
不味い、と笠邨は反射的に勘付いた。話が通じているようで、全く入れ違っている。
キツネの目には恍惚の微笑が浮かんでいたが、首の動きだけでこちらを見つめると一瞬にして、口元の笑みを消し、
「これはこれで美しいのだけど、まだ完成じゃないんだよう？」
何を言っているのだ、この男は。
「悪人ここに極まれりってことね……」
これだけ殺して、これだけ非人道的な目に合わせて、まだ足りないと言うのか、と笠邨は憤慨したが、彼女は認識が足りていなかっ

た。
キツネは視線を笠邨に固定し、
「いい身体だなあ。背筋の伸びた、しゃきっとした、最高クラスの材質かあ」
自分自身が、その非人道的な男の下にいる事への危機感が、圧倒的に足りていなかった。
彼女は身の内から溢れようとするモノを抑えるのに必死であり、目の当たりにした光景を精神的に凌ぐのにも全力を尽くしていた為、新たな危険への対処余裕が生まれなかったのだ。

「因みに僕はね、一応悪人しか殺さないようにしているんだあ。君の独り言かもしれないけれど、反論はしておくよう」
唐突にキツネは語り始める。まるで、これから成す行為の下拵えをするかのごとく、粘るような口調で言葉を紡ぐ。
「塔上部から二番目の女性。あれは酷い詐欺師でねえ。嘘ばかりついて自分の店に連れ込み、金を毟り取っていたっけなあ」
覚えている。キツネは過去を振り返る。
ある程度の人間を必要無い、と思ったのはいつだったか。
覚えてはいないが、最近では無かった気がする。昔からそう思っていた。
「ほら、あの真ん中の腕が欠けた子。この子はどうしようもない悪人だったなあ。母親に金をせびって、男は痴漢を出汁に脅して、弁解もさせずに材料となっていくのは愉快だったよう。塔になって三日後に死んだっけなあ」
馬鹿で生産力もない人間は、居ても消費者としてくらいしか利用価値はない。
消費者なら、誰が行っても同じだ。ならばさっさと死んで有益に使われるべきだ。
「最上階の中年女性。コレは一番いけない。何しろ弱者を狙う金貸

しの頭取でなあ、材料になってはいるけど、今思うと結構衝動的だったなあ」
悪事を働くから、悪人なのではない。居る意味もないから、存在が悪となるのだ。
「どう考えてもいらない人間は出て来る。なら、材料扱いでも構わないじゃないか」

笠邨は聴く。
キツネの言い分を。狂っていると、そう認識できる異論を。
「僕が素材とするのは要らない人間ばかりだ。だからアンタに悪人呼ばわりされる気は無いんだよなあ。むしろ僕を邪魔するアンタこそ悪人だと思うがよう？」
な、と笠邨は言葉に詰まった。人格そのものが狂っている。
キツネの狂気に押され、恐怖を得ていると、ある事に彼女は気付いた。
「男は駄目でねえ。堅くて加工し辛いんだよう。腕だけなら兎も角ねえ」
キツネが歩き始めたのだ。こちらへ向けて。
「美術品を作るのに、材料は絶対に必要なんだよう」
二歩後ずさりした。
壁にぶつかり、傍にある小さな、掌四つ分程度のガラス張り窓が高音を奏でる。
もう下がれない。
キツネが来るのを待つだけ。
「完成させるにはあと腕一本を塔の上部に嵌めこむんだけど、細くて女性らしい腕が好ましくてねえ、なかなか出合えないんだあ。歯痒いったらありゃしない」
だが、
「今日でその不快感から解放される！　これほど嬉しいことは無い

なあ」
キツネが涎を垂らして、向かってくる。
……逃げなければ！
今頃になって、と自分でも思うが、それでも逃走しなければならない。
ここは狭い室内。
男は扉への進路上に立ちふさがっているため、回り道をしようが何をしようが、結局はキツネをどうにかしないとこの場から出ることは不可能。
銃は携帯しているが、丸腰の相手に打つべきでは無い物だ。
だからこそ、笠邨は選択した。
ここは体当たり。
いくら男でも、これだけの短躯で細身で優男。衝突すれば怯むだろう。
女だからと言って、訓練していない訳ではない。
笠邨は、半身になり肩を押しだすような体勢で固定。
一歩を踏みこみ加速。
勢いそのままに突っ込む。
男は彼女の行為を傍観していたがやがて手を鳥の翼のように大きく広げた。
舐められている。そう感じた笠邨は、身体を怒りで強張らせながら打撃する。
衝突。
男の鳩尾辺りにこちらの肩が激突する。
威力は確かに発動し、男に圧が加えられた。
が、それまでだった。
怯むことも倒れることも、ましてや一歩ずり下がることも無かった。
彼は頬を一度掻き、その指を此方の肩に引っ掛け、

「そっち向かないでくれよう。綺麗な線がずれて死んだらどうするんだい」
放られた。
自分の身体が、己の後方へと引かれる。単なる力で、だ。
在り得ない膂力、と思ってもそれが真実。
腕力任せの強制移動のため、足が付いてこない。
受け身を取ることを速度は許してくれなかった。
気床を擦るように、右半面から笠邨は打ちつけられた。
「……か……ふ……」
衝撃で呼気が漏れる。
痛い。
全身を熱が覆った。
皮膚を圧迫する、痛覚の熱さだ。
額と右こめかみの辺りを擦り切ったのが分かる。床に密着する耳に、生ぬるい液体が触れる。広範囲らしく、出血が止まらない。
「……ん……あ……」
身体と脳を揺さぶられたせいで視界もぼやける。腕の動きも痺れて動きが悪い。
立ちあがることも出来ず、腕の痺れで銃も抜けず、四肢の連動で這いずることが精一杯だ。
「んー、いいねえ。やはり、こういうのは女性に限るなあ」
男の足音が聞こえる。
ゆっくりと寄って来るのが、耳で、衣ずれで理解出来る。
「まず、血抜きから行こうかなあ……」
ぼやける頭でも、恐怖は伝わるらしい。
「ひ……あ……」
眼の端には涙が浮く。
自分の不甲斐なさ、弱さ、情けなさ、痛み、悔しさ。
様々な物が入り混じった結果、滴となって零れ落ちる。
あれだけ水登や糸威を囃し立てておいて、自分一人では何もでき

ない。
く、と歯を食いしばっても後の祭り。
後悔先立たず。悔やんでも悔やみきれない。
何故、
……何故、自分はこんなにも弱い……！
悔し涙が頬を伝い、床に落ちる寸前、
「おいおい、泣くなよ笠邨ちゃん。良い女が台無しよ？」
上司の声が聞こえた。
笠邨は小さな四角形の窓の向こう側から、先輩刑事が銃を構えた姿を捕らえていた。

態々撃っていいかと聞く奴はいないし、心構えをさせる義理もない。
ならば、己の手の内にあるエアーウエイトの引き金を引くことに静止は必要ない。
「おいおい、良いのかよ？　射線上だぜ、そこはよ」
躊躇無き弾丸が、迷いの無い撃ち手から放たれた。
鉄の粒は直線の動きで、ガラスを砕き、待機を散らし、摩擦を貫いて、止まることなく男に向かった。
胸部に絶対命中コース。
その筈だった。が、
「……！」
いきなり男が動いた。僅かに左へと。
それだけの行動で、弾丸は男を掠めることなく、ただ通り抜け、笠邨頭上に衝突した。
「……ううん。初めから心臓狙いだなんて、最近の警察は危なくなったねえ」
「おいおいおい、狙ったのは心臓じゃねえよ。隣接する動脈と肺だ。そもそも、回避出来るんじゃねえかよ」

水登は吐息し、半目を男に向ける。
……これを避けるのかよ……
だったら、
「あー、やっぱりここは、……お前の出番だな、糸威」

三つの音が響いた。
背後から、金属を撃つ重い音と、硬質の物がぶつかり奏でる軽い高音。
そして、自分が振り返った瞬間に
「ふ……」
と、息を漏らしたような男の声がした。
男の後頭部に、戸口に嵌っていた筈の鉄扉が激突していたからだ。
男は重さに押されるように、そのまま床に倒れ込む。
扉が外れ、室内に光が差し込む。夕暮れの射光だ。
その中心に、光を遮る影がある。
影は覚えのある甘い芳香を纏っていて、
「ふふふっ、これで解ったかいお嬢ちゃん。君は非力なんだよ、思っているよりずっとね」
鉄の扉を蹴ったらしく、右脚を前方に掲げた糸威が、そこにいた。

糸威はそのまま足を鉄扉に乗せ、笠邨を見下ろす。
「先走った気分はどうだい、お嬢ちゃん。優越感には存分に浸れたかな？」
足下に柔らかさがあるが無視して足蹴にする。
僅かな空間を挟んで対峙するが、笠邨は放心したように目が虚ろだ。
さっさと立ち上がってこちらに来てほしい物だが、
「おーい糸威。無事かよー？」

水登は来ないで宜しい。
というか、挟み打ちの作戦では無かったのか。
二人が同じ場所にいてどうするのだ、と叱りつけたかったが、まずすべきは、
「さて、お嬢ちゃん。怪我の治療をしなければならないが？？」
自分も大概過保護だな、と思いつつ、糸威は彼女に手を差し伸べる。
足元がぐらついて面倒なので、震脚による地団太を二連発すると大人しくなったので王子様役続行。
すると、
「？？ひ、ひあ……！」
涙を目一杯に溢れさせた笠邨が、こちらの手を掴み、伝う様にして腕にしがみ付いた
その握力は強く、今までの恐怖を全て力に変換したようだった。
離すまいとの意思が、右の腕に伝わって来ていた。
糸威は残る手で、白衣スリットに入っていたハンカチを取り出し、広げ、
「ほらほら、助けに来たのに泣いていられたら、こちらの立つ瀬がないよ」
笠邨の顔を拭う。まずは涙を、続いて口を、
「……ん、んむ……」
顔の汚れをふき終えて、最後に彼女の割れ切れた額。その傷を直接抑えるため、ハンカチを巻く。
「ふふっ、これで応急処置は完了。……どうかな、お嬢ちゃん。少しは落ち着いたかな？」
「……は……」
呼吸と整え、速度は緩いものの、明確な頷きを返す笠邨に気持ちばかりの、安心を感じてしまう。
過保護すぎるぞ、と自分を叱咤した上で、己が手の内側にいる笠邨を慰め半分、好奇心半分で撫でていると

「いい加減、人の上でイチャイチャ話すのを止めろ？？！」
下にいた敵らしいものがキレて、自分たちごと金属扉を跳ねのけた。

芸術道義のシンパシー

倒し乗っていた金属製ドアから飛び退き、玄関口に立つ笠邨。彼女を庇うように前に出る水登と糸威。
彼らの前方では、獰猛なまでに口元を吊り上げて、キツネ男が立っていた。
糸威たちは彼を見て、しかし何の気兼ねもなく、
「どうやら？狐と葡萄？に憑かれたようだね。道理でこの小屋を周辺住民が見逃す筈だ。何しろ、意識しない限り知覚できないのだからね」
「……キツネ……？」
どういう意味だろうか。
頭を打ったショックで思考が錆びついた蛇口のように回転しない。解るのは、キツネという単語が、自分の目に移るキツネ男と結び付くことだけで、
「……あの……コスプレが……どうかしたんですか……？」
「笠邨ちゃん？　何言ってんだ？」
「いや、……だってキツネって糸威さんが」
息が切れ、途切れ途切れになりながらも、意識をはっきりさせる為に口を動かしていく。
「あの男の頭に、キツネの耳がついているじゃないですか」
震える手指で狂ったキツネ男を示し、注意を向ける。
そんな事をする必要も本来は無い。場違いなコスプレをする男など、この場に一人しか居らず、それも目立っているのだから。
しかし、声を放つ事に集中していた笠邨は、ここである事に気付く。
糸威と水登が目を丸くして、こちらを見下していたことだ。
「へえ、観えるのか。短時間でしかも肉眼で、か。……凄えなこりゃあ」

「え、え？」
驚きの理由が解らない。
「そうだね。私達ですら直視出来るのは数時間必要であるし。絵にするにも時間は要るし。
？？お嬢ちゃんがここに配属された意味が分かった。成程、と私は思うよ」
ここで、何となく分かった気がした。
男達の言葉端から聞き取れる意味は、錆びついた笠邨の頭でも十分に取れた。
「もしかして、？？お二人にはキツネ耳が見えないのですか？」
返事は肯定の頷き。
水登と糸威には、少なくとも今、男のコスプレ姿は見えていない。
糸威はキツネと葡萄に？憑かれた？と殺人者を表現した。狐と葡萄と言えば、
……イソップ童話でしたよね……。
分かった事と知識を総合して推測すれば、答えは簡単に出た。だが、
「……？」
己で出した答えが解らない。こうであろう、という仮定はあっても、それを想像し表すだけの知識が彼女には無かった。
彼女に在るのは実体験、異常な精神と異常な身体能力を持つ者がいる、ということだけであった。
上手く言えず、もどかしさを得ていると、笠邨の横にいた水登が、
「霊的存在を信じるかどうかは別として、そういう不可思議な力はあって、異常な身体能力を誇るってことだけは、間違いのない真実だって、そう思っておけよ。今は下手に考えを纏めようとすんなよ」
助け舟と言えなくもないアドバイスが来た。更に重ねて、
「ふふふ、お嬢ちゃん。世界にはまだまだ、面白く奇異なことはたくさんあるんだ。君が持っている常識以上にね」
「そうだぜ、笠邨ちゃん。信じろとは言わねえが、常識以上の危険は確実に大量発注されているってことだけは覚えておけよ？」

頭に手を置かれ、念を押される笠邨は、水登の大きな手が額の傷を抑えているのに気付き、苦笑する。
それは、死の体験から抜け出た事による緊張感の解放であったが、
「おーい、そろそろオーケーかよう？　空気読んで黙っておくのも疲れたんだがねえ」
キツネの一声は、この場に新たな緊張をもたらした。

キツネに呼応し前へ一歩、進み出るのは糸威だ。
彼は辺りを見回し、塔を発見。じっくりと観察した上で笑い、
「ふふ、……これは良い塔だ、気持ち悪いくらい良い出来だ、と私は思う」
キツネは糸威の評論に眉を動かしつつも微笑のまま、
「……言葉を聞く限り同志のようだが、人の家に土足で踏みいるのはどうかと思うんだがなあ」
「ふふ、悪いね。初対面の人間を訪問する際はドアを蹴破る趣味なんだよ」
「……確かにお前は俺んち来た時いつもそうするよな。直すの面倒だし止めて欲しいんだがよ」
糸威は無視した。
眼中にも入れず、彼の視線はキツネで固定。
「しかし、同じ芸術家として、力づくは褒められたものでは無いね。美しくないと、私はそう思うよ？」
「美しいと評価されるのは結果的に完成品だよう。だったら、やり口が汚くとも、出来を重視するべきだと思うねえ」
彼らは言い合う。あくまで芸術家としての視点から。
「ふふ、立体系の者はそういう傾向が強いからね。認めない訳にはいかないけど、私はあまり気に食わないな。過程すら魅せられるモノであるべきだ、と私は思うね」
「はは、見解の相違って奴だなあ。美術ってものは自分と違う担い

方をする奴も多いし、同志が語り合うと、こうなるんだねえ。いや、有意義な話だあ」
二人は笑い、言葉を交わし合う。
きっかり一分話した所で、不意にキツネが表情を変えた。
笑みから、緊の一字へと。
「……なあ、同志よう。そろそろ帰ってくれねえかあ。僕はそろそろ、そこの少女を使って？神の家？を完了させたいんだよう」
「そうかそうか、逸る気持ちが抑えきれないのか。成程、よく分かった。……君のこともよく分かった所で、私の簡単な自己紹介と行こうか」
糸威はキツネに向けて、君が立体構造を嗜むように、と前置きした上で、
「？？私が嗜むのは油絵でね？　まあ、油にもそこそこ詳しいので、ちょっとした物を作ることが出来るのだが？？」
さーて、と糸威は透明な瓶を取り出し
「ナフテン酸やらエーテルやらを諸々ぶち込んだこの液体。一体これは何でしょう？」

笠邨がまず脳内に浮かべたことは、
……何を考えているのだろうこの人は。
室内に広がる光景を見て、惨状を作り出した犯人を前に、こうも冷静にクイズとは頭がおかしいのではないか。
隙間から水登を見れば、諦め半分、呆れ半分といった感じだ。
この状況ではそうであるし、この状況だからこそ、答える人間などいる筈がない。
「……なあ、同志。それは僕の問いの答えになっていないぞう？」
キツネ男の問い直しを、糸威は無視し。
「うーむ該当者なし、……油絵が一般浸透していないとは悲しい事だ。仕方ないので私が答えるとしよう、解説しよう、と私は思う。

まずエーテルとは??」
糸威はどんどんと話を勝手に進めていく。
とても強引だが、半日分の経験だろうか。慣れた。というか、芸術家は皆、人の話を聞かないものだと認識した。
慣れていないキツネ男は、足を揺すり苛立ちを露わにしている。
経験済みで良かった！　と笠邨は自分を称賛するが、その間に、
「??という訳で、出来るのだよ」
知識のひけらかしが終了し、最後の結論が話された。
「まあ長々と話したが、結局は火炎瓶だね。有り体に言って」
は？　と水登を覗いた二人の見学者が、疑問と茫然の声を挙げた。
彼らの前で、糸威は液体入りの瓶を数回振り、中身を混ぜる。
さらに残る手で、ジッポライターを発火状態で留め、
「さ、どうするかな?」
呟き、口元を吊り上げた彼は、徐にそれを投げた。
まず瓶をアンダースローで。続いてライターをオーバースローで。
人の塔へ向けて。
破砕音が響いた。

02

キツネの目には瓶が割れ、中の液体が零れる様がスローモーションに見えていた。
それが引火に至る様子もだ。
起きたのは小規模の爆発。音は破裂に近いもの。
音の広がりと同速で、火炎は広がる。
宙に舞う液体に火が走った。
刹那の時間で燃え盛りに達した液体の火は、塔を巻くように振りかかる。
人の塔は、炎の塔へと変質した。
「ふふ、このままじゃ全部燃えてしまうよ？　ほーら、早く消さなきゃ、灰になる、と私は思うね」
「き、貴様あ？？！！」
小屋から退避する糸威たちには脇目も振らず、キツネは飛び出した。
彼は液体の入る瓶を蹴り飛ばし、これ以上の液体放射を遮断。
次いで塔を崩さぬよう慎重に、火のついた床を蹴り抜いていく。
木製のアトリエで良かったと、過去の自分の判断に満足しながら床落とし作業を続けていく。
人の塔は重量にして三百キロ程度。
周囲の床を円状に抜いていくことで、自重により床下へ垂直に落ちていく。
これで火の被害は取り合えず受けない。
キツネは安心を感じながらも、被害確率を零にするため、火の残る床を全部落とす。
今度は手加減抜きの、高速駆動。力づくで、アトリエごと壊す気で打ち抜いて行く。
八秒で完了した。

床のほぼ全てが失われたアトリエ内で、キツネは塔の位置を固定しながら震えていた。
武者ぶるいのような自分に関するものではなく、芸術家として、
「……作品を、こんな扱いされて、黙っていられるかよう」
同志、いや、元同志による自作品の扱いの粗雑さへの怒りだ。
キツネは塔の安全を見届けた後、アトリエ脇の納屋に入る。
ガレージと言ってもいい物だ。
ドアのない広い戸口を潜るとそこには、建築材や、鉄骨、工具、銃器などが置かれていたが、中央に大きく場所を絞める物体が置かれている。
単車だ。
オフロード用の荒いタイヤを付けたＣＢ１３００。
キツネは壁から一丁の長銃と、キーを取り外し、バイクの元へ向かう。
シート上に置いたヘルメットを払い捨て、キーをねじ込む。
防具も何もつけずシートに跨り、サスペンションのチェックをコンマ単位で行う。
整備は万全。
エンジンをふかし、トルクの力をその身に感じ、怒りを込めて、放つ一声は、
「??逃がすかあ!!」
アクセルを絞る手は、初めから全力だった。

バイクの発進を、水登はその眼で補足していた。
小屋から数十メートルの位置で水登は走行中だ。
笠邨を背負い、彼女の怪我を気遣いつつの走りの為、距離を稼げていない。
どうする、と悩んでいても仕方ない。適材適所。頼る時には人を頼らねば、と水登は隣を走る男に問う。

「しかし糸威、どうするよ。これじゃあ確実に追いつかれるってもんよ？」
相手はキツネ憑き。更にはバイクまで引っ張り出して来た。
ただでさえ厄介な身体能力が、人の作った物によって強化されている。
厄介なことこの上ない。
この先はつづら折りが続く一本道。林に入ろうにも崖がネックであるし、そもそもキツネ憑きであれば単車で森林走行も簡単だ。
逆にこちらが走り辛くなって追いつかれるだけ。
車に辿り着くのが一番だが、何分遠い。行きは小走りで六分を要した。
間に合わない。
自分に考えられるのはそれくらいだ。後は糸威任せになる。
当の糸威は、息一つ切れていない走りの中で、下あごに手を当てて、思案するように、
「……ふむ、水登。ここから車までの崖の目測、どれくらいだった？」
崖というのは、最初に見上げたアレだろうか。
しっかりと見た訳ではないし、正確な値は解らないものの、目測であれば、
「まあ、八あって十メーターねえ位だったな。俺の目に見えたものはよ」
「ふふ、やはりそれくらいか。？？ならば、決まってる。決定だと私は思うね」
言いたいことが分かってしまった。
学生時代、ふざけて、面白半分真面目半分でやっていたこと。
ただ、それがここで出来れば、一気に距離を稼ぐことが可能だ。
「俺たちもう若くねえんだけどな、……しゃあねえ！　？？笠邨ちゃん？　聞こえているか笠邨ちゃんよ」
「は、は、はい。き、聞こえます」

水登の背で揺れながらも、笠邨は口をしっかり動かす。
声に震えがあるのは、振動のせいなのか、怪我による物なのかは分からないが、
「ちょっと荒っぽい動きすっから、絶対、絶っ対に、俺を離すなよ？」
「は？」
笠邨は聞き返しをしたようだが、水登は聴いていない事にした。
そんな事をしている時間は無かったのだ。
せめてこれくらいは、と背負う力を少しだけ強める。
笠邨が息を僅かに詰めるが、我慢願いたい。
今するべきは全力加速。
会話で息が漏れるのは無駄の一言で斬りすてる。
その時既に二人は速度を緩めることなく、
「「とうっ！」」
決め台詞付きで崖に向かって飛んだ。
糸威に至っては両手を下方に折り曲げるポーズ付きだ。
余裕だなこいつ、と思いを抱くが、水登自身も別段驚きは無い。
昔取った杵柄。既にマスターしたことに恐れを抱く必要は皆無。
躊躇いなく、迷いなく、気構えすら彼らには無い。
空に身を投げるというその動作は、さも当然のように行われた。
「きゃあああ！！」
ただ一名、その当然を得ない者がいたが。

03

「先行する！」
「おお、頼む！」
極短い間の、一言会話。それだけで意思疎通を終えた糸威は、
「？？？？？？？っ！」
崖の側面を蹴った。地へと、加速をつける形だ。
その望みは、物理法則によってすぐさま叶えられた。瞬き一つの間に、水登と糸威の間に数メートルの開きが出来たのだ。
進み行く。
糸威の願いを聞いた法則は、今度は彼に牙をむいた。
重力という抗えぬ力に、加速も入った彼の身体は、数秒もせずに激突する。
水登の車に。
「ぬぐっ……おおっ！」
打音が響く。
重ねて、何かが拉げる音も。
糸威が崖壁をもう一度蹴って力の方向を微調整し、下に停めておいたマイクロバスの頂上部に着地したのだ。
窓枠が拉げ、ガラスに皹が入る。
斜度四十五度で足裏から行った糸威は、その衝撃に顔を渋らせながらも、頂上部の陥没個所内で完全に余力を制した。車上に留まった。
対してこちらはまだ空中にいる。先に糸威を行かせた理由は簡単。
……笠邨ちゃん居るからよ……。
糸威と同じ着地は出来ない。
あれは昔から馬鹿をやってきた自分たちだからこそ出来る、人生に置いて全く不要な技能であり、それを笠邨にさせるのは酷だ。
だが生憎、人を背負った状態で出来るモノでもない。受け身すら満

足にとれないのだ。
やれば確実に勢いを殺しきれず、車上から零れ落ちるだろう。
そうなれば自分はともかく、笠邨は負傷する。だからこそ水登は選択した。糸威に向け口を開き、
「糸威！！」
何かをしてくれ、と言うことはしない。分かっている筈だ。
いや、長年の付き合いだ。
？筈？では無い。分かっている。
確信だ。
期待が現実として返ってきた。
「……来い！」
応答と、身体の動きだ。
糸威が身体を反転させ、その勢いを持って直上に蹴りを放つ。足裏で押すような、強く速い直蹴り。ただ気になるのは軸足の震脚で、
……俺の車が？？！
更にダメージを負っている。あそこまで足がめり込んでは完全修復は不可だろう。運転には支障のないことだけが救いだ。
修理代はどうやって経費から出すか、その作戦も考えたいが、今するべきことは、
「？？？？」
集中だ。
水登は速度を持つ身を動かし、慎重に違わぬように、だが勢いを持って糸威の足裏の中心を蹴り返した。
当然、自然の摂理によって衝撃力に勝る水登の足が糸威の蹴りを弾くが、
……勢いは緩むってものよ！
その通りになった。
確かに落下の力を反力によって僅かながらも削がれた水登の身体は、それでも勢い強く車上に落下する。
硝子の破音と落下の轟音が響くが、

「??むんっ……！」
凹む車体に合わせて身体を四股踏み状態にして沈め、車上で堪え切った。
衝撃の強さは、数枚の割れた窓が示している。
糸威は股関節の動きで威力を緩和した後、足を立ち位置へ戻しており、何事もなかったように車内に向かっている。
水登は開いた窓から丁寧に笠邨を投げ込み、自身も運転席へ滑り込む。
キーをねじ込み、イグニッション。
エンジンの軌道音を耳に入れながら、ギアを入れスタート。
加速する。
スロットル全開。
推力が一気に増し車体が僅かに浮く。しかし水登は気にしない。
何故ならサイドミラーが映すつづら折りに、存在する者が確認出来たからだ。
……あの野郎……！　良いバイク乗ってやがってよ！
キツネだ。明らかな敵意を持って、オフロードバイク付きで向かってくる。
加速率は向こうが上。こちらは発進加速したばかり。このままではスピード負けだ。
変速機はマニュアルトランスミッション。己は速度に乗っていない。
それでも、
「??改造車、なめんなっ！！」
強引にいった。
ギアをトップに入れ、アクセルを踏んでエンジンを吹かす。
安全構造を無視するその動作に機械は悲鳴を上げるが、
「?????????！」
所持者の希望を叶えるため、その力を返した。
水登は己が身に推進力の反動を受けながら、無理を超えた期待に感謝し、

「？？？？？？ぬっ！」
速度に乗った。ギアが回りエンジンのパワーが車輪にまで伝わるのが実感できる。
加速は止まらずバイクを引き離す。
……行けるかよ……？
水登の疑問はすぐに答えられた。
「？？？？？？？？！」
キツネが再加速したことによって、単車が近づく。

前を行くバスをキツネは見ていた。それが加速を入れるのも。
逃がすか、と思った。
作品完成を目の前にして、それを、最後の一ピースを見逃すなんてとんでもない、と。
美術品とは作者の感性によって作られる。その感覚は人それぞれであるが、キツネはこう考えている、
……第一印象こそ全て……！
アイデアを練れば良いものが出来る、という訳ではない。
そういう者も中にはいるだろうが、自分は違う。
全てが一発勝負の中で美しさを発見し、削り出していく。それが自分だ。
ならば、折角得た第一印象を無為にするのはいけない。
……多少汚れていても、中身が無事ならなあ……。
強硬策だ。前を行くバスに追いつけないのだから仕方ない。
キツネは腰元の長物を抜いた。
白銀色の長銃を。

凹凸激しい山道の地面を蹴り飛ばし、単車が来る。
距離を詰められる。

マジかよ、と舌打ちするもそれが現実だ。
スピードメーターを確かめれば既に百は超えている。こんな狭い道で、しかも所々がつづら折りの山道ではこれが限界だ。
現在の相対距離を五十メートル。曲がり角でスピードを落とすバイクと違い、車はパワースライドで行ける。
重量による機体強度の差がここでは有り難い。
だが、水登は再度の舌打ちを隠さなかった。それは、
「……射程内かよ……！」
撃ってきたのだ。エンジン音とは明確な差がある発砲音。
その連打が後方から襲来した。

キツネの耳に入るのは撃音。
指にかかる引き金が作動し、内部で破裂音が炸裂し、ついで飛ぶ鉄弾が車に音を付ける。
それも、三連続で、だ。
……ううむ、美しさを優先したが、やはり三点バーストは良いなあ。
一度で三発とは何というお得感。気分的にも実益的にも最高だ。
弾はマガジンラック式を採用しているので、装弾の手間もバイクから片手を離すだけで済む。自分は決して兵器マニアではないが、芸術家として美と優を追求するのは在り得ることである。
作品を作る時は素手であるが、材料調達の際は重宝するな、とキツネは思いつつ、
……中々に堅い。痕が着くだけかよう。
だったら、
……弱い所、狙わせて貰うかねえ。

04

キツネの弾丸は改造マイクロバス後部を連打する。
後部扉を貫通しないが、水登の手に在るハンドルに振動という事実を渡す。加えて衝撃は下へと移り、
……車輪が……！？
爆発に近い破裂音が聞こえた。
炭素素材で強固なホイールなのに、それすらキツネの銃の前では無意味だった。
それは車の挙動に影響があることを告げる快音。ハンドルを握る手に僅かに振動が追加する。狭い道で車がぶれる。
未だここは山道。誰一人としてここを通る者はいないのでぶつかる者もいない。安心だ。
……人を払ったのだから当たり前なんだけどよ。
前もって行っていて良かった、と水登は己の好判断に満足しつつ、
「？？おい、糸威。ゆっくり休憩も良いが、そろそろ時間稼ぎを考えろよ？」
後部、乗車ドアすぐの所で席に座り、携帯食料を口に含む糸威に水登は忠告する。
この揺れの中で良く食事が出来るものだ。隣の笠邨は今にも吐きそうなのに。
ともあれ今、それはどうでもいい。
問題なのは麓の町まで直線距離にして一キロ。山道を下る正規ルートでも三キロ強。それまでに勝負をつけねば被害が拡散するということだ。
その事実を、糸威は分かっている筈だ。だからこその、先の仕込みだ。
あの場所に至るまでには約山道を下って一キロ半というとこだ。
このままでは追いつかれるのが先になる。

「……ああ、仕方ないからやるさ。仕事はする、と私は思うね」
糸威の承諾を得たことで、再び水登は操縦に気を配る。
車輪をも正確に狙ってくるキツネのお陰で、ハンドル操作に支障がある。
既に一つはやられている。後部右車輪の感触が明らかに金属になっているのだ。
下手すればすぐにでも横転。自分は運転に集中せねばならない。故に、
「攻撃の手は、お前に任せるぞ！」

笠邨は無造作に放り込まれた車内で、何とか気を取り戻していた。
それは痛みと振動による悪寒によるものだったが、その刺激は笠邨の意識を元通りに引き戻しつつあった。そんな淡い意識混濁がある中で、
……攻撃？
え？　と笠邨は思った。銃を撃ち、人を素手で引き千切る怪物相手に、この閉ざされた車内からどうやって攻撃をするのか。
頼まれ、許諾した糸威は警察では無い。武器など携帯していない。
そもそも、いくら犯人といえども、攻撃という表現はいけないのではないか。
今気にするべきことでもないかもしれないが、自分たちは市民の規範であるべき警察だ。
笠邨は、不調により体を折り曲げつつも、声だけでも届けようと、
「み、水登刑事。発言に不備が多すぎです。正当防衛と？？」
言葉が止まった。
それは、笠邨の目に在るモノが映ったから。いや、映らなかったからとも言える。
あるべき物が無いのだ。
糸威が歩いて向かった場所。

マイクロバスの後方座席。そのほとんどが取り払われていたのだ。数にして十五。
代わりと言わんばかりに、元の座席より多く鎮座している物がある。
それは、前に乗車した時には見なかった物。
見えなかった物。
「……え……？」
黒金色の兵器の数々が、新緑色の布に包まれた状態でそこにあった。
「おいおい笠邨ちゃん、今さらかよ」
笑い声が来た。何ら気にせず、気負うことなく、戸惑いすらない。
軽く、快いともとれるそんな声。
笠邨は目の前の状況との間に恐ろしい差を感じた。それを知ってか知らずか、水登は言葉を放ち続ける。
「お前は日本の最高機密、トップシークレット中のトップシークレットを見ちまったってことよ。まあ、あれだ。在りがちな事言っておくとするかよ？
？？何というか、絶対に口外するなよ？」
もし、
「万が一、口滑らせた時は、お前は死ぬ。これは脅しとかそんなんじゃなくて、事実だからよく憶えておけよ？　一応お前の人生掛かってる訳だしよ」
何気ない口調で、水登は言葉を口にした。
「ふふ、もう少し言い方を考えるべきだね、水登。この世から存在として消す、という方が正しいと、私は思うよ」
頷くことも返事をすることも出来なかった。
頭が働いていない、と笠邨は直感する。上手く考えが纏まらない。
身が竦む。唯でさえ折った身体を更に縮込め、席に座り込む。
クッションの柔らかさを尻で感じながら、掛けられた言葉を反復し理解しようとする。
言葉としては分かる。音としても分かる。だがそれが、意味に繋が

らない。
　それでもこれを、この状態を、冗談だと笑い飛ばすことは、笠邨には出来なかった。
　ただ、それだけが言えた。

　笠邨が沈黙したことで人の声が無くなった、しかしそれでも外部干渉のせいで煩い空間で、糸威が銃を選別する金属音が明らかの文字を持って響く。
その中で糸威は、息を呑み身体を緊張させる笠邨の雰囲気を感じた。同情は出来ないし、そもそもする価値もない。
何しろ、自分でここに来ることを選んでいるのだ。己の選択に？たられば？なぞ無い。
全ては自身の責任として処理される。それがこの現場だ。
ただ、そう考えても、
……やっと、やっと話したか。遅すぎる、と私は思うがね。
こうなることは予測がついていただろうに。水登のネタばらしが遅かった。
巻き込みたくないのなら、上に掛け合って何処ぞへ飛ばせばよかったのだ、と糸威は思うが、それは水登が考えるべき事だ。
どんな思考をしたのかは知らないが、腐れ縁の頭で予想するに、
……ただなるようになれ、と。
恐らく当たりだ。この少女の事は気にかけてはいても、放任していた。
ただ、彼女の性根が気に食わなかった、という心境もあるだろうし、
……昔の私達に似ている、酷似していた所もあったな。
だから、痛い目を見せた。過去に手酷い失敗をしている自分たちと同じ道に来ないように。
こちらの言を大人しく受けていれば、少なくとも恐怖することは無かった。

その上でついてくれれば、安全確実にこの事案を解決に導けただろう。
現実の結果はこの有様で、褒められたものではないが、
……いつものお節介だな。結局裏目に出てしまう。
最初に放任と決めたのなら、最後まで突き通せばよかったのだ。
それが変化したのは、
「……私のせいか、そうだな、と私は思うか……」
連打音が外で響く。その中で糸威は内心を零す。
自分が姿を見せ、力を見せた。その帰結がこれだ。
水登だけだったら、自分だけだったらこうはならなかった筈だ、と糸威は思う。そんなたらればはない、とも。
水登は自分が攻撃しろ、と言った。
……そうだな。
思考の合間に糸威は銃を取る。が、すぐに元の場所に戻す。
大量生産の銃は苦手だ。無骨で、美しくない。
これまでも銃を使うのは水登に任せてきた。
打音。
特注の弾丸を発する特注の美麗な拳銃であれば、気分的に扱い易いのに。
大量生産の弾丸は触ることすら拒否したい。多くは多くなりの美があるが、弾丸には大した特色が無い。
外部連打。
装填されているのが、特別受注の殺傷力を抑えた貫通式麻酔弾だとしても、その忌避は変わらない。
……攻撃しなければ、な。
更に糸威は考える。銃を使うのは過去に二度あった、と。
一度はどうでもいい事に、二度目は詰まらない事に。だが今回は、
……使いたくない。そう、私は思う。
しかし、それでも、現時点での結末は己が招いた物。攻撃はしなければ。

打、打打、打打打打、打打打打打。
己がいなければ発生しなかった事だ。だがここでそれを否定すれば自身が居たことを否定するのと同意だ。そんなことは許せない。だから、
「私がケリをつけるのに何ら依存は無い。依存は無いさ！」
連打音の中で己の声を明々と響かせ、糸威は動いた。

05

「……え？」
外部からの高低入り混じった打撃音が充満する中、己を取り戻し切れていない笠邨は、それでも疑問の声を挙げた。
何故なら、先程耳に届いた水登の言葉と、それを承諾した糸威の行動が、全く合致しないからだ。何で、
……何で、この人は急に絵を描いているの？
眼前で、つい最近に見た、高速の絵描きが顕現していた。

糸威の行動は迅速だった。
まず銃器を包む浅緑の布を引き抜き、宙に広げる。
空中に固定されたように残る張りを持った布に、糸威は左上腕部スリットから取り出した、画材吸着筆で塗りたくる。
描かれるのは、布を横断する一本の太い黒黄線。一秒も経たぬ間に宙で彩られた布は、やがて重力によって落ちるが、
「まだまだ……！」
筆を上空へ放り、脚部スリットからナイフを引き抜き、そのまま下から布を縦に両断。
糸威の眼前で留まる布は、落下運動を一時止め、その場で舞った。
連打が止む。
踊るように浮かぶ布を端目で確認しつつ、両の手で掴み、
「さあ、どうなるかな！」
バス後部扉を蹴り開き、布を放った。

……何！？
装填作業中のキツネが初めに抱いたのは驚きというよりは疑いで

あった。
銃撃を続け、車輪を二つ割ったが、未だバスは高速走行状態を保っている。
にも拘らず、相手は防護壁である筈の後部扉を開いた。
こちらに向かってくるのは一枚の布。かわせない。風の自由な動きを持って、しかし自分へと潜り込んできた。至近で見るが、重さは感じられない。
……陽動だなあ。
構わず突っ込んだ。視界が緑で染まる。布は己の顔に纏まりつくように漂った。
布に付着した油絵の具の臭いが少々の揺らぎを生むが、すぐさま布を接ぐことで一瞬のものへと変わる。視界が開けた先に在るのは後部を開けたバスだ。
見えるのは二つの姿。材料の少女と、自分へ一撃をくれ、大事な大事な作品を灰燼に帰そうした元同志だ。
二人は開けた扉を閉めもせず、こちらをただ見ている。
……自ら材料になるのはあり得ないなあ。じゃあ、罠かねえ。
どうだろう。前者であれば嬉しいが、そんな心変わりをする者には見えなかった。
やることの意味は分からない。だがチャンスと言えばチャンスだ。開く扉によって空気摩擦を得たバスが速度を僅かに落とす。近づいている。
こちらの手には長銃がある。このまま打ち抜けば部品は手に入る。今は木枝が邪魔で、中々打ちにくい。今も目の前に小枝があり、照準に不備をきたす。
だが、目の前に標的が居る。ならば、撃つべきだ、とキツネが銃を構えた瞬間、
「？？？？？？？っ！？」
痛覚が顔を覆った。正確に言えば鼻から口にかけて。
僅かな、とは言えない確固たる痛みが顔面を走った。次の瞬間、

「……あ……」
衝撃が来た。それほど強くない、しかしこちらの上半身をしっかり押す力。
既に己が見は、バイクと平行に倒れてしまっている。
理由はすぐに分かった。
倒れた目線の行き先。
そこには、緑の布に包まれた太い枝が、何か強い力で無理やり折られる様が見て取れた。
……緑布で注意を逸らした隙に、木枝を隠蔽しにぶつけるとはなあ……。
何と美術的か。上目で見る布には緑以外にも、気にならない程の小枝が描かれている。
最初の布の深緑により、眼がコントラストを調整した。
すぐに振り払って嗅覚の作動を抑えたものの、視覚はそんなに早く再調整されなかった。
そこに、動体視力を騙す程度にリアルな小枝が描かれた第二波だ。
……見事だなあ。
ああ、見事だ。トリックアートのような物だが、ここまで活用されるとそう思わざるを得ない。同業者としてとても見事。ただ、
……こちらもタダではやられないさあ。
バスも見えぬ不安定な状態で、キツネは射撃した。
マガジン二つ分。六発を記憶に在る車軸直上に向けて。

「ぬおおおお！？」
今日一番の撃音が来た。
ハンドルが、車輪が、機体そのものがぶれる。
……耐えられねえ！
この狭い場所で、この速度で自由を失えばどうなるかは自明。
だが、目的の場所には着いた。

判断は即座。
「どっかに伏せて何か掴め！」
暴れるハンドルを力づくで右一杯で固定。次いで己の身体をシートに押し付け踏ん張り体制に。その上でハンドブレーキをかけ大破間近の後輪をロック。
強制的に横スライドさせた。身体がぶれる。
ミラーを確認すれば糸威は走り笠邨の首根っこを掴むと、前方座席の間へと身を飛ばしていた。即ち何とかなった。
ドリフトは続く。
バスは地面を削り、木々の根を抉り、岩壁に傷を作りながらも、山道に垂直になる形、半回転で停車した。
前方、回転の支点となっていた水登は、僅かに気分の悪さと、
「……アクセルの踏み外しで捻ったかよ……？」
足首の痛みを得ながら立ち上がり、
「おーい、糸威、笠邨ちゃん、無事かよ？」
後方、席の隙間から起き上がるのは糸威と、
「ああ、私もお嬢ちゃんも無事だ。ほら」
糸威の手に首根っこを掴まれ、持ち上げられている笠邨だ。
彼女は弱めの咳き込みを繰り返した後、
「く、苦しいです。糸威さん」
「贅沢を言わないでくれ。これが私の最良だ、最善だ、と私は思う」
見た目はアレだが、糸威の行動は有り難い、と水登は思う。
これならば、後頭部に腕が回る為危険は減るし、力を入れやすいので二次的負傷も防げる。無理やり伏せさせ、しかし怪我をさせないようにそんな持ち方にしたのだろう。
過保護過保護と此方に言う割に、しっかりと守っている辺りに水登は苦笑を洩らすが、
「ふふ、水登。気持ち悪い笑顔を爆発させるのは構わないが、そろそろ動かないと不味いのではないかね。……あれを見ろ」
糸威が指示した先、窓ガラスの向こう。

そこにはバイクから振り落とされたキツネが、身体の行く個所に擦り傷を作りながらもこちらに歩み寄って来るのが見えた。
「おいおい、百キロで落ちてあれ位かよ。キツイな、これ」
「昔と言っていること変わらないぞ、水登。今更過ぎる、と私は思う」
違いねえ、と水登が浮かべるのはやはり笑み。
彼は散らばった銃器の中から一丁の長銃、M24を抜き出し、
「じゃあ、行くか。笠邨ちゃんはここで待ってるか？」
組み立てつつ、今回のコンビ相手に問い掛けた。

笠邨は、水登の問いの真意に感づいていた。いや、ここまで来て分からない方がおかしい。逃げようと思えば逃げられる。
その加味して彼は聞いているのだ。此方へと進む気はあるか、と
正義を語るモノを、正義を謳うモノが倒す場に踏み入る勇気はあるか、と。
……怖い。
笠邨は過去を感じていた。
あの小屋での一撃。二人が救助してくれなければ死んでいただろう。
勝手な先走り。不用意な行動が引き起こした己自身の不備。
……怖いですよ。
尋常ならざる世界。
おかしい、と初見で判断で来たこの場。
入るも入らないも、自分の選択で決められる。水登が問うとはそういうことなのだ。
どうしようか、と笠邨は思う。
逃げたい、とまず身体が言った。これ以上の恐怖を味わいたくない、とそう言った。
帰りたい、と脳が訴える。こんな状況に身を置いておきたくない、

とそう訴えた。
だが、
……歩き出すべきですよね。
意思が残った。逃げるな、と、立ち向かえ、と、負けず嫌いの意思が発言した。
あれだけ正義正義言っておいて、市民を守るなどと抜かしておいて、この様だ。
その上、ここで逃げてしまっては、自分は二度と立ち上がれない。
何をどれだけ成功させても、ここでの逃走は永遠に残る。それは許せない事だ。
間違いは正すと大言壮語した自分を貶すことになる。
故に、答えは一つだった。笠邨はゆっくりと首を横に振り、
「最後まで、見届けさせて貰いますよ……」
笠邨の返答に、水登は僅かに目を丸くさせ、だが直ぐに微笑みに変化した。
「いい度胸だよ。そこらの男なら惚れちまうな、ったくよ」
「ふふ、唾付けておけばいいのではないかね、水登。
??っと本格的に来たぞ」
キツネが相対距離百メートルを切った。

06

水登と糸威はバスの乗車口から飛び降りた。糸威が走り行く。
追うように笠邨も降りるが、その場で待機。
水登はＭ２４の持ちを確認しつつ、腰を落として走り始める。
右足に痛痒を感じるが構わない。
既に糸威は接敵間近だ。
キツネの気は今、糸威に逸れている。此方の確認も終わっている。
なら、
「撃つべきだよな……！」
照準はキツネの右肩。
吹き飛ばす気で打ち貫く。
手加減は無用だ。
それは当然。
狙え。
接敵が完了してしまえば入り乱れて、上手く撃てなくなる。
ポインタを合わせろ。
素早く。
迅速に。
高速で行え。
意識はスコープの中だ。
前後左右を気にするな。
昔と同じだ。
撃つことを考えろ。
外すな。外すことは考えるな。
全てを撃つ事に注げは外すことはあり得ない。
当てる、と意思を荒げる必要すらない。
ただ一点に合わせろ。
狙い。照準。

キツネ。右肩。
射線。クリア。
撃て。
「喰らえよ、ライフル弾！」
M２４から放たれるのは高速の一撃。
エアーウエイトの速度をはるかに凌駕する弾丸だ。
至近でかわすことは不可能。
音の壁を突き破って進む弾は、確実にキツネの右肩を吹き飛ばす。
筈だった。

対してキツネは、前にいる先客よりも弾丸を出迎えた。
「……ああ！」
咆哮一閃。
鋭い叫びと共にキツネは動いた。
右拳を肘を曲げたまま前に出し、外側へ捻じるように回転を付ける。
鉄弾が向かう。
それに合わせるようにして捻じりを解く。すると反力により、腕の肉が内側方向へ回転する。
弾が当たる。回転中の手の甲に。
金属が削り合う。
火花が散る。舞う。
「？？？？っ！」
競り合い結果、起きた現象は二つ。
キツネは銃弾を弾いた。手の甲に、線状の穴を残しながらも確かに凌いだ。
避けたのではない。
純粋な力と知識をもってして、弾の軌道を外させたのだ。
行く手を変えられた高速弾は、キツネ背後の気にめり込み、その

動きを止めた。

一瞬の出来事を水登は知覚出来なかった。ただ事実だけは当然伝わり、

「うおお！　マジかよ！？」

あまりの出来事に叫んでしまう。まがいなりにも本日のベストショットだ。

叫びに呼応してか、糸威は動きを止め、

「これは駄目だな、水登。大人しく下がっていろ、下がるべきだ、と私は思う」

そうさせて貰う。今可能なこちらの役目は、援護射撃が精一杯だ。

だが、相手がライフルの、手持ちで最速の弾丸軌道を反らせるのなら、

……糸威に被弾の可能性が出て来るからな。

同士撃ちなどするくらいなら、片方がきっぱり諦めた方が賢明だ。

この場合では、その片割れが自分であった。ただそれだけのこと。

「……一人で行けるのかよ？」

「行くしかないだろう、そうするしかない、と私は思うね。まあ、梃子摺るだろうけど」

水登は頭を掻き、吐息にまた吐息を重ねて、

「殺すなよ？　ちゃんと法で裁くんだからよ」

「出来るのかい？　いや、君に証明できるのかい？　この男の行為を」

冷酷とも言える視線で、糸威はこちらを貫く。

そうだな、と水登は己にしか聞こえぬ独白を一度し、そうだ、と二度繰り返した後、

「やって見せるさ。？？例え無理でもやってやるよ！」

昔からこうだ。法で無理なら糸威が、法が通るなら水登が、と無茶苦茶な、それでも己の正義に則った分担をしてやってきた。
故に、自分は何も出来なかった。人の数だけ正義があり、水登の場合は法であっただけ。
水登の正義はこの世の全てに縛られた。
法は規範だ。基本があるならば、例外は確実に生まれる。例外を相手にしている以上、通用しないのは自明の理。
今回も同じである。ただ、昔と大きく違うのは、
……俺が力を持っていることよ……！
裁いてみせる、と水登は力を込める。絶対に、昔の失敗は繰り返さない、と。
糸威に頼っておきながら、自分は何もせず、出来ずにそのままでいたりはしない。
後始末くらいは出来る様な今がある。だから、
「お前は安心して、そいつをぶっ倒せ！」
水登の叫びと糸威の頷きを合図として、最後の相対が為された。

立場としての協力者

キツネが来る。
銃は無く、素手。その点は救いになるかどうかは解らない。
常人ならざるモノが、自分をバラバラにしようと突っ込んでくる姿が目に映り、
……良い感じ、だ。
まるで、昔のようだ、と糸威は思い出す。
過去に得ていた興奮を、今に通じているそれと繋ぎ合わせて脳裏に浮かべる。
ドキドキする。だがスリルとは違う。
己をこの場に置くという状況が、様々な想像を脳裏で掻き立てる。
非力な自分がどうすれば生き残れるのか、どうすれば楽しくあり続けられるのか。
「ああ、ワクワクする。胸がドキドキでワクワクだ、と私は思う！」
直線でキツネが来た。右の五指を開きこちらの肉を削ぎ取ろうとしている。
速い。しかし、避ける。
筆を握るモノとして、その微細な感覚を大事にする者として、さらには身体能力の差から総じて、
「殴り合いは出来ぬよ……！」
糸威は動く。突き立てられる右に対して回り込むように足を動かす。
右手が追って来る。が、二歩のサイドステップで、腕一本分の距離を取っている。
当たらない。
キツネが一歩をその場で踏む。勢いを消し、こちらへ方向を転換する為だ。
僅かな動きの空白。

「ふふ、じゃあ、こちらの番だ……」
糸威は行動した。

キツネの視界に映ったのは、元同志がその場に足裏を打ち込んだ姿だった。
何を、と疑問する間も、思案する暇もなく、それは来た。
己の上から。
「木杭……いや杵かあ！？」
直径五十センチ程の木々を組み合わせた杵。しかし先端を鋭利にしたそれが上空から円弧を描いて降って来た。
柄の部分には蔦のような縄が引っ掛かっており、緑の一線が行く先をキツネの目は捉えた。
元同志の足元。そこに撓んだ縄の群が存在していた。
「ブービートラップかあ！」
それも簡易式。ワンアクションで作動するタイプだ。
頭上に迫る木杭。流石は元同志。杵の円弧軌道が美しい。だが、
「この程度では、なあ？」
受け止めた。
大槌の振り下ろしと相違ない一撃を無造作に、片手で止めたのだ。
無理はせず、ただ己の力量を判断した上での力技。
下降する打撃より、構え打ち上げた膂力の方が強かった。それだけだ。
キツネは杵を握り締め、五指を減り込ませた上で、脇に捨てた。
「……っ！」
息を呑む声がした。
それは、自分の材料となる少女が微かに鳴らした音だ。やっと理解が追い付いたのか、驚愕と呆けを混ぜた表情をしている。だが、それ以上に気になるのは、
……余裕綽々な元同志と刑事さんだよなあ。

こちらが絡め手を一つ乗り越えたというのに、笑みを崩さない。
それを慢心と、キツネは捉えなかった。
……まあ、幾つかあるのだろうなあ。これからの行く先にはよう。
先程、元同志の元へ向かおうと一歩踏んだら攻撃が来た。
ならば彼に向かうごとに来るのだろう。
相対距離は三十メートル強。駆ければ三秒もかからない。
ならば、行こう、とキツネは決断した。
元同志が己の芸術を持って此方を制しに来ている。
「だったら、答えようかあ！」
決断の一歩を踏んだ。
勿論、全力で。

……来たか、そう来ると私は思っていたよ。
乗って来るだろう、と。
過去の材料集めを見るに、隠れた自己顕示欲があるのは分かっている。何故なら、
「私も同じだからな……！」
そうだ。キツネが自分を同志と呼んだのも、それが一因だ。
芸術家は己を、我と言う存在を形にして見せようとする。
殺人衝動にまでは至らずとも、そこまでは結局の所、同一でしかない、と糸威は判断している。だからこそ、
……分かる。こちらを、同等と見なすその気持ちが。
来ている。
キツネが、異常者が、己と同類な人外が此方へ駆け寄ろうとしている。
同じであるから、互いに試したくなる。
彼我の身体能力差は明らか。掴まれれば毟られ、終わる。
掴めば相手の勝ちで、留められなければ自分の負け。
至極単純な勝負。

逃げは無いと断言出来る。同志故の過信か、と糸威は思いつつ、だが歯を見せる深い笑いを顔に作り、
「さあ、寄らば断ち切る罠の雨。芸術家らしく抜けてみろ！」

糸威が己が声を轟かせる中、笠邨は乗車口に腰をかけその様子を見ていた。
否。どちらかというと、眼に映していた、と表現した方が良い。
彼女に近づく影が一つある。
影が地を踏みしめる音に気付き、笠邨が振り返ると、
「……み、水登刑事。どうしたんですか……？」
肩に長銃を背負い、残る手で紙袋を抱えた水登がそこに立っていた。
「笠邨ちゃん、糸威の言葉聞いてなかったのかよ？　俺は後方待機だよ」
そんな事を行っていた気もするが、右も左も分からない精神状態なのだ。
聞いて理解するだけのことが、こんなにも難しくなるとは。
……精神力って大事ですねー。
心中でゆったり語れるようになったことから自分も大分順応してきたのだろう。
人間って凄い、と感心していると、
「しかし、笠邨ちゃん。アイツどうだよ？　決め台詞吐いて格好付けてるがよ」
「何というか、物静かな人だと思っていたのに。……男性は皆、あんな風に熱いのが好きなんですね」
「ははっ、そんな感想を持てるまでになったか。成長速えなホントによ。くははっ」
声を挙げて水登は笑う。
声を抑えきれぬ笑いを一頻り続け、ふう、と落ち着いた水登は手

元の紙袋を漁り、取り出すのは肉まんだ。
正方形のケース上段部に本体は入り、下部に火薬と簡易温化装置が組み込まれている最新式携帯食であるが、
「やっぱ、持ってきて正解。腹は何処でも減るもんだよっと」
水登は下部の紐を引き、火薬に点火。肉まんを温め始めた。
「……よくこの状況で、食事できますね？」
「あっちはあっちで乱闘。こっちは終わるまで休憩。役割分担って奴よ」
「だったら、今すぐ逃げれば……」
「ばーか。逃げ切れる訳ないだろうがよ。見てなかったのか、あの阿呆みたいな運動能力をよ」
それに
「アイツ置いて逃げるのは、それこそ出来ねえよ」
水登は言いつつも、手元の肉まんから目を離さない。
シリアスなのかそうじゃないのかはっきりして欲しい。
糸威といると疲れる、と目の前の男は言っていたが、そっくりそのまま返してあげたいくらいだ。
暴言を吐いてしまおうかどうか迷っていると、不意に真面目顔になり、
「ま、どうするにしたって、今はアイツ任せなのは変わんねえよ。結構色々仕込んでいたみたいだしよ？？っと、良い感じ。一つ食うか？」
要りません、とやや乱暴に断りながら、笠邨は前を見る。
高速で動くキツネと、対して不動の糸威を。

02

キツネが足を動かす中、糸威は考える。
……一つ目は囮。
罠を使うモノにとって、罠の存在を気付かせないことは重要だ。
が、
それ以上に罠を意識させることは必須である。
意識する、という行為は、どこかへの認識が薄くなることと同意だ。
一点集中は、必然的に周囲に対して無防備になる。それと同じ。
その意識の隙間を縫って罠をぶち込む。それが常套手段。
……だから、掛かれ。
キツネが新たな一歩を踏む。その一歩は、反力を返さない。
木根の窪みを利用した空床だ。
上から草を被せただけのごく単純な物。しかし、この林、緑あふれる空間では絶大な効果を発揮する。
キツネの右足が踏み落ちる。落下は膝下までだが、加速する体にとっては負荷以外の何でもない。
自身の速度で足を捻るなり、打撃を受けるなりする筈だ。
普通であれば。
キツネは普通では無かった。
地面ごと窪みを吹き飛ばされた。土塊が散弾のような速度で散らばっていく。
土弾が掠めていき、服を裂き、皮膚を切る。だが糸威は動かない。
圧倒的力技。
地面が抉れ、そこを足場として加速を踏む。
強引だが、罠を突破したのは事実。囮とはいえ効果的に作った物だが、
……こうもあっさりとは。
負ける気は無い。毛頭死ぬ気も無い。

だから、という言葉を使って糸威は気を引き締める。
罠はまだ、ある。

キツネは駆ける。
地面を爆発させ、ある時は草木を踏み捩り、前へと進行する。
前進する彼に二の矢が向かってきた。
窪みを踏んだことにより作動する射撃だろう。先程、地面をけり進んだ時、明らかに土では無い感触を足が得た。
何かを噛んだ感じがしたが、恐らくはこれの作動装置。
木製の矢が二十、金属製の矢が十、折り重なることなく飛来する。
……文字通りの二の矢かよう。
元同志のセンスには脱帽だ。
しかし、この連鎖式トラップ。先のせいで、体勢が悪い。
そしてこの矢、面を刺突している。受け切ることは出来ない。流石に刺されば無事では済まない。元同志だといのに容赦がない。
防御不可なら、可能な対応を瞬時に探す。そしてヒット。すぐさま実行する。
「……らあっ！」
単純な横っ跳び。
地がまた爆発するが、問題無い。
加速力は得ている。矢の範囲外、左奥へと跳躍。
五メートルをワンステップで移動したキツネは、身を振り、足踏みすることで横方向への慣性をキャンセル。
足踏みは二度行われた。
その二度目の終わり際、
「うっわあ、これは、流石になあ」
最大の一撃が来た。
研磨された大木杭、まるで針のように鋭くなった先端が、頭上から押し貫こうと降ってきた。

……雨と言った意味はこれかあ……。
木製の巨針が降下する。

……二つ目は誘導だ！
糸威は冷静に内心で叫ぶ。
上手く行った。
線状の攻撃では上下左右の判断が生まれる為、誘導には向かない。
故に、ここは上下の選択肢を削ることが出来る、面だ。
更には窪みのお陰で、右に身体が流れていた。
反動を得るためには、右足で地面を蹴るしかない。左誘導も成功。
そして、この巨大な針。
……三つ目は本命！
罠の三大原則だ。決して一発で決まると判断するな。
自惚れと過信は罠の大敵だ。
準備に準備を重ねて作りだした罠の群。二度のトラップを抜けて、
いま得物が本命に掛かった。
「行け……！」
唸るように叫ぶ。当たれ、と当たるべきだ、と。
これがキメの一撃だ。
外れる訳が無い。そうなるように設定してきた。
順序も、タイミングも、感覚も、揺らしも、全てがこれの為。
そして、今この時が、そのピークだ。
これだけの準備を十全にした。だから、
「……当たる」
その通りになった。
命中した。
キツネの広げた手のひらに。

……痛いなあ、もう。
キツネは自分の手が気に貫かれる様子を目視していた。
中心の皮膚を押し込み、抵抗が限界を迎えて皮膚と肉が切れ、一点に掛かる強い圧力により骨が拉げた。
とても痛い。アルミホイルを奥歯で思いきり噛んだときより痛い。
しかし、痛覚を刺激されただけだ。
「僕は捕まっていないよう？」
貫きは受け止めへと変わった。

緊急回避。
それが本命が引き起こした結論だ。
命を、身体の大部分を守る為に、身体の一部を盾にした。
生物としてはごく自然の事であり、その自然が反射的に成されたのだ。
巨針は、キツネの掌を貫くが、
「……縫い止められん……！」
止められた。
完成の衝撃すら逃がされた。最早大木に威力は残っていない。
投げ捨てられるキツネの足下に。
人外の化け物は、その大木に足をかけスターティングブロックに役目を変更。
加速跳躍。
此方への距離は約十五メートル。
一足の間合いになった。
速度は目視可能。だが、豪速。
此方に手を伸ばし、あわよくば貫くつもりだろうか。
手刀が腰だめに構えられている。
自分の速度では回避不能。
ただ、忘れてはいけない。

自分は罠の戦いを主にしていると。

キツネは勝負の一歩を踏んだ。糸威の眼前で震脚。
決定打になるであろう右手を大きく振りかざして腰を回す。
その一歩は、確かに一撃の足がかりになった。
「あ……？」
糸威の一撃の。

く、と糸威は漏れる嘲笑を堪えることが出来なかった。
……四つ目はド本命だ！
罠の基本。勝つと思った瞬間にこそ、仕込め、だ。
キツネの一歩は、ド本命に掛かる物だった。
それは一つ目と同じ、反力を返さない落とし穴。
ただ、二メートル程の地割れを利用し、底面を鋭角の竹や木で飾った、大規模な物。
完成まで十数分もかかってしまった大作だ。
その大作に、足を突っ込むキツネは、
「なあっ！？」
この程度で驚くとは甘いな、と糸威は笑みを湛えて、己に言い聞かせるように呟く。
ちゃんとヒントは与えていた。
一つ目から大げさに表情を表わし、三つ目にあれだけの手間をかけ、何よりも初めに言った筈だ。
……雨を避けろ、と。そしてこれは罠だ、と。
逆意を考えれば分かる筈だ。そのまま信じ、突き進むのは馬鹿である。
加えて、自分は正直者だ。だから、
「……宣言通り雨を降らしてやろう」

矢の豪雨を。
着々と制作した金属矢六十本。
落とし穴直上の大樹の枝を撓らせ、取り付けたそれを今こそ解放した。
速度は弾丸に劣るが、空中でどれだけ回避出来るか。
とても見ものだ。だからこそ、言ってやる。
「？？落ちろ、馬鹿キツネ」
く、と心から追加で来る高笑いを糸威は抑えきれずに零しながら、糸威は踵を返す。
もう勝負は決まったとでも言うように。
金属や木による無数の打音が反響する。
結果として起きた事実は、
「……あ……！」
背後から呻き声が一つ響いただけだった。

……終わったの？
笠邨は半信半疑で、勝負の帰結を見届けていた。
糸威はもう穴の中を見もせずに、此方へ歩いている。
確かに落とし穴にはまった状態で、あの矢の雨と逃れる術は無い。
呻きも聞こえる。
しかし、それでも、
……怖いですよ……。
何か、胸騒ぎがする。
隣にいた水登が、ハイタッチのポーズを作り糸威を迎え入れようとしているが、嫌な予感がする。
気のせいであって欲しい、と笠邨は思う。
糸威はやや疲れているように見えるし、何よりあれだけの仕込みをしていたのだ。
あれ程の罠、作動確率の演算含みでどれだけの時間が掛かったこ

とか。
学生時代、サバイバルゲームを嗜んでいた時に勉強した知識をフル動員しても、作製は簡単ではない筈だ。
自分が先走ってから準備したのなら、これだけの量でも驚くべきことで、何時の間にそんな事を、周到な準備を敷いていたのかは糸威には全く知る由もないが、
……これを凌ぎ切られたら、打つ手が残っていなくとも頷けます……。
全ては自分の予想、妄想でしかないが、
……叶わないで欲しい。
本心からそう願った。
その願いは、裏切られた。
勿論、悪い方に。
糸威の背後、落とし穴から姿が一つ、風のように飛び出した。
風は、身体の行く個所にも赤を纏い、滲ませ、零しながら、速度を発揮した。
「糸威さん、まだ！」
笠邨に出来たのは、声を出すことだけだった。
その忠告の声より早く、キツネは動いていた。
高速。
糸威が振り返る間もなく肉薄し、
「……取った……！」
その手で、糸威の右腕をしっかりと掴んだのだ。

03

「この腕は、最後のピースは、……僕の物だ！！」
裂ける。そんな力の込め方で、キツネに右腕を引かれた。
いや、捻じ引かれる。ワニの噛み付きのように回転まで加えているのだ。
最初に袖が裂かれ、続いて肉体に負荷が掛かる。
非常に強い力だ。握られた部分の肉が埋まり、痛覚によって腕力の強さを思い知る。
引っ張られる。逃れられない。
抗うことすら無駄だと判断出来る。判断に一秒もかからない。
彼我の差を直に感じて分かった。
この力に対抗した上で、腕を振り払うことは不可能だ。
どうするべきか、と糸威は考えるが、導かれる答えは一つで、
……仕方ない、諦めよう。
決めた。
ここで綱引きをやっていてもどうしようもないし、続ければこちらが負けるのだ。
であれば、さっさとキツネの要求を叶えてやろうと、
「そんなに欲しいのなら貸すが、……後で返してもらうよ？　高級品なのでね」
外した。
断裂したのではない。毟られたのでもない。
糸威の腕が、肩口から離れたのだ。
それこそ、作り物のように、あっさりと。

……違う
キツネは己の手の内の感触を確かめていた。

在るのは本体と別たれた腕。未だ温かく、脈すら打っている。
しかし出血もしていなければ、所持者は痛みを得た素振りすらない。
キツネは見た。その理屈を。
「……生身じゃあ、ない……？」
服を肌蹴た元同志の肩に、捻子や格子が密集していたのだ。
肩の中央を空洞とし、腕の外円には合一するための物であろう、反り返しや突起が無数に存在する。腕の方にも似たような機械類が付属していた。
よく見れば、腕の彼方此方に灰色の線が薄く見えている。
「義腕……！」
「ふふ、驚いたかい？　驚愕したかい？　正義の代償に得たこれに」
目の前の男は、笑って、
「世界の技術は進んでいるんだよ？　君が思っている以上にね」
ラッシュが来た。
左手一本の、しかし硬度は生身と桁が違う、鉄の硬さを持った拳。
連打される。
機械的に、正確に、一秒単位で何発も、人間では在り得ない速度で、
「さあ、どうだい？　私の義碗は良いものだろう？　良い物だと、私は思うがね！」
顔に、腹に、胸に、肩に、首に、下腹部に、糸威の腕が届く場所すべてに打撃された。
痛みは纏まって、既に感知できない。
地に足を突いているのか、浮いているのかも上手く理解出来ない。
ただ殴られ、打たれ、砕かれ、吹き飛ばされる。
キツネが見た最後の光景は、煙を湛えた糸威の左拳だった。

糸威が拳の振りかぶりを止めたのは、右腕を取られて七秒後の事だった。
左腕は加速熱からか湯気が立ち、特に肩口は白煙が待っている。

力無く倒れ伏すキツネに意識が残っていないのは、誰から見ても明らかであった。
「ほーい、逮捕よ」
水登はそんなキツネの腕を力で挙げ、手錠を付ける。
笠邨は、目の前の出来事を呆然と見るだけしか出来なかった。
「ふうむ、やはり私もまだまだ未熟だな、この程度で腕を一本奪われるとは。猛省するべきだ、と私は思う」
自戒する糸威の横、未だ腰を地に置いて座り込む笠邨は、転がったキツネの手から零れ落ちた糸威の腕を手に取る。
各部各所を確かめるように握る。
指も手首も、上下腕部も暖かい。全て人のぬくもりだ。しかし、接合部が存在し、僅かな微細動を感じられる。
もっと確かめようとした矢先、
「ふふ、拾ってくれて有り難う」
頭上から持ち主に攫われた。顔の前を通る腕からは明らかな高熱が感じられた。
手に戻った義腕を、糸威は一周させて眺める。点検だろうか。
疑問の主体はそんな事では無い、と笠邨は首を振り、意識をアジャストさせ、
「い、糸威さん。その腕は、……一体？」
肉の感触を持った、それでいて普通の腕よりも高速駆動を可能とする。
そんな義腕。
今の技術であり得る筈が無い、と笠邨は判断する。
「やれやれ、随分と君は聴きたがりだねお嬢ちゃん。それは興味や好奇心というレベルでは無い、と私は思うよ？」
「ご、御免なさい、でも……！」
笠邨は諦めなかった。
何故、と何度目か分からない疑問視が浮かんで来る。
だが、問わない訳にはいかなかった。自分にも関係のある言葉を

聞いたのだから。
こんな怪我を負った経緯、こんな義腕を持つ理由。そして、
「正義の代償って……？」
糸威は数秒、思考を纏めているのか、眼を瞑り、
「ま、面倒な昔の証、って所だね。そんな感じだ、と私は思う」
頷きながらそう言った。
……この人も、昔って……。
水登も言っていた。昔とはなんなのであろうか。
何があればこんな状況を味わうことになるのか。
過去に何が起きれば、正義の見方が変わるのか。
何を経験すれば、
……こんな体になってしまうんですか！？
両腕を失う。相当な事だ。
それが高機能な義腕に変わることも、また相当。
経緯を尋ねようとすれば、それは単なる好奇心。無粋に人の過去を探ることになる。
聞きたい、という欲求が、生まれては自制される。
欲と意思の繰り返しが続く中、ふと笠邨は感じた。
……あれ、声が……。
出ない。それどころか、身体も動かない。
自分は倒れている、と気付くのに数秒かかった。
解る。原因の理解は出来る。
今まで味わったことのない生命の危機。狙われる恐怖。
知るべきで在ったのか無かったのかという迷い。
圧倒的攻防への不安。
二人をこの場へ無理に呼んでしまった後悔。
異常な未経験という濃密で粘り気のあるストレスが、滝のように押し寄せてきた、僅か一時間にも満たない間。
ずっと緊張を保ってきた。反動が出ない筈が無かった。
眠い。瞼が落ちそうになる。

……まだ、まだ聞きたいことが……。
あるのに、と願っても、声は口の中で粘ったまま。頭が重い。
無理やり言おうと、喉元に力を入れる。
「……あ……」
出ない。無理だ。瞼が閉じる。不甲斐なさにまた涙が浮かぶ。
滴を掬う手が、顔に触れた。体温よりも遥かに暖かいそんな手。
眼下を拭う熱を心地いい、と感じ、眠りに落ちる寸前、言葉が耳に入った。
「……これ以上を知りたいのなら、もう少し水登と会話をしてみることだ。君には時間が沢山でもあるんだから。だから、今は休見給えよ
??ああそれと、忠告有り難う。君の善意は受け取っておくよ。……笠邨君」
熱が離れると同時、笠邨の意識も離れていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6727r/

御伽のロカイオ

2011年10月8日21時31分発行